

長野県松本市

TAKEBUCHIMINAMIHARA

竹泷南原遺跡II

——緊急発掘調査報告書——

2000.3

松本市教育委員会

長野県松本市

TAKEBUCHIMINAMIHARA

竹泷南原遺跡II

—— 緊急発掘調査報告書 ——

2000.3

松本市教育委員会

序

竹渕南原遺跡は松本市の南部、竹渕地区に位置します。昭和60年に初めての発掘調査が行われ、埋蔵文化財が確認されております。

このたび当地に、土地区画整理事業が計画されたため、松本市では松本市竹渕西土地区画整理組合から発掘調査の委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は市教育委員会によって、平成10年11月から平成11年3月にかけて行われました。折からの寒風の中での調査となりましたが、関係の皆様の御尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、弥生時代から中世にわたる集落址を発見することができました。これらは、今後地域の歴史解明に大変役立つ資料になることと思われま

す。しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにもとない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことです。発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大な御理解と御協力をいただいた松本市竹渕西土地区画整理組合の皆様、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

松本市教育委員会 教育長 竹 淵 公 章

例 言

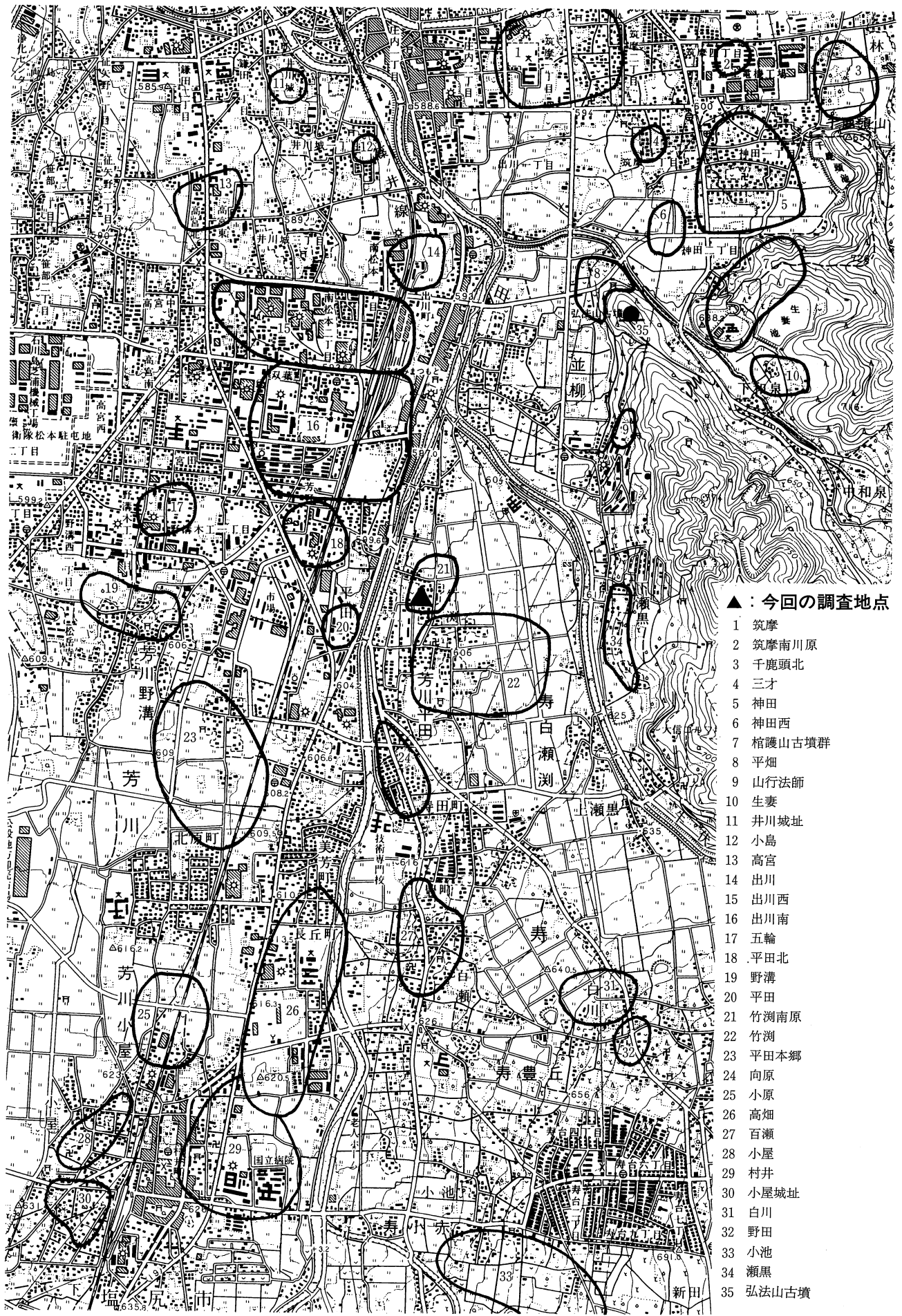
- 1 本書は、平成10年11月18日～平成11年3月12日に実施された松本市寿北に所在する竹瀨南原遺跡第2次調査の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は松本市竹瀨西土地区画整理組合による土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査であり、松本市竹瀨西土地区画整理組合より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、I：事務局、V-2：太田圭郁、付編：パリノ・サーヴェイ株式会社、その他を田多井用章が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。
遺物洗浄：百瀬二三子
遺物保存処理・復原：五十嵐周子、内沢紀代子
遺構図整理：石合英子
遺物実測：菊池直哉、竹内直美、竹平悦子、洞沢文江、堀久士、松尾明恵
トレース・版組：太田圭郁、櫻井了、田多井用章、林和子、堀久士
総括・編集：田多井用章
- 5 本書で使用した遺構の略称は以下の通りである。
竪穴住居址→住、土坑→土、ピット→P
- 6 図中で用いた方位記号は全て磁北を用いている。
- 7 調査実施及び本報告書作成にあたり、以下の方々から協力・教示を得た。記して感謝申し上げる。(五十音順、敬称略)
竹内靖長、野村一寿、森義直
- 8 遺構・遺物の記述中で用いた古代・中世の時期区分や遺構・遺物の分類、用語などの多くは下記文献に拠っている。
(財)長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内1—総論編』
- 9 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に収蔵されている。

目次

序
例言
目次

I 調査の経緯	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 調査の概要	3
IV 遺構	
1. 概要	6
2. 竪穴住居址	
(1) 弥生時代末～古墳時代前期の竪穴住居址	6
(2) 奈良・平安時代の竪穴住居址	7
(3) 中世の竪穴住居址	10
3. 竪穴状遺構	11
4. 掘立柱建物址	12
5. 井戸	13
6. 墓址	14
7. 土坑・ピット	14
8. 溝址	14
V 遺物	
1. 土器・陶磁器	
(1) 弥生時代末～古墳時代前期の土器	20
(2) 奈良・平安時代の土器・陶器	21
(3) 中世の土器・陶磁器	24
2. 石器	25
3. 金属器	26
4. 銭貨	26
VI 調査のまとめ	40
付編	42

写真図版
報告書抄録



第1図 調査地点と周辺の遺跡

Ⅰ 調査の経緯

1. 調査に至る経過

竹瀝南原遺跡は、松本市街地の南東、竹瀝地区に位置する遺跡である。昭和60年に第1次発掘調査が行われ、中世の遺構が確認されているが、明確な集落址を確認するには至らなかった。そうした中、松本市竹瀝西土地地区画整理組合による土地地区画整理事業が計画され、事業地が周知の遺跡である竹瀝南原遺跡と竹瀝遺跡に近接してしており、埋蔵文化財を包蔵する可能性があった。このため事業者と埋蔵文化財の保護について協議を行い、試掘調査を実施して埋蔵文化財の有無を確認することとし、その結果を踏まえ再度協議を行うこととなった。

試掘調査は松本市教育委員会により実施され、事業予定地のほぼ全体を対象としたが、事業予定地の東部において、平安時代を中心とした遺構・遺物が確認された。この結果を踏まえ、再度遺跡の保護協議を行い、区画整理事業により埋蔵文化財が破壊される範囲について発掘調査を行って遺跡の記録保存を図ることとなった。発掘調査及びこれに係る事務処理については松本市教育委員会が実施することとし、松本市竹瀝西土地地区画整理組合と松本市の間に平成10年11月2日付けで発掘調査業務の委託契約が締結された。現地での発掘調査は平成10年11月18日～平成11年3月12日まで行われた。発掘調査終了後は、引き続き考古博物館において、整理作業を行い、平成11年度は整理作業および本報告書の作成を行った。

2. 調査体制

調査団長 松本市教育長 守屋立秋（～6.30）、舟田智理（7.1～10.15）、竹淵公章（11.1～）

調査担当者 田多井用章、長畦和正、百瀬秀俊

調査員 今村克、松尾明恵

協力者 青木雅志、浅井信興、五十嵐周子、石合英子、今井太成、入山正男、内沢紀代子、臼井秀明、開嶋八重子、加島泰祐、菊池直哉、河野清司、窪田瑞恵、鈴木幸子、鷲見昇司、高橋昭雄、高橋登喜雄、竹内直美、竹平悦子、寺嶋実、中上昇一、中村安雄、中谷高志、巾崎助治、畑茂、林和子、福島勝、藤本利子、布山洋、堀久士、前澤保亀、真々部まさ子、丸山喜和子、丸山恵子、道浦久美子、百瀬二三子、横山清、横山真理、米山禎興

事務局

〈平成10年度〉

松本市教育委員会 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、村田正幸（文化財担当係長）、久保田剛、近藤潔、上條まゆみ

〈平成11年度〉

松本市教育委員会 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、松井敬治（文化課長補佐）、久保田剛、武井義正、酒井まゆみ

II 遺跡の位置と環境

竹淵南原遺跡は、現在の松本市寿北、竹淵集落に位置する。標高は約600m前後の平坦な地形で、調査地点は水田および畑として利用されていた。周辺は古くからの集落に加え、近年開発された宅地に囲まれている。

地形的には、田川の右岸にあり、すぐ東には牛伏川が流れており、両河川の合流点から南へ約1kmほどの場所にあり、牛伏川扇状地の末端に位置する。この合流点の南に広がる両河川に挟まれた一帯は、とりわけ牛伏川の活動の影響を強く受けている。今回の調査地点では、表土下に黒褐色の湿地性の堆積と思われる土層が見られたが、所々に小規模な自然流路と思われる砂礫層も分布していた。また、今回の調査地点の西側に隣接する水田を試掘調査したが、ここでは水田耕作土の直下に砂層が堆積しており、埋蔵文化財も確認されなかった。

現在把握されている竹淵南原遺跡周辺の周知の埋蔵文化財の分布は第1図に示したとおりであるが、洪水等河川活動により破壊・埋没したものも多いと思われる。これまで開発行為に伴い発掘調査が実施されており、ここではその成果を踏まえ、竹淵南原遺跡周辺の歴史的環境について概観したい。

縄文時代の遺跡分布ははっきりしていない。百瀬遺跡で後期の土坑を確認し、早期～晩期の遺物が出土しているほか、向原遺跡で縄文土器が採集されているのみである。

弥生時代には、田川の両岸に集落が展開している。田川右岸では、竹淵遺跡第2次調査で後期初頭の住居址12軒のほか、掘立柱建物址7軒が確認されており、学史的にも著名な百瀬遺跡でもこれまでの5次にわたる発掘調査により、弥生時代中期末から後期の集落が確認されている。田川左岸では出川南・出川西遺跡でやはり弥生時代後期の集落が確認されており、両遺跡とその周辺では地点を異にし、また断続的ながらもこれ以降集落が営まれるようになる。

古墳時代の集落は、これまでのところ田川左岸で、その分布をよく把握することができる。出川西・出川南遺跡では弥生時代から後期にわたる集落が確認されており、とりわけ出川南遺跡では古墳時代後期の規模の大きな集落が営まれていたことが発掘調査により明らかにされている。また、平田北遺跡でも古墳時代後期の集落が見られる。古墳としては東日本最古級の前方後方墳の弘法山古墳が北東に位置するほか、出川南遺跡の中に平田里1号～3号古墳がある。田川左岸では、向原遺跡において、平安時代の生活面の下に牛伏川の洪水による砂礫層があり、この下に古墳時代の遺物包含層が確認されている。この一帯に古墳時代の集落が展開していたことがわかるが、その実態は不明である。

奈良・平安時代には、田川左岸の出川南・平田北遺跡で引き続き集落が展開する。田川右岸では、近年の発掘調査により向原・百瀬遺跡で住居址等が確認されており、集落の存在が明らかになっている。しかし、田川左岸の遺跡に比べると発掘調査事例が少なく、その実態を明らかにするには至っていない。

中世になると、現在の寿地区にいくつかの国衙領の郷があったことが文献史料から明らかになっている。すなわち、竹淵郷、白川郷、白姫郷、瀬黒郷、赤木郷などがそれである。また、今回の調査地点の南南東約1km、現在の松本市寿運動広場周辺には「馬場田」「松葉」「堀田」「カジ田」といった小字名がある。それぞれ馬場、的場、堀、鍛冶を表わすものとも考えられ、このことから付近に中世の土豪の館が存在したとも考えられている。今回の発掘調査地点周辺は、この中でも竹淵郷に関係の深い地区と思われ、これまでに発掘調査によって、竹淵遺跡・竹淵南原遺跡・百瀬遺跡で中世の遺構が確認されており、この一帯に中世の集落が存在していたことが確認できる。しかしながら、竹淵郷の故知の比定、また集落の実態を解明するには至っていない。

III 調査の概要

竹瀧南原遺跡は、昭和60年に圃場整備事業にともなって第1次の発掘調査が行われたが、暗渠排水と中近世の遺物がわずかに確認されたのみで、その実態は今一つ不明であった。今回の土地区画整理事業地は、埋蔵文化財の有無が不明であったが、竹瀧南原遺跡及び竹瀧遺跡に近接していた。このため、松本市教育委員会では市内遺跡確認事業として事前に予定地内の試掘調査を実施した。試掘調査の結果を踏まえ、埋蔵文化財が確認された範囲について発掘調査を実施したものである。なお、今回の調査地点の西側及び北側は埋蔵文化財は確認されなかった。西側の地区では耕作土直下に砂層が堆積しており、流路性の堆積と判断された。北側の地区は、土層の堆積は基本的に発掘調査地点と同様であったが、遺構・遺物とも確認されなかった。

調査にあたっては、重機により遺構検出面までの表土除去を行った後、人力により検出・遺構掘り下げを行い、調査終了後重機による埋め戻しを行った。遺構などの測量記録は、磁北方向に沿って任意の3m方眼を設定して行った。調査区は、水田および畑として利用されており、地境・水路等の確保のため、3つの区に分け、便宜的にA～C区と呼称し、この順に調査を実施した（第3・4図）。

調査区の基本的な土層構成は、A区とB・C区で若干異なる。A区では、水田耕作土・水田床土下に黒褐色の砂質土層が堆積しており、この上面を検出面とした。検出面の深さは、地表面から30cm前後を図る。地山と遺構覆土は近似しており、遺構検出・掘削は困難を伴った。基本的には、遺構覆土の方が若干茶褐色を帯びており、これを目安に遺構検出を行った。遺構床面は貼床等が見られないものがほとんどであったが、土色の違いと、地山の方が若干砂質が強いことを目安として掘削を行った。このため、検出しきれていない遺構があった可能性が高い。B・C区では耕作土下に暗褐色土層が堆積し、その下に黄褐色の砂礫を多く含む土層が堆積していた。検出面はこの暗褐色土層上面から10cm程度下げたあたりから黄褐色土の上面に設定した。検出面の深さは、地表面から50cm前後を計る。

調査により、古墳時代前期・平安時代前期・中世の集落址を確認できた。多くの住居址・建物址等を調査したほか、中世に帰属すると思われる井戸も調査することができた。また、調査地点周辺では平安時代の集落の分布が確認できていなかったが、今回の調査成果により、新たな知見が得られたといえよう。

調査の実施期間・面積・検出遺構・出土遺物の概要は下記のとおりである。

調査期間 平成10年11月18日～平成11年3月12日

調査面積 2,304m²

検出遺構

縦穴住居址 33棟

縦穴状遺構 8基

掘立柱建物址 6棟

井戸 1基

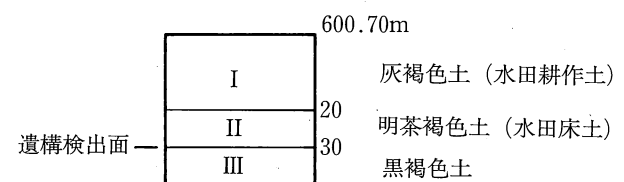
土坑 163基

ピット 114基

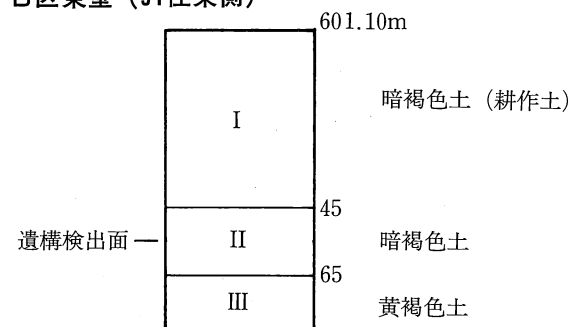
出土遺物

土器・陶器（土師器・須恵器・灰釉陶器・須恵質土器・土師質土器）・磁器（青磁・白磁）・石器・鉄器

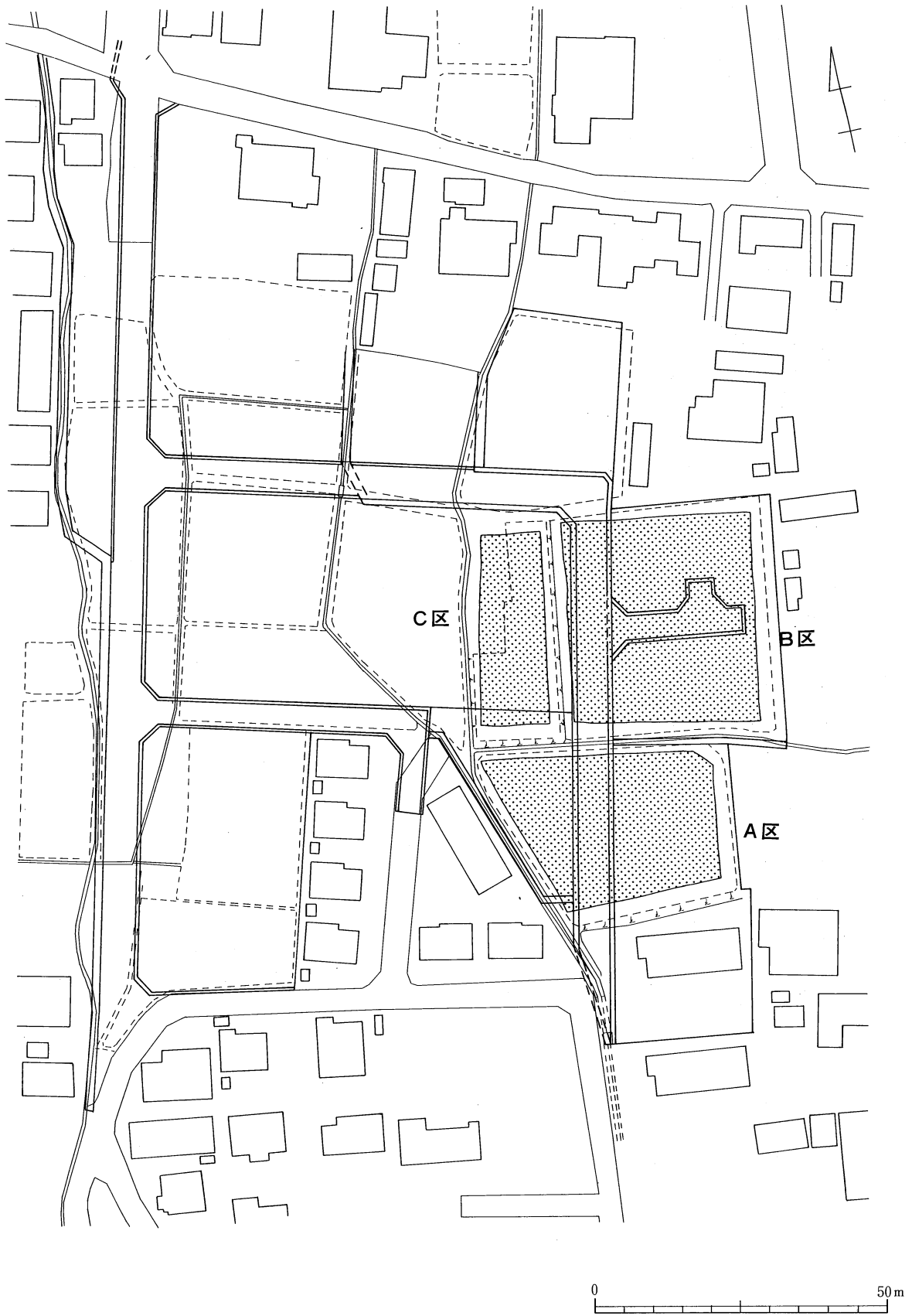
A区南壁



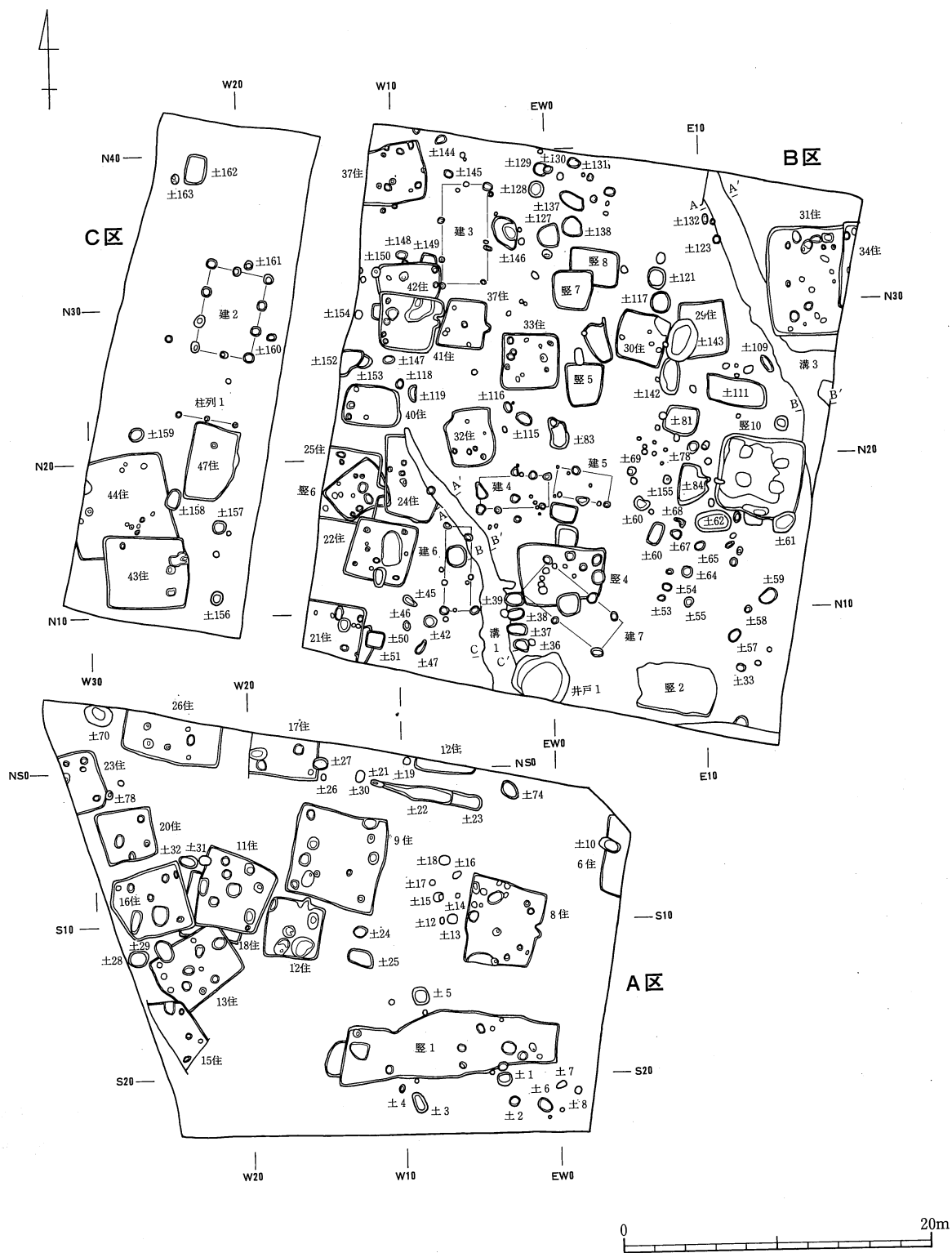
B区東壁 (31住東側)



第2図 調査区基本土層



第3図 調査範囲



第 4 図 遺構配置図

IV 遺構

1. 概要

今回の調査では、古墳時代前期・平安時代前期・中世（13～15世紀）の遺構を確認することができた。以下時期ごとに概観するが、遺構に付した竪穴住居址・竪穴状遺構の名称は、遺構検出時にある程度の規模を持ち、形態が比較的整ったものを竪穴住居址、そうでないものを竪穴状遺構とした。このため、掘削の結果、各遺構の名称と実際の遺構の機能が一致していないことが判明したものもある。これらについても、遺構検出時に付した名称のまま取り扱ってある。各時期の遺構分布は、古墳時代前期はB・C区に主に見られたほか、平安時代の遺構は調査地区ほぼ全体に分布し、中世の遺構は主にB区より確認されている。ただし、A区からは中世の遺物が比較的多く出土したものの、確認できた遺構は比較的少数にとどまったため、調査時に中世の遺構を検出しきれていない可能性もある。

2. 竪穴住居址

(1) 弥生時代末～古墳時代前期の竪穴住居址（第5・6図）

第23号住居址

A区西端、北寄りに位置する。西側は調査区外にかかるため、全容は不明。覆土は2層に分かれ、壁はやや斜めに立ち上がる。床は地山直床で、貼床等は認められなかった。炉址や焼土の分布は確認できなかった。床面でピットを5基確認したが、支柱穴は判然としない。位置的にはP1・5がこれに相当するものか。遺物は覆土中から散漫に出土し、特にまとまった出土状態は認められず、遺物量もそれほど多くない。

第31号住居址

B区北東隅に位置する。住居址東半は区域外にかかり、全体を窺うことはできなかった。今回の調査地点の該期遺構としては44住と並んで最も規模の大きなものである。遺存状態は良好で、検出面から床までが30cm以上あり、他の遺構に比べて深かった。覆土は2層に分かれ、壁は斜めに立ち上がる。床は黄褐色地山に掘り込まれ、貼床等は確認されなかった。北壁西半沿いには周溝状の浅い掘り込みが見られた。床面でピットを27基検出したが、炉址は確認されなかった。ただ、P3の覆土中には焼土が若干混入していた。支柱穴は判然としないが位置的にはP1・P22・26が相当するものと思われる。遺物は覆土中より多く出土している。

第32号住居址

B区中ほど、西寄りに位置する。住居址の形態はややいびつである。床は黄褐色地山に掘り込まれ、貼床等は確認されなかった。覆土は単層で、床まで10cm程度と残存状態は良くない。壁はやや斜めに立ち上がる。床面でピットが14基確認されたが、支柱穴は判然としない。P14からは第25図34が逆位の状態で出土した。この土器に顕著な被熱は認められず、また焼土等の分布も見られなかったため、炉址であるかは判然としない。遺物は覆土中より多く出土している。

第33号住居址

B区ほぼ中央に位置する。床は黄褐色地山に掘り込まれており、貼床等は確認されなかった。覆土は3層に分かれ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面でピットが13基確認できたが、支柱穴は判然としない。P3・4・7・8がその可能性がある。P12からは甕の口縁部付近（第26図39）が逆位の状態で出土したが、残存部分には被熱は認められない。ただ、ピット底面付近には焼土が分布しており、炉址の可能性もある。また、西壁寄りほぼ中央にも厚さ3cmほどの焼土の分布が見られた。遺物の出土量はそれほど多くはなかった。

第38号住居址

B区北西隅に位置する。床は黄褐色土地山に掘り込まれ、貼床等は確認されなかった。覆土は2層に分かれ、壁は斜めに立ち上がる。床面でピットを11基確認したが、支柱穴は判然としない。P1上面からは壺が(第26図50)逆位の状態で出土したが、焼土等は確認できなかった。この土器は床面より若干高い位置にあった。これが炉址となるのか、判然としない。遺物量はそれほど多くなかった。

第40号住居址

B区中ほど西端に位置する。床は地山直床で、床面でピットが4基確認できた。北壁中央際に焼土の分布が見られる。支柱穴は判然としないが、P1・3が該当するであろうか。遺物はそれほど多くはなく、平安時代の土器も出土している。このため、本址の帰属時期もはっきりとせず、古墳時代前期ではない可能性もある。

第42号住居址

B区北西に位置し、41住に切られる。床は黄褐色土地山に掘り込まれ、地山直床。覆土は2層に分かれ、壁は斜めに立ち上がる。床面でピットが4基確認できたが、支柱穴は判然とせず、炉址も確認できなかった。遺物はそれほど多くなく、覆土中より少量出土したのみである。

第44号住居址

C区南西に位置する。今回の調査地内の該期住居址の中では最も規模の大きいものである。遺構検出時には本址を住居址3軒の切り合いと考えたが、掘削の結果、出土遺物に年代幅を認めがたいこと、床面の高さや覆土が共通していること等から、1軒の住居址として扱うこととした。床は黄褐色地山に掘り込まれ、貼床等は認められない。覆土は単層で、壁は斜めに立ち上がる。床面でピットが15基確認されたが支柱穴は判然としない。P1からは甕(第26図69)が逆位に出土し、覆土中には焼土が多量に含まれていた。土器には顕著な被熱は認められないが、炉址と思われる。遺物は床面および覆土中より多く出土し、土師器の各器種が見られる。

(2) 奈良・平安時代の竪穴住居址(第7～12図)

第6号住居址

A区北東端に位置する。大半が調査区外にかかるため、全容は不明。覆土は2層に分かれ、壁は垂直に近く立ち上がる。床は黒褐色の地山直床。床面でピットが2基確認できたが、支柱穴は判然としない。遺物は覆土および床面からわずかに出土したのみである。帰属時期は8期あたりとしておきたいが、少量の破片資料からの年代のため、判然としない。

第8号住居址

A区中ほど、北寄りに位置する。覆土は2層からなり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床は黒褐色の地山直床で、貼床等は確認されなかった。床面でピットが17基確認されたが、支柱穴は判然としなかった。位置的にはP3・11・13が該当するものであろうか。カマドは確認できなかったが、東壁ほぼ中央付近では、上面に焼土・炭化物の分布が見られた。遺物は覆土中・床面およびピット内から出土しているが、古墳時代前期のもの、平安時代のものとも一定量出土している。このため、2時期の遺構の切り合いを判別できずに掘削してしまった可能性が高い。両時期の遺物の分布は、古墳時代のもものが北半から、平安時代のもものがP6周辺を中心とした南半から出土する傾向がうかがえる。平安時代の遺物は4期頃に位置づけられるものである。

第9号住居址

A区西寄り、11住・14住に隣接する。覆土は単層で、深さは10cm程度と浅い。壁はやや斜めに立ち上がる。床面でピットが11基確認されたが、支柱穴は判然としない。カマドは確認されなかった。遺物は覆土中およ

び床面から出土しているが、それほど多くはない。出土遺物には時期幅が認められるが、4～5期に帰属するものと考えたい。

第11号住居址

A区西寄りに位置する。16・18住を切り、13・14住に切られる。覆土は2層からなり、壁はやや斜めに立ち上がる。床は黒褐色の地山直床。貼床等は確認されず、床面の認定が難しかったが、覆土より黒く、砂質になったところで床とした。床面でピットが9基確認されたが、支柱穴は判然としない。カマドは確認されなかったが、東壁より焼土・炭化物の分布が見られたほか、P12覆土中には焼土・炭化物が多量に含まれていた。遺物は覆土中及び床面から多く出土している。出土遺物の様相から6期に帰属する。

第12号住居址

B区北端に位置する。大半が調査区外となり、詳細は不明。検出面から床までは10cm程度と浅く、残存状態は悪かった。カマド・ピット等は確認されなかった。覆土中より須恵器の大甕がまとまって出土している。出土遺物がわずかで、帰属時期は不明である。

第13号住居址

A区西寄りに位置し、11・18住を切り、15住に切られる。覆土は2層に分かれ、検出面から床までは20～30cm程度あった。床は地山直床だが、西側は一部堅緻な部分が見られ、貼床であった可能性がある。壁はやや斜めに立ち上がる。床面でピットが13基確認できたが、支柱穴は確認できなかった。カマドは確認できなかった。遺物は覆土中から多く出土している。また、覆土上層から床面にかけて、廃棄されたと思われる礫の分布が一部見られた。出土土器の様相から4～5期に帰属するものである。

第14号住居址

A区西寄り、11住の西側に位置する。19住を切る。覆土は単層で、10cm程度と浅い。壁は斜めに立ち上がる。床は黒褐色の地山直床。床面でピットが6基確認できたが、支柱穴は判然としない。北壁ほぼ中央の張出部には、覆土下層に焼土・炭化物が混入しており、カマドであった可能性もあるが、判然としない。遺物は覆土中より少量出土した。出土遺物が少なく、帰属時期は不明な点が多いが、4～6期に帰属するものと思われる。

第15号住居址

A区西端に位置し、13住を切る。西側と南側は攪乱にあっており、詳細は不明。覆土は2層からなり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面でピットを5基確認したが、支柱穴は不明。ピット1は覆土上層に炭化物塊を多量に含んでいた。カマドは確認されなかった。遺物はそれほど多くなく、覆土中より出土している。出土遺物から7～8期に帰属する。

第16号住居址

B区西端に位置し、11住に切られ、18住を貼る。覆土は2層に分かれ、壁は斜めに立ち上がる。床は地山直床で、貼床等は見られなかった。床面でピットが8基確認できたが、支柱穴は不明。カマドは確認できなかった。遺物は覆土中より散漫に出土し、量は少ない。出土遺物の様相から3～4期に帰属する。

第17号住居址

A区北端に位置する。西側は攪乱を受け、北側は調査区外にかかるため全容は明らかではない。覆土は単層で、壁は垂直に近く立ち上がる。床は黒褐色の地山直床で、貼床等は確認されなかった。西壁際にカマドと思われる焼土の分布が見られ、袖は破壊されていたが、袖石と思われる礫と、火床が確認できた。床面でピットが3基認められたが、支柱穴は判然としない。遺物はカマド周辺からまとまって出土しており、比較的多く出土した。出土遺物の様相から4～5期に位置づけられる。

第18号住居址

A区西寄りに位置し、11・15・16住に切られる。覆土は2層に分かれ、覆土中に焼土・炭化物が少量含まれていた。壁は垂直に近く立ち上がる。床は地山直床で、貼床等は見られなかった。カマドが西壁ほぼ中央にあり、袖石等は残存していなかったが火床は顕著に赤化していた。床面でピットが6基確認できたが、支柱穴は不明。P1・6は覆土中に焼土が多量に含まれていたほか、P6下層には土器小片が多量に含まれていた。住居址南西隅付近には壁際に周溝状の落ち込みがある。遺物はカマド周辺を中心に比較的多く出土している。出土遺物の様相から2期に位置づけられよう。

第20号住居址

A区西寄り、16住の北側に位置する。覆土は3層に分かれ、北壁寄りには焼土を多量に含む暗褐色土層が見られた。壁は斜めに立ち上がる。床は地山直床で、貼床等は確認されなかった。床面でピットが6基確認できたが、支柱穴は不明。南壁ほぼ中央に焼土が厚く分布しており、カマドの可能性はあるが、袖石等は見られなかった。遺物は覆土中より散漫に出土しているのみで、量は少ない。このため、本址の帰属時期もはっきりとしない。

第22号住居址

B区南西に位置する。覆土は2層に分かれ、下層には褐色土ブロックが多量に混入していた。カマドや焼土の分布は見られなかった。支柱穴はP1～4が相当すると思われ、P2・3では柱痕が確認できた。遺物は覆土中から出土しているが、それほど多くはない。出土土器の様相から、4～5期に帰属するものと思われる。

第24号住居址

B区南西に位置する。覆土は2層に分かれ、ともに焼土を少量含む。北東部分を溝1に切られており、全容は窺えない。南東隅には焼土の分布が見られ、その上に礫が廃棄されており、破壊されたカマドであると思われる。遺物は覆土中から比較的多く出土している。床面は地山直床で、堅緻な部分等は見られなかった。床面でピットが確認できたが、支柱穴は判然としない。出土遺物から2～4期に位置づけられよう。

第25号住居址

B区南西、第24号住居址の西隣で24住に切られる。床は地山直床で、床面でピット及び第6号竪穴状遺構のプランが確認された。支柱穴は判然としない。西壁ほぼ中央に焼土の分布が見られ、土師器甕が5個体まとまって出土している。判然としないが、カマドの可能性もある。これがカマドであるとすれば、覆土中に多量の焼土粒を含むP1はカマドに付随するものであろう。出土遺物から2期あたりに帰属するものと思われる。

第26号住居址

A区北端、西寄りに位置し、北側は調査区外にかかるため全容は明らかでない。覆土は2層に分かれ、壁はやや斜めに立ち上がる。床は地山直床で、貼床等は認められなかった。カマドや焼土の分布は見られなかった。床面でピットが6基確認できたが、支柱穴は判然としない。遺物は比較的少ない。出土遺物から5～6期に帰属する。

第29号住居址

B区やや北寄りに位置する。検出面から床までは10cm程度と、残存状態は悪い。床は黄褐色土層中に掘り込まれ、地山直床。床面でピットが6基確認できたが、支柱穴は確認できず、カマドも見られなかった。遺物も覆土中よりわずかに出土したに過ぎず、帰属時期も不明である。

第30号住居址

B区やや北寄り、第29号住居址の西側に隣接する。床は黄褐色土層中に掘り込まれ、地山直床であるが、北西隅付近は地山と思われる黄灰褐色の粘土を床としていた。この部分は凹凸があり、平坦ではなかった。カマド・支柱穴は確認できなかった。遺物が西壁際からややまとまって出土している。覆土中にも遺物が見られたが、量的にはそれほど多くない。床面でピットが5基確認できたが、支柱穴は判然としない。出土遺

物の様相から、4～5期に帰属する。

第34号住居址

B区北東隅に位置し、31住を貼る。大半が調査区外にかかっているため、不明な点が多い。遺物もほとんど出土しておらず、詳細な時期は不明だが、古墳時代前期の遺構を貼っていることから、本時期の遺構とした。覆土は2層に分かれ、壁はやや斜めに立ち上がる。床面でピット等は確認できなかった。

第37号住居址

B区北寄りに位置し、41住の東側に隣接する。床は黄褐色土中に掘り込まれ、地山直床。検出面から床まで10cm程度しかなく、また立上りも緩やかであり、残存状態は悪い。西壁ほぼ中央の張出部に焼土が分布しており、ここがカマドであった可能性もあるが、袖石等は残存していなかった。床面でピットが確認できたが、支柱穴は判然としない。P2・6・7がこれに相当するものであろうか。遺物はそれほど多くなく、覆土中より散漫に出土したのみで、帰属時期も不明である。

第41号住居址

B区北寄りに位置する。黄褐色地山に掘り込み、床は地山直床。西壁中央付近に焼土が分布しており、袖石等は確認されなかったがカマドと思われる。ピットは6基確認できた。このうちP5・6覆土中には焼土が多量に含まれていた。支柱穴は判然としないが、P1・4が相当するものであろうか。P6南側付近には覆土下層から床面にかけて、炭化材・炭化物がまとまって出土した。遺物の出土量は少なかった。出土土器の様相から1～4期に帰属するものであろうか。

第43号住居址

C区南よりに位置し、44住を切る。覆土は5層に分かれ、床は黄褐色の地山直床。壁は斜めに立ち上がる。東壁中央やや北寄りに焼土の分布が見られ、袖石等は確認できなかったものの、カマド火床と思われる。床面でピットが6基確認できたが、支柱穴は判然としない。遺物は覆土中より出土しているが、量はそれほど多くない。出土土器の様相から3～4期に帰属するものである。

第45号住居址

C区南端近く、西壁際で確認された。カマドと思われる焼土が分布し、遺物もここから集中して出土した。第44号住居址を切っているが、調査区外に大半が広がっているものと思われ、詳細は不明である。土器群の様相から5～6期に位置づけられる。

第47号住居址

C区南寄りに位置する。覆土は2層で、東壁中央付近に焼土が分布する。遺構検出時にこの焼土をカマドにかかわるものとして、本址を住居址と把握した。しかし、掘削の結果、カマドの袖や袖石などが検出されず、また焼土も床から浮いた形になるなど、カマドとは考えにくいことが判明した。したがって、住居址というよりはむしろ竪穴状遺構として把握するのが妥当であったものと思われる。遺物は覆土中より少量出土しているのみで、帰属時期は明らかではないが、4～7期の年代幅に収まるものであろうか。

(3) 中世の竪穴住居址 (第12図)

第21号住居址

B区南西隅に位置する。検出段階では住居址として扱ったが、出土遺物等から中世のものと思われ、住居址として扱えるかは判然とせず、竪穴状遺構とすべきところであった。黄褐色土地山を掘り込んでおり、堅緻な床面は確認できず、また床面での焼土の分布は確認できなかった。床面のピットは9基確認できた。北半を中心として多量の礫が覆土上部から床面まで廃棄されていた。東隣の第50号土坑中にも礫が廃棄される状況があり、本址と何らかの関連があるのかもしれない。覆土上層・P1覆土下層には焼土が若干混入してい

た。遺物は覆土中から出土しており、量的にはそれほど多くない。土器・陶磁器のほか、鉄器・鉄滓が出土している。本址は14世紀に帰属するものと考えたい。

3. 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構

A区南西に位置する。東西に長い不整長方形をなす。遺構検出段階では西側の一部（くびれ部より西）を別遺構として掘削したが、のちにこれも含めて竪穴状遺構とした。長幅比（長辺÷短辺）は3.25で、この種の長方形の竪穴状遺構の中でも最も細長いものである。床は黒褐色土中にあり、堅緻ではない。床面にはピットが確認でき、このうちP1覆土上層には焼土が多量に見られた。遺構周囲にもピットが見られ、これらも本址に伴うものであろう。西壁寄りには覆土上層からP7覆土中にわたって多量の礫が廃棄されていた。これらの礫は河床礫であるが、そのほとんどが割れた状態であった。また、南西隅にはひとかかえもある石が見られた。遺物は覆土中および床面から出土しており、該期遺構としては出土量も多く、内容的にも土器・陶磁器のほか石器（砥石）や鉄器・鉄滓がある。遺物の年代は古墳時代から中世にわたるが、中世のものが主体を占める。本址は①面積が10㎡以上であること②床面に火床と思われる焼土が見られること③覆土中より遺物が出土していること等から、住居施設であったものと思われる。鉄滓が4点（602g）と多く出土していることや焼土の分布等から、鍛冶遺構など、鉄器生産に関する遺構であった可能性も指摘できよう。帰属時期は、出土遺物から15世紀中葉に位置するものであろう。

第2号竪穴状遺構

B区南端に位置する。形態は不整な隅丸長方形。覆土は2層からなり、上層は褐色土で、平安時代以前の遺構覆土と色調が異なる。覆土中への礫等の廃棄は確認されなかった。検出面から床までは10cm程度と浅い。壁の立上りはゆるく、断面は皿状を呈する。床面でピットは確認されなかった。遺物は東半覆土中から散漫に出土しているが、量は少なく、時期的にも古墳時代～中世にわたる。遺構覆土の色調から中世に帰属するものと判断したい。

第4号竪穴状遺構

B区南よりほぼ中央に位置する。多数の土坑・ピットに切られる。東西を長軸とする隅丸長方形をなす。覆土は暗褐色土で、10cm程度と浅い。床はほぼ平坦で、立上りは斜めである。床面でピット等は確認されなかった。遺物は覆土中より比較的多く出土している。遺物は古墳時代～中世にわたるが、平安時代のものが多い。このうち、灰釉陶器碗（第31図292）は、第22号住居址出土のものと接合関係を持つ。帰属時期は、中世と見られる土坑・ピットに切られていること、また出土遺物の様相から平安時代のものと考えたい。

第5号竪穴状遺構

B区中央やや北より、第33号住居址の西側に隣接する。ややいびつな隅丸長方形を呈する。覆土は10cm程度と浅く、床はほぼ平坦で壁は斜めに立ち上がる。床面でピットが9基確認できた。

第6号竪穴状遺構

B区南西に位置する。24・25住に貼られ、上面を削平されており、残存状態は悪く、深さは10cmほどである。床は地山直床で、堅緻な部分は見られなかった。ピットは11基確認でき、このうちP1は覆土中に焼土が混入しており、炉址の可能性はある。主柱穴は判然としない。遺物は覆土中よりわずかに出土したのみである。このため、帰属時期は判然としない。平安時代の住居址に貼られていたことから、これ以前の遺構で、今回の調査地点の遺構の時期からすれば、古墳時代前期のものになる可能性はある。

第7号竪穴状遺構

B区北寄りに位置し、第8号竪穴状遺構を切る。ややいびつな隅丸方形をなす。床は黄褐色土層中にあり、地山直床。覆土中には炭化物を少量含む。床面にはピットが4基確認できたが、いずれも掘り込みは5cm程度と浅く、断面は皿形を呈する。P1覆土中には炭化物が含まれていた。北半を中心に覆土上層から床面にかけて、礫が出土しており、廃棄されたものであろうか。遺物は西半から比較的多く出土しており、平安～中世にわたるが、中世のものが多い。

第8号竪穴状遺構

B区北寄りに位置し、第7号竪穴状遺構に切られる。隅丸方形をなし、床は黄褐色地山に掘り込まれ、地山直床。床面でピット4基が確認できたが、いずれも浅く、深いものでも10cm程度であった。床面には礫が散漫に分布していた。

第10号竪穴状遺構

B区東端中ほどに位置する。南側がやや不整形な隅丸方形をなす。掘り下げの過程で礎石と思われる礫が確認され、当初は竪穴状遺構を切って建物址が構築されたものと考えた。しかし、土層断面を観察したところ、この礫の周辺に柱穴に相当する立上りが確認できなかった。さらに、礎石と思われる礫の下にはいずれもしまった粘質土があるが、竪穴状遺構覆土はこの粘質土上に堆積していた。このため、これら礎石と思われる礫は竪穴状遺構に伴うものと判断した。

竪穴状遺構は3層に分かれる。西側3分の2ほどの範囲は周囲より10cm程度深く掘り込まれている。礎石と思われる礫はいずれもしまった粘質土の上にある。粘質土上に礎石を伴う基礎部分は3基確認でき、礎石を伴わない粘質土の高まりが1基確認できた。礎石を伴わないものも本来は礎石を伴っていたものと思われる。礎石の下場は床面より高い位置にある。高低差は西側の床の深い部分で30cm、東側の床の高い部分でも10cm程度ある。したがって、これら礎石を伴う基礎部分は、掘方床面との高低差があることから、上屋の柱を支えるにはやや不安定であると思われる。本址のかなり内側の部分に位置することもあり、上屋の柱を支えていたというよりは、床等の板張りを支えていたものと考えたい。

遺物は覆土中および床面から出土しており、西側の深い部分の床面からも出土している。遺物の年代は13～15世紀にわたるが、床面出土遺物の様相から13世紀後半に位置づけておきたい。

4. 掘立柱建物址

建物址の分布はB区の南側に多く認められる。B区南側には多数のピットが検出され、現場調査段階では建物址として把握できず、個別に調査をした。整理作業段階でこれら土坑・ピットをその配置や深さ等から掘立柱建物址として把握し、第3～7号建物址とした。したがって、これらの中には本来建物址ではなかったものも含まれている可能性がある。また、該期の掘立柱建物址は柱穴が均等に並ばないものや、内部や周囲にピットを伴うと思われるものが通例であるので、建物址とその周囲の土坑・ピットをあわせて図示した。

第2号建物址・柱列1

C区北寄りに位置する。第2号建物址は2間×3間の側柱式建物址で、周囲に庇柱に相当する柱穴等は確認されなかった。ただ、第2号建物址の南側に位置する柱列1とは、主軸方向がほぼ一致しており、何らかのかかわりがあった可能性が高い。

第2号建物址の規模は550cm×354cm、面積19.3㎡を計る。各柱穴には柱痕が確認でき、その直径は20cm前後であった。柱穴内からは遺物が散漫に出土したのみで、意図的な廃棄等は見られなかった。本址の時期を決定するような遺物の出土がなかったが、規模や形態から平安時代のものであろう。本址より北側は該期の遺構の分布が見られないことから、本址がある時期の集落の北限に位置していた可能性がある。

第3号建物址

B区北端に位置する。土133・P92・96・100～104で構成される側柱式の建物址で、柱穴が均等に並ばず、全体で長方形を構成するタイプのものである。

第4号建物址

B区中ほどに位置する。土71～73・94、P29・30・34・81から構成される側柱式の建物址。柱穴は均等に並ばず、全体で長方形を構成する。内部・周囲にピットが見られ、P26・27、30～33はほぼ同規模だが、本址との関係は明らかでない。

第5号建物址

第4号建物址の東側に隣接する。土87・90・91、P44・48・81から構成される側柱式の建物址。柱穴は均等に並ばず、全体で長方形を構成する。

第6号建物址

B区南東に位置する。土40・41・P49、P10・15～17から構成される長方形の側柱式建物址。土41とP16、土40とP15の間隔はほぼ同一であるが、その他の柱穴間は一定でない。領域内に土43を含み、本址に関係するものであろう。北東にある第4号建物址とは、主軸がほぼ直交する。

第7号建物址

B区南、第4・5号建物址の南側に位置する。土34・52・82・86、P8から構成される長方形の側柱式建物址。柱穴は均等に並ばず、全体で長方形を構成するものか。領域内に土35を含み、本址に関係するものであろう。周囲には土坑・ピットが多数確認でき、本址に関係するものもあると思われる。特に土37～39は形態・規模が似通っており、注目される。

5. 井戸

遺構検出段階では井戸とは判別がつかず、竪穴状遺構3として掘削を行ったが、掘り下げると木の枠が良好に残存しており、井戸と把握して調査を行った。黄褐色の地山を掘り抜き、最終的に黄褐色の粘質土まで掘削が及んでいた。この粘質土層およびその上面から現在でも湧水が見られ、調査期間中も排水を行いながら調査を行った。井戸の木枠は検出面から40cmほど下ったあたりから残存しており、180cm程度の深さまで達している。木組方形縦板組隅柱横棧型井戸である。

井戸の掘方は3m以上×3.6m程度の大きさで、検出面からの深さは180cm前後。南東よりの位置に100cm×120cm、高さ150cm（残存値）の方形の木組の井側（井戸の地下部分にある井戸本体）を据える。井筒は確認されなかった。掘方上半は井側よりもかなり大きく掘り込まれているが、下半は井側との間に広いところでも40cm程度のすき間しかない。掘方は井側設置後、埋め戻されている。

井側は幅30～40cm、厚さ5cm、長さ140cm（最大残存値）程度の縦板を各辺3枚使用し、縦板接合部外側に添板を当てていたところもあった。隅柱は15cm×10cm程度の角材が使用され、一部の隅柱下端は尖らせてあった。横棧は2段残存し、5cm×10cm程度の角材を使用し、ほぞを作り、隅柱にはほぞ穴を開けて差し込んでいる。ほぞは隅柱を貫通しているものと、そうでないものがあった。縦板と横棧・隅柱とは釘等では固定されておらず、土圧によって押し付けられていたものである。前述のように、掘方下半と井側との間にそれほどすき間がないことからすれば、あらかじめ地上で隅柱と横棧を組み立ててから掘方内に設置し、縦板を据え、掘方を埋め戻したものと考えられる。

遺物は掘方・井側覆土中より出土しているが、量はそれほど多くはない。井側覆土中には礫が多数投棄されていた。掘方からは、古墳～中世にわたる土器・陶磁器が、井側覆土からは古墳～中世の土器・陶磁器の

ほか、銭貨が1点、小型の曲物の底部と思われる木製品が1点、鉄製刀子が1点出土した。掘方出土遺物の年代は12～13世紀前半、井側出土遺物の年代は13世紀前半～14世紀にわたる。このことから、本址の構築年代は13世紀前半あたり、廃絶年代は14世紀以降と考えられる。

6. 墓址

第56号土坑は覆土中より人骨及び副葬品と思われる銭貨が出土しており墓址である。覆土中及び床面に焼土は見られず、土葬墓であろう。南側の大半は調査区外にかかるため、形態・規模は不明だが、楕円に近い隅丸長方形となるものであろう。骨の遺存状態は悪く、歯がかろうじて形をとどめていたが、他の骨は粉末状であった。歯は北側から出土し、頭位方向は北である。土坑の主軸方向は磁北から20°東へ振れている。底面は平坦で、壁は傾斜する。銭貨は3枚が重なって出土し、内訳は嘉裕元宝・元宝通宝・紹聖元宝がそれぞれ1枚ずつで、周囲には繊維質のもの痕跡が残存していた。これら銭貨の初鑄年代は1056～1094年にわたる。銭貨の他には遺物は出土していないため、本墓址の帰属時期は12世紀以降としか限定できない。

7. 土坑・ピット

今回の調査では、土坑が163基、ピットが114基検出された。遺構検出時には、小型のものをピットとしたが、分別の基準は明確ではない。土坑・ピットとも遺物の出土量は限られているため、帰属時期が不明なものがほとんどである。時期のわかる遺物が出土したものは、土23・土83・土102・土149から古墳時代前期、土3・土5・土8・土20・土21・土29・土30・土59・土117・土133・土137・土140・土143・P23から平安時代、土8・土14から中世の土器・陶磁器が出土しているほか、土143からは砥石状石器が、土110から銭貨（元宝通宝）が出土している。土坑の中には、礫が多数投棄されているものがあり、土31・土50・土70・土81・土146がこれにあたる。これまでの類例では、こうした特徴を持つ土坑は古代末～中世に多く、この時期のものであろうか。

帰属時期が不明で各時期のものが混在しているが、土坑・ピットの分布を見ると、建3・4・7周辺に多くがみられる。これらは掘立柱建物址を構成するものや、これに伴うものである。また、豎10西側にも多くが見られ、これに関連するものが多いと思われる。

8. 溝址

2条を検出し、ともに自然流路。調査地点の地形から、南東から北西方向に流れていたものと思われる。

第1号溝址

B区南端ほぼ中央から北西に延びる流路性堆積の溝。B区北西隅、24住の北側のあたりで消滅する。長さ約18m、幅1～2m、深さ30cm。遺物の出土は見られなかった。平安時代の住居址を切り、中世の遺構に切られる。

第3号溝址

B区東端ほぼ中央から北西に向かって延びる浅い流路性堆積の溝。B区東壁付近で2条が合流する。長さ20m、幅1.5～2m、深さ30cm。遺物の出土は見られなかった。古墳時代前期の住居址に切られ、帰属時期はこれ以前である。

第1表 竪穴住居址一覧

住居 No	図 No	平面形	規模		主軸方向	カマド形態 種類・位置	時期	備考
			長軸×短軸×深さ (cm)	床面積 (m ²)				
6	7	不明	500×156×16	6.3	不明		不明	土10に切られる 区域外にかかる
8	7	長方形	572×504×10	24.1	N-10°-W		8 C後半	
9	7	方形	620×600×8		N-13°-E		8 C後半～9 C初	
11	8	隅丸方形	500×492×36	19.8	N-18°-E		9 C前半	18住を貼る 13・16住、土31に切られる
12	8	不明	392×76×3	2.1	不明		不明	
13	8	隅丸長方形	548×412×32	19.7	N-33°-W		8 C後半～9 C初	18住を貼る 15住、土29に切られる
14	8	隅丸方形	376×364×10	12.3	N-8°-E	北壁中央	8 C後半～9 C前半	
15	9	不明	480×212×20	8.9	不明		9 C後半～末	13住を切る 攪乱にあう
16	9	方形	500×408×24	17.4	N-18°-W		8 C中葉	11住を切る 18住を貼る
17	9	不明	448×270×16	11.3	N-5°-E	西壁南寄り	8 C後半～9 C初	土27に切られる 攪乱にあう 区域外にかかる
18	9	方形	420×412×16	14.9	N-7°-E	西壁中央	8 C初	11・13・16住に貼られる
20	11	隅丸方形	346×340×22	10.3	N-13°-W		不明	
21	12	隅丸方形	376×358×29	12.5	N-12°-W		14 C	土51を切る 区域外にかかる
22	10	隅丸方形	407×390×29	15.9	N-13°-W		8 C後半～9 C初	土77に切られる 25住を切る
23	5	不明	400×232×32	8.2	不明		3 C後半～4 C前半	土78に切られる 区域外にかかる
24	10	隅丸長方形	510×344×30	12.3	N-3°-E	南壁東寄り	8 C初～後半	土100・溝1に切られる 25住を切る
25	10	隅丸方形	360×474×22	17.2	N-10°-E	東壁中央?	8 C初	22・24住に切られる
26	11	不明	600×292×26	16.5	不明		8 C末～9 C前半	区域外にかかる
29	11	隅丸長方形	350×305×17	8.3	N-1°-W		不明	土143に切られる
30	11	隅丸方形	320×310×8	9.9	N-15°-E		8 C後半～9 C初	P91に切られる
31	5	隅丸長方形	700×590×29	33.3	N-4°-E		3 C後半～4 C前半	区域外にかかる 34住に切られる
32	5	不整隅丸長方形	382×300×10	10.2	N-4°-E		3 C後半～4 C前半	
33	6	隅丸方形	363×358×17	12.7	N-2°-E		3 C後半～4 C前半	
34	5	不明	550×96×21	8.4	N-7°-E		不明	
37	12	不整隅丸方形	310×306×10	8.9	N-9°-E		不明	
38	6	隅丸長方形	412×380×16	14.1	N-2°-W		3 C後半～4 C前半	区域外にかかる
40	5	隅丸長方形	362×268×18	9.1	N-5°-E		3 C後半～4 C前半	
41	11	隅丸方形	421×370×18	7.6	N-6°-E		7 C末～8 C後半	42住・土151を切る
42	11	隅丸長方形	424×225×18	8.1	N-1°-E		3 C後半～4 C前半	41住・土150・P104に切られる 土149・P105を切る
43	12	隅丸長方形	550×468×14	24.6	N-1°-E		8世紀後半	44住を切る
44	6	隅丸長方形	550×468×14	31.8	N-3°-W		3 C後半～4 C前半	43住・45住・土158に切られる 区域外にかかる
45	6	不明	56×86×14	0.4	N-20°-W		8 C末～9 C前半	44住を切る 区域外にかかる
47	12	隅丸方形	504×300×14	14.2	N-12°-E	東壁北寄り	8 C後半～9 C後半?	

1～5・7・10・19・27・28・35・36・39・46・48住は欠番

第2表 竪穴状遺構一覧

住居 No	図 No	平面形	規模		主軸方向	時期	備考
			長軸×短軸×深さ (cm)	床面積 (㎡)			
1	18	不整隅丸長方形	1410×434×15	50.1	N-4°-E	15C中葉	土111に切られる 土9、P6を切る
2	19	隅丸長方形	512×312×18	15.1	N-4°-E	中世?	
3		欠番 (井戸1)					
4	19	隅丸長方形	555×405×12	18.8	N-3°-E	平安?	土35・39・79・86・102~104・106・107、P51~58に切られる
5	19	隅丸長方形	270×248×10	5.8	N-3°-E	不明	土113に切られる
6	19	不整隅丸方形				不明	
7	19	隅丸長方形	268×258×18	6.3	N-1°-E	不明	竪8を切る
8	19	隅丸長方形	318×236×12	6.2	N-8°-E	不明	竪7に切られる
9		欠番					
10	17	隅丸方形	524×550×35	27.1	N-9°-E	13C後半~ 14C前半	土6・135に切られる

第3表 掘立柱建物址一覧

建 No	図 No	平面形 柱配り	主軸方位 面積 (㎡)	規 模 (cm)	柱間寸法 (cm)	柱穴			備考
						平面形	規模 (cm)	柱痕 (cm)	
1		欠番							
2	15	長方形 側柱式	N-13°-E 19.3	3間×2間 550×354	桁行 梁間 171~193(182) 166~200(183)	円形	径 44~80 深 32~40	10基 φ16~22	
3	16	長方形 側柱式	N-1°-E 19.6	645×304		円	径 36~46 深 8~20		
4	15	長方形 側柱式	N-87°-E 9.1	444×205		円~楕円	径 20~74 深 6~20		
5	15	長方形 側柱式	N-80°-W 6.3	354×179		円~楕円	径 20~64 深 14~20		
6	17	長方形 側柱式	N-2°-W 8.4	467×180		円	径 24~64 深 14~18		領域内に土43を含む
7	16	長方形 側柱式	N-50°-W	634×271		円~楕円	径 50~68 深 10~20		領域内に土35を含む 竪4を切る
柱 1	17		N-80°-W	2間 374	188・184(186)	円	径 32~40 深 14~16	3基 φ8~12	

第4表 土坑一覧

土坑 No	図No	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	時期	備考
1	20	楕円形	96×82×22	不明	
2	20	円形	72×68×18	不明	
3	20	隅丸長方形	136×76×14	平安?	
4	20	楕円形	56×38×14	不明	
5	20	隅丸方形	120×108×19	9C前半	
6	20	円形	102×84×8	不明	
7	20	楕円形	68×44×12	不明	
8	20	円形	52×48×8	9C前半?	
9		楕円形	342×232×16	不明	7住を切る
10	20	隅丸長方形	140×76×26	不明	6住を切る
11	20	楕円形	68×54×28	不明	
12	20	楕円形	48×30×4	不明	
13	20	円形	66×62×16	不明	
14	20	円形	36×28×30	不明	

土坑 No	図No	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	時期	備考
15	20	円形	68×64×22	不明	
16	20	楕円形	68×40×16	不明	
17	20	円形	44×36×8	不明	
18	20	円形	76×70×12	不明	
19	20	円形	48×46×10	不明	
20	20	円形か	80×50×10	平安	
21	20	隅丸長方形	92×36×12	不明	22住を切る
22	20	隅丸長方形	456×100×8	不明	土21に切られる 土23を切る
23	20	不整長方形	200×100×8	4C?	土22に切られる
24	20	楕円形	96×78×20	不明	
25	20	隅丸長方形	132×104×8	不明	
26	20	楕円形	48×36×12	不明	
27	20	楕円形	96×76×14	不明	17住を切る
28	20	隅丸方形	132×106×36	不明	
29	20	楕円形	152×110×48	不明	13住を切る
30		欠番		不明	
31	20	楕円形	80×60×22	不明	
32	21	楕円形	126×90×40	不明	
33	21	楕円形	58×48×10	不明	
34		楕円形	86×54×20	不明	建7を構成
35	21	隅丸方形	156×146×20	不明	竪4を切る 建7の領域内に含まれる
36	21	隅丸長方形	100×72×14	不明	P7に切られる
37	21	隅丸長方形	132×74×16	不明	溝1を切る 土38・39と並ぶ
38	21	隅丸長方形	116×76×20	不明	土48に切られる 溝1を切る 土37・38と並ぶ
39	21	隅丸長方形	116×82×30	不明	溝1を切る 土37・38と並ぶ
40		不整隅丸長方形	70×54×16	不明	溝1を切る 建6を構成
41		円形	60×56×24	不明	建6を構成
42	21	円形	88×80×20	不明	
43	21	円形	146×134×30	不明	土44を切る 建6の領域内に含まれる
44	21	不整楕円形	76×66×10	不明	土43に切られる
45	21	不整楕円形	108×56×20	不明	
46	21	楕円形	64×48×11	不明	
47	21	不整楕円形	106×48×12	不明	
48	21	円形	50×50×20	不明	溝1、土38を切る
49		楕円形	60×46×14	不明	溝1を切る
50		長方形	128×108×10	不明	土51を切る
51		不明	240×112×20	不明	土50、土21に切られる 区域外にかかる
52		円形	60×48×16	不明	建7を構成
53	21	楕円形	52×44×14	不明	
54	21	隅丸長方形	64×54×18	不明	
55	21	隅丸長方形	68×52×24	不明	
56	21	不明	92×60×16	不明	区域外にかかる
57	21	楕円形	92×68×24	不明	
58	21	隅丸長方形	56×44×28	不明	
59	21	隅丸長方形	124×90×24	9C前半?	
60	21	長方形	152×88×20	不明	
61	21	不整長方形	156×116×40	不明	27住を切る
62	21	隅丸長方形	240×140×28	不明	
63	21	楕円形	76×48×6	不明	
64	21	円形	76×72×19	不明	

土坑 No.	図No.	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	時期	備考
65	21	楕円形	74×56×20	不明	
66	21	長方形	286×44×18	不明	
67	21	円形	76×64×26	不明	
68	22	不整長方形	78×40×20	不明	
69	22	不整隅丸長方形	96×76×22	不明	
70	22	隅丸長方形	216×164×46	不明	調査区外にかかる
71		三角	110×72×20	不明	建4を構成
72		楕円形	72×64×18	不明	建4を構成
73	22	楕円形	56×44×20	不明	建4を構成
74	22	隅丸長方形	136×92×8	不明	
75	22	方形	156×146×32	不明	竪4に切られる
76		長方形	176×120×16	不明	
77	22	楕円形	132×84×28	不明	
78	22	楕円形	60×48×8	不明	23住を切る
79		円形	96×92×12	不明	
80	22	円形	80×76×24	不明	
81	22	方形	220×192×36	不明	土97・99に切られる
82	22	不整形	56×52×18	不明	建7を構成
83	22	不整隅丸長方形	188×116×14	4C前半	
84	22	不整長方形	280×200×26	不明	
85		楕円形	62×44×50	不明	
86		隅丸長方形	76×62×12	不明	竪4を切る 建7を構成
87		三角	92×60×16	不明	建5を構成
88	22	円形	46×46×28	不明	
89				不明	
90		円形	60×56×12	不明	建5を構成
91		円形	48×40×16	不明	建5を構成
92	22	円形	48×40×22	不明	
93	22	楕円形	68×58×18	不明	
94		三角形	60×48×12	不明	
95	22	円形	68×60×10	不明	
96		楕円形	52×38×8	不明	
97	22	楕円形	52×44×48	不明	土81を切る
98	22	楕円形	50×38×26	不明	
99	22	円形	56×50×36	不明	土81を切る
100	22	円形	48×48×26	不明	
101	22	円形	76×66×18	不明	
102		楕円形	84×60×14	不明	竪4を切る
103		円形	56×46×20	不明	竪4を切る
104	22	不整隅丸長方形	68×56×12	不明	竪4を切る
105	22	長方形	142×86×8	不明	竪4を切る 土106、P51・57に切られる
106	22	楕円形	68×52×12	不明	竪4を切る
107		円形	58×52×16	不明	竪4・P56を切る
108	22	隅丸方形	92×82×16	不明	
109	22	隅丸長方形	116×52×20	不明	
110		隅丸長方形	152×80×14	不明	29・30住を切る
111	22	長方形	404×186×12	4C?	
112	22	隅丸長方形	60×48×16	不明	
113	23	隅丸長方形	116×60×12	不明	竪5を切る
114	23	不整長方形	272×168×12	不明	

土坑 No.	図No.	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	時期	備考
115	23	楕円形	108×74×18	不明	
116	23	楕円形	72×56×28	不明	
117	23	円形	140×136×28	平安	
118	23	円形	56×52×16	不明	
119	23	隅丸長方形	116×52×12	不明	
120	23	隅丸方形	132×120×20	不明	
121	23	楕円形	76×62×8	不明	
122	23	楕円形	62×36×20	不明	
123	23	隅丸方形	56×54×18	不明	
124	23	円形	52×50×24	不明	
125	23	不明	132×56×12	不明	27住に切られる
126	23	円形	64×62×14	不明	
127	23	不明	148×128×12	不明	竪9に切られる
128	23	円形	108×92×20	不明	
129	23	円形	92×88×20	不明	土130に切られる
130	23	円形	60×48×14	不明	土129を切る
131	23	隅丸長方形	80×66×20	不明	
132	23	円形	76×54×28	不明	土134を切る
133	23	楕円形	68×52×8	不明	建3を構成
134	23	不整形	328×236×10	不明	土132・136、P89に切られる 区域外にかかる
135	23	隅丸長方形	76×28×42	不明	128住、竪10を切る
136	23	不整形	172×72×22	不明	土134を切る P89に切られる
137	23	不整隅丸方形	180×92×22	10C後半～	
138	24	円形	132×128×6	不明	
139	24	隅丸長方形	168×60×16	不明	27住に切られる
140		隅丸長方形	126×96×20	平安	29・30住に切られる
141	24	円形	36×36×44	不明	
142	24	楕円形	244×148×30	不明	30住に切られる P64に切られる
143	24	楕円形	280×196×38	平安	29・30住に切られる P91に切られる
144	24	隅丸方形	76×52×8	不明	
145	24	円形	60×48×8	不明	
146	24	楕円形	240×156×30	不明	
147	24	楕円形	76×54×14	不明	
148	24	楕円形	76×58×6	不明	
149	24	不明	104×64×10	4C?	42住に切られる
150	24	隅丸方形	60×60×20	不明	42住を切る
151	24	不明	108×48×8	不明	41住に切られる
152	24	不明	168×148×36	不明	溝1・土153を切る 区域外にかかる
153	24	不明	92×60×32	不明	溝1を切る 土152に切られる
154	24	円形	56×48×16	不明	
155	24	隅丸方形	56×56×32	不明	
156	24	隅丸長方形	92×76×12	不明	
157	24	円形	86×84×20	不明	
158	24	隅丸長方形	96×92×16	不明	
159	24	円形	100×88×16	不明	
160	24	楕円形	64×44×28	不明	
161	24	円形	58×54×38	不明	
162	24	方形	200×142×26	不明	
163	24	楕円形	74×60×42	不明	

V 遺物

1. 土器・陶磁器

(1) 弥生時代末～古墳時代前期の土器

弥生時代末～古墳時代前期の遺物が8・23・31～33・38・44住から遺構に伴って出土しているほか、遺構検出面および他の各遺構覆土中に混入して出土している。これら土器群の年代幅は、さかのぼっても弥生時代後期の範疇で収まるものと思われ、遺構に伴っているものはいずれも弥生時代末～古墳時代前期に位置づけることができよう。以下、各遺構ごとに概観する。

8住出土土器群（1～5）

IV章で述べたように、8住からは古墳時代前期の土器と、平安時代の土器とがともにある程度まとまって出土しており、2時期の遺構を判別できずに掘削してしまった可能性が高い。古墳時代前期の土器は5点を図示することができた。甕および壺が見られる。甕はともに頸部に櫛書波状文あるいはこれの崩れた文様が施文される。器形は胴が張り、頸部が屈曲をもってすぼまるもの(3)、頸部の外反の強いものがあり、有文甕の形態では新しい特徴を持つ。壺の口縁部(1)は受口状をなし、ハケ調整がなされるもの。なお、8住では該期土器群は遺構北寄りから出土する傾向が見られた。

23住出土土器群（6～8）

3点を図示。図示できたのは甕のみ。いずれも在地の系譜を引くものである。7は口縁部が屈曲して強く外反するもので、胴部上半に櫛書波状文を持つ小型甕である。8は口縁部のみだが、7よりは口縁部の外反が弱く、波状文を持つ。6は頸部が緩やかにくびれ、口縁部が外反する無文小型甕。

31住出土土器群（9～29・96～98）

24点を図示。甕・壺・高坏がある。甕には在地系の有文のもの、口縁部がくの字に外反し、無文のものがある。在地系の有文甕は、櫛書波状文をもつもの、簾状文を持つものがある。18は頸部で縮約し、比較的長い口縁部が外反する。頸部から胴部には崩れた波状文を持つ。口縁部がくの字に屈曲するものは、無文のもの、ハケ調整のものがある。17は短い口縁部が強く外反するもので、胴部下半はミガキ調整される。類例のないものだが、他の土器群に伴うものと考えたい。27は口縁部がやや内湾し、端部が受口状になる。壺は口縁部が開く形態のもので、15は口縁端部が面取りされており、東海地方の該期土器群に通有の器種である。本例は在地産のものであろう。底部は上げ底状の形態をとる。頸部から体部上半にT字文を持つ97・98は同一個体で、他の土器群に比べ古く、弥生時代後期後半のものであろう。

32住出土土器群（30～35）

6点を図示。甕・高坏・ミニチュア土器がある。甕はいずれも在地の伝統的な器種で、体部に櫛書波状文(32)・篋書横線文(33・34)が施文されている。30は高坏の坏部で、緩やかに内湾する形態をとり、口縁端部は面取りされ尖り気味に仕上げられている。東海地方の土器群に系譜を求めることができるものであろう。胎土は赤褐色を呈しており、在地のものとしても違和感はない。31は30とは別個体の脚部で、4単位の透かし穴を持つ。35はミニチュア土器で、内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。

33住出土土器群（36～43・101・102）

10点を図示。甕・(高)坏・壺・小型器台がある。甕は口縁部がくの字に開くもの(39)があるが、弥生時代からの伝統を引く櫛書文を持つものは、混入と見られる弥生時代後期の102以外は見られない。38の(高)坏は口縁部がやや内湾気味に開くもので、内外面とも赤彩されている。41の壺は口縁部が外反し、口縁端部が面取りされているが、加飾は見られない。頸部はハケ調整される。東海地方の該期土器群に通有の器種で

あるが、本例は胎土等は在地のものとして違和感はない。37の小型器台は、作りが雑で、口縁部は指オサエがそのまま残る。脚部内面には放射状のハケ調整がなされている。在地産のものであろう。

38住出土器群 (44~50・103)

8点を図示。甕・壺・坏がある。50の壺は縮約した頸部から口縁部が強く外反して開き、口縁端部が上方に屈折する。頸部はハケ、体部はミガキ調整される。東海地方に系譜を求められるが、胎土は在地のものである。甕は口縁部がく字に開くもので、ハケ調整される。有文甕の103は斜行する櫛書短沈線文が帯状に配されたもの。他に比べ古い要素を持つ。

40住出土器群 (71~73)

3点を図示。出土量が少なく、詳細がわからないが、壺の底部(71・72)、口縁部がくの字に屈曲する甕の頸部(73)がある。

42住出土器群 (75~86・99・100)

4点を図示。遺物量が少なく、小破片からの復元実測を行ったものが多い。甕・壺・高坏がある。甕はく字に開く形態のものが主体をなすが、櫛書文を持つ伝統的な器種(86・99・100)もある。壺(79・80)は頸部ハケ調整で、折り返し口縁のものである。

44住出土器群 (51~70・112)

21点を図示。甕・台付甕・鉢・高坏・小型器台がある。甕には在地系の有文甕と、口縁部がくの字に屈曲するもの、受口状のものがある。有文甕の69は、屈曲部下に波状文を持つ。炉体土器である。口縁部がくの字に開く甕は、体部をハケ調整するものと、ケズリ・ナデ調整とするものがある。受口状口縁の70は体部外面上半がハケ、下半がケズリ調整で、口縁内面もハケ調整が行われている。53は高坏と思われ、やや内湾しつつ直線的に開く形態のもの。口縁端部は面取りされない。54は鉢あるいは高坏で、体部で屈曲し、長い口縁部が直線的に開く形態をとる。53・54とも東海地方の該期土器群に類例があるが、本例の胎土は在地のものとしても違和感はない。高坏の51は口縁部が剥落し、擬口縁となっている。55は壺の口縁部で、頸部に粘土紐を貼付けて二重口縁に似せた形態としている。

83号土坑出土土器群 (87~89)

3点を図示。高坏・甕がある。高坏は透かしを持つが、単位は不明。甕は口縁部がくの字に開く形態のもの。

(2) 奈良・平安時代の土器・陶器

6住出土土器群

出土量がわずかで、図示できる個体もなかった。土器群は土師器・黒色土器A・灰釉陶器からなるが、いずれも小片である。帰属時期ははっきりとしない。

8住出土土器群 (115~121)

7点を図示。黒色土器A坏・椀、須恵器高坏・長頸壺・短頸壺がある。点数が少なく、全容が不明であるが、須恵器高坏の形態・黒色土器Aの存在から4期あたりに位置づけられるものであろうか。

9住出土土器群 (122~131)

10点を図示。食器に須恵器坏A・蓋B、土師器坏A、煮炊き具に土師器甕、貯蔵具に須恵器長頸壺・甕がある。須恵器坏Aはいずれも底部回転糸切り未調整のもの。土師器坏Aはやや外反しつつ直線的に開く器形のもので、底部は128が回転糸切り未調整、127がナデ調整。土師器甕の9は、器形・胎土・色調等から畿内系丸底甕の搬入品と考えられる。外面調整は粗いハケにより、内面は縦のナデ調整。口縁内面端部はわずかに上方につまみあげるように作られている。

土器群の帰属時期であるが、土師器坏の127は形態的な特徴等から他よりも時期が下るものと思われ、9期

以降に位置づけられよう。また、129の畿内系丸底甕は7世紀末～8世紀初頭（1～2期）に帰属するものであろう。その他の土器群は4～5期に位置づけられるものであろうか。

11住出土土器群（132～155）

24点を図示。食器に須恵器坏B・坏蓋B・高坏、黒色土器A坏Aが、煮炊き具に土師器甕B・小型甕D、貯蔵具に須恵器長頸壺・壺蓋がある。食器の主体は黒色土器Aに占められているが、灰釉陶器の食器や黒色土器Aの椀・皿は見られない。須恵器坏蓋Bは、口縁端部がく字に屈曲し、天井部から口縁部にかけて湾曲するものであろう。142には天井部及び内面にヘラ書きの記号がある。須恵器高坏は坏部が浅い形態のもの。土師器甕Bは定型化以後のもので、口縁部のヨコナデが強く、また口縁部は比較的長いものである。須恵器壺蓋（149）・長頸壺（151）はともに胎土が白灰色で、美濃須衛窯産と思われる。

本址出土の土器群は、黒色土器A坏Aの量に対し、須恵器坏Aが少ないものの、6期あたりに位置づけられよう。

12住出土土器群（191）

1点のみ図示。図示できなかったが、須恵器甕の体部破片が出土している。遺物量が少なく、帰属時期は不明である。

13住出土土器群（167～190）

24点を図示。食器に須恵器坏A・坏B・坏蓋B・高坏、灰釉陶器椀、黒色土器A椀・坏A、煮炊き具に土師器甕、貯蔵具に須恵器短頸壺・甕がある。須恵器坏Aの底部は回転ヘラケズリ・回転糸切り両者が見られる。坏Bは高台が外側に開くもの、また垂直に下るものがある。187も坏Bと思われるが、胴部下半に2条の沈線がある。坏蓋Bは口縁端部が単に下がるものと、口縁部が湾曲し、端部がくの字に折れ曲がるものがあり、前者が主体をなすようである。高坏の185・186は同一個体で、他の土器群よりも帰属時期が古く位置づけられる。本址北東のP1出土であるため、あるいは18住に伴うものであったのかもしれない。また、182・183は年代が下る。これらを除くと、本址土器群は4～5期に位置づけられよう。

14住出土土器群（192・193）

2点を図示できたのみ。須恵器蓋坏B・甕で、詳細が不明だが、蓋坏Bの形態は4～6期に位置づけられるものであろうか。

15住出土土器群（194～197）

4点を図示。軟質須恵器坏A・土師器甕B・小型甕Dがある。土師器甕Bは口縁部のナデが強く、口縁部が直線的に立ち上がる形態のもの。軟質須恵器坏Aの存在と合わせ、7～8期あたりに帰属するものであろうか。

16住出土土器群（156～166）

11点を図示。須恵器坏A・坏B、黒色土器A坏、土師器坏A・盤B、灰釉陶器椀、土師器甕Bがある。須恵器坏Aの外傾指数は74で底部回転糸切り未調整。土師器甕Bは比較的厚手で、定型化以前の形態をとる。160・162～164は他より時期が下り、混入と考える。以上から、本址出土土器群は3～4期に帰属しよう。

17住出土土器群（198～210）

13点を図示。図示できたのは須恵器のみであるが、食器に坏A・坏蓋Bが、貯蔵具に短頸壺・把手付壺・甕がある。坏Aの底部の調整は207がヘラ切り後ヘラケズリのほかは全て回転糸切りによる。外傾指数は78～96である。坏蓋Bは口縁端部がく字に屈曲するものと、単に下がるものがある。以上から4～5期に位置づけられるものであろう。

18住出土土器群（223～238）

16点を図示。食器に須恵器坏A・B・坏蓋B、黒色土器A坏A、煮炊き具に土師器甕A・B・小型甕Dがある。図示できなかったが、畿内系丸底甕も出土。須恵器坏Aは底部から開き気味に立ち上がり、内屈して

直線的に開く。外傾指数は225が77、224が88である。坏Bは大小があるが、ともに底面回転ヘラケズリ調整で、高台は外に開き気味である。高台断面形状は平行四辺形である。223・224の底面にはヘラ書きの記号がある。坏蓋Bは口縁端部がやや内側に折れ曲がる。内面に返りを持つ坏蓋Aは見られなかった。土師器甕Aは口縁部が外反する長胴の器形で、厚手である。甕Bも同様の器形と思われ、厚手に作られており、輪積痕が観察できる。黒色土器A坏A(234)・土師器小型甕D(232)は他の土器群よりも時期が下り、本址を貼っていた11住に伴うものであった可能性が高い。以上から、本址出土土器群は2期に位置づけられよう。

20住出土土器群

遺物出土量が少なく、また図示できる個体もなかった。小破片であるが、須恵器坏A・坏蓋Bがある。坏蓋Bは口縁端部が単に下がるものと、口縁部が屈曲し、端部がくの字に折れ曲がるものの両者がある。帰属時期は判然としない。

22住出土土器群(211～214)

4点を図示。須恵器坏A・坏蓋B・長頸壺がある。211は底部回転糸切り未調整、坏蓋Bは口縁端部が単に下がる形態のもの。点数が少なく詳細が不明だが、4～5期あたりに位置づけられようか。

24住出土土器群(265～279)

15個体を図示。食器に須恵器坏A・坏B、煮炊き具に土師器甕A・甕B・小型甕D、貯蔵具に須恵器甕A・長頸壺B・横瓶がある。須恵器坏Bは高台が外に開き気味に付けられ、体部は屈曲して立ち上がる。須恵器坏蓋Bは端部が折れ曲がる形状のもので、くの字に強く屈曲したり、天井部にかけての湾曲は見られない。土師器小型甕Bは、外面がカキ目調整後斜めのハケ調整がなされるが、内面にはカキ目は見られない。胴の張りは弱く、口縁部は屈曲して開く。器壁は薄く仕上げられ、特に底部は非常に薄い。須恵器長頸壺B(274)は胎土が在地のものとなり、色調も白灰色を呈す。形態の特徴とも合わせて美濃須衛窯産のものか。本址出土土器群は、須恵器坏B・坏蓋B・小型甕Bの特徴、また美濃須衛窯産の須恵器長頸壺Bの存在等から4期あたりに位置づけられよう。

25住出土土器群(303～312)

10点を図示。土師器坏・須恵器坏蓋B・須恵器長頸壺・土師器甕A・Bがある。坏蓋Bは口縁部が下に折れ曲がるもの。須恵器長頸壺・土師器甕A・Bは本址東壁よりほぼ中央付近からまとまって出土している。土師器甕A・Bはいずれも器壁は厚手で、口縁部の外反は弱く、屈曲も見られない。長胴の器形で、胴部の張りは弱い。甕Bの外面のハケメは1単位が短く、また方向もばらつきがある。本址出土土器群は、土師器甕の特徴から2期あたりに位置づけられよう。

26住出土土器群(215～222)

8点を図示。食器に須恵器坏A・坏蓋B、煮炊き具に土師器小型甕C・D、貯蔵具に須恵器甕がある。須恵器坏Aの218の外傾指数は100である。坏蓋Bの215は端部がくの字に屈曲しており、天井部が口縁部近くで湾曲する形態のものであろう。小型甕Dはカキ目がていねいに施されており、定型化したものと思われる。以上から本址出土土器群は5～6期に位置づけられよう。

29住出土土器群

出土量が少なく、また図示できる個体もなかった。土器群は須恵器と土師器で構成されており、黒色土器Aや灰釉陶器は見られなかった。帰属時期は不明である。

30住出土土器群(239～248)

10点を図示。食器に須恵器坏B・坏蓋B、黒色土器A坏Aが、煮炊き具に土師器甕Bがある。須恵器坏Bは体部が屈曲をもって立上り、高台は八の字に開くもの。坏蓋Bは口縁部近くで湾曲し、端部がくの字に屈曲するものがあるが、湾曲はそれほど強くない。口縁端部が内側に折れ曲がるだけのものも見られる。土師器

甕Bは外面のハケが底部まで施される。内面は底部付近がナデ、それより上がハケ調整のようである。点数が少なく、全体の構成を窺えないが、4～5期に帰属するものであろうか。

37住出土土器群 (288・289)

2点を図示。須恵器坏B・鉢がある。坏Bは高台が外に開き、内側で接地するもの。帰属時期は不明である。

41住出土土器群 (280～285)

6点を図示。須恵器坏A・坏蓋B・灰釉陶器碗がある。須恵器坏Aは底部ヘラ切り。遺物の年代に幅があるが、須恵器が主体を占めており、1～4期の年代幅に収まるものであろうか。

43住出土土器群 (251～264)

14点を図示。食器に須恵器坏A・坏蓋B、煮炊き具に土師器甕A・Bがある。須恵器坏A(251)は底部回転系切り未調整。坏蓋Bは口縁端部が単に下がるものと、口縁部が湾曲し端部がくの字に折れ曲がるものがある。土師器甕Bは比較的厚手で、長い口縁部が強く外反するなど、定型化以前の特徴を持つ。また、土師器甕Bが一定量組成している。以上から3～4期に位置づけられよう。

45住出土土器群 (249・250)

2点を図示。45住は大半が調査区外にかかり、カマドの一部のみしか調査できなかったため、遺物は少ない。図示した2点は同一個体の可能性が高い。土師器甕Bであるが、定型化したもので、5期あるいは6期に位置づけられよう。

47住出土土器群 (290)

1点を図示。出土量がわずかのため、土器群の構成が不明。坏蓋Bの形態から、4～7期の年代幅に収まるものであろうか。

(3) 中世の土器・陶磁器

21住出土土器・陶磁器 (327・328)

2点を図示。土師器皿と東海系の須恵質捏鉢があり、図示できなかったが須恵質擂鉢と常滑系陶器の甕または壺がある。土師器皿が13世紀代だが、その他は14世紀代である。

竪1出土土器・陶磁器 (329～335)

7点を図示。土師器皿・内耳土鍋・古瀬戸折縁深皿・山茶碗・灰釉陶器がある。土師器皿はロクロ調整のもので15世紀代、折縁深皿は15世紀中葉、山茶碗は13世紀前葉のものか。331は底部付近が完存しているが、周囲が意図的に打ち欠かれており、高台部分も3分の1ほどが打ち欠かれている。底外面は平滑で、砥石として転用されたものか。本址土器群は、ロクロ調整の土師器皿・内耳土鍋・古瀬戸折縁深皿が見られ、15世紀中葉あたりの器種構成を示していよう。山茶碗は混入と判断したい。

竪10出土土器・陶磁器 (336～341)

6点を図示。土師器皿・古瀬戸四耳壺・東海系須恵質捏鉢・青磁瓶子がある。図示できなかったが、鉄釉の古瀬戸瓶子(写真図版18)も出土している。土師器皿はいずれもロクロ調整のもので、15世紀代。古瀬戸四耳壺は13世紀後半、東海系捏鉢は13世紀末～14世紀初、青磁瓶子は13世紀代か。遺物の年代に幅があるが、341が床面から出土しており、遺物の年代は13世紀後半～14世紀初辺りに位置づけられようか。

井戸1出土土器・陶磁器 (342～350)

9点を図示。掘方・井側ともに出土量は多くはない。掘方出土のものが342～344、その他が井側覆土出土である。掘方出土のものには青磁壺・白磁盤・常滑甕があり、12世紀～13世紀前半にわたる。井側内出土のものには東海系捏鉢・奈良火鉢・須恵質擂鉢があり、13世紀前半～14世紀にわたる。このことから、本址の

構築年代は13世紀前半頃で、廃絶が14世紀以降といえよう。

その他の遺構出土土器・陶磁器

量的にはわずかつづであるが、豎2・豎7・土8・土14・土35から該期土器・陶磁器が遺構に伴って出土している。他時期の遺構覆土に混入したもの、検出面出土のものもあるが、詳細は第6表に譲りたい。これらの土器・陶磁器は12～15世紀にわたっており、遺構の年代幅にほぼ収まっている。

2. 石器

①石器群の概要

本調査では古墳時代前期、奈良・平安時代、中世の集落が検出されたが、主として住居址、土坑、井戸等の遺構より総点数117点、総重量10158.1gを測る石器群が出土した。母岩識別・接合作業を実施したところ、接合資料5例13点を確認し得た。遺跡単位石器群としては接合率11%、平均接合個体数2.6点となる^(註1)。

②器種概観

古墳時代前期に帰属すると考えられる第33・42・44号住居址からは礫石器複合及び砥石状石器が出土した他、混入品と考えられる磨製鏃形石器等が出土している。奈良・平安時代に帰属すると考えられる第8・9・11・13・14・16・18・19・20・22・24・25・30号住居址からは礫石器複合及び砥石状石器が出土した他、混入品と考えられる打製斧形石器、錘状石器Ⅰ類等が出土している^(註2)。中世に帰属すると考えられる第1・10号竪穴状遺構からは、砥石状石器、硯形石器及び礫石器複合等が出土している。

③石材概観

遺跡全体としての遺跡単位石器群では16種の石材が認められる。硬砂岩、砂岩、頁岩、凝灰岩、粘板岩等を主体としているようである。原産地としては、和田峠産と考えられる黒耀岩を除いては、一部の安山岩が東山系統のものである他は、西山系統のものが多いものと考えられる。

④石器群・接合資料概観

住居址・竪穴状遺構単位石器群 平均点数は3.42点となり、各時期を通じて砥石状石器かもしくはそれに類する機能を持つと考えられる礫石器複合が平均的に組成されているようである。第9号住居址石器群では礫石器複合が折れ面で接合する第1号接合資料を、第1号竪穴状遺構石器群一検出面では硯形石器が摂理面に沿う剥落面で接合する第2号接合資料を確認している。

土坑単位石器群 平均点数は1.3点となり、やはり砥石状石器かもしくは礫石器類を組成する状況が多いようである。第3号接合資料は第143号土坑石器群の砥石状石器4点と第152号土坑石器群の砥石状石器1点が直線距離で約20mを隔て、摂理面に沿う剥落面及び折れ面で接合するものである。剥離面及び折れ面の切り合い関係からは、1) 第143号土坑において5個体に分離した後85のみが持ち出されたか、あるいは逆に、2) 第152号土坑において5個体に分離した後86・87・88・89が持ち出されたものと考えられる。

第1号井戸石器群 遺構単位石器群としては最多の24点が出土している。被熱痕跡と考えられる赤化面が認められるものが含まれており、廃棄以前に遺構外において何らかの加熱行為があったものと想定される。接合資料は2例を確認し得た。第4号接合資料は礫石器複合が折れ面で接合するものであるが114は検出面より出土しており、生活面上において2個体に分離した後に、91が遺構内に投棄されたものとも考えられる。第5号接合資料は石核と微細剥離痕のある剥片が摂理面に沿う剥離面で接合するものである。

⑤小結

小項では主に遺跡単位、遺構種単位、遺構単位で石器群を概観した。遺跡単位石器群としての接合率は11%であったが、逆に接合しなかった単独個体が89%あったことになる。自然礫や礫石器類等の接合可能面を

持たない個体も含まれている為本来の接合率はより高率を呈することとなるが、遺構単位石器群の中では収束しない遺構間の関係が想定される。

補註)

註1 接合率:総接合個体数/石器総点数、平均接合個体数:総接合個体数/接合資料数として算出している。

註2 石器の分類については拙稿(太田 1998)で仮設したものをを用いているので参照頂きたい。なお、従来石錘等と呼称されてきた石器については「錘状石器Ⅰ類:主に扁平礫等を素材とし、長軸上に剝離もしくは研磨により挟り部を形成した石器」と、また従来こもで石等と呼称されてきた石器については「錘状石器Ⅱ類:基本的には棒状を呈する自然礫であるが、人為的加工の有無に拘らず特殊な遺物出土状況から認定される石器」と仮設しておきたい。

太田圭郁 1998「②石器・石製品」『境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ』松本市教育委員会

3. 金属器

総計75点出土し、このうち50点を図示した。1点が青銅製品のほかは全て鉄製品。器種には刀子、釘、鉄鏃、毛抜き型鉄器、燧鉄、鑿状製品、飾金具、紡錘車、不明品、鉄滓がある。これらの多くは遺構に伴って出土している。遺構の中では、豎1が最も多く20点、次いで13住の7点となる。豎1からは、釘・燧鉄・不明品・鉄滓などがまとまって出土しており、注目される。詳細は第11表に譲り、以下器種ごとに概観したい。

刀子 3点出土し、全て図化した。遺構の時期から、5は古代、43・44は中世に帰属するものであろう。

釘 42点出土し、点数が最も多い。30点を図示した。古代～中世にわたるが、遺構の年代から豎1出土の28～30・32～37は中世に帰属するものであろう。

鉄鏃 1点出土したのみ。21は雁股鏃の篋被部から基部が残存しており、篋被部が関から刃にかけて逆三角形形状に広がるものであろう。

毛抜き型鉄器 1点出土したのみ。2つに折り曲げられたタイプのものであり、脚部を欠くが、先端の方が薄くなるようである。遺構の年代から、古代のものか。

燧鉄 豎1より1点が出土したのみ。裾部が垂直に立ち上がるもの。残存している範囲では底部は直線的。

飾金具 1点出土したのみ。ひし形を呈する。

紡錘車 検出面から紡軸が1点出土したのみ。

不明品 15点出土し、10点を図示。2の青銅製品は発泡しており、被熱が認められる。4は形態は鏃に近いが、やや大きい。3も4に似た形態をとる。20は環状のものとして図上復元した。26はボタン状の突起が2つある。31の板状鉄片はいびつな平行四辺形状の形態となるものと思われる。側縁の断面形状は片そぎの三角形となる。

鉄滓 12点、総量882g出土した。出土地点と重量は、21住(54g)、27住(24g)、豎1(602g)、豎2(48g)、土140(42g)、A区検出面(88g)、B区検出面(24g)で、大半が豎1から出土している。

4. 銭貨

8点出土し、うち3点は土坑墓である土56より出土している。詳細は下表に譲るが、いずれも北宋銭で、初鑄年代が古いもので太平通宝の976年、新しいもので宣和通宝の1119年である。

第5表 出土銭貨一覧

No.	出土地点	銭貨銘	初鑄年	No.	出土地点	銭貨銘	初鑄年
1	16住	太平通宝	976	5	土56	元豊通宝	1078
2	20住	?		6	土56	紹聖元宝	1094
3	井戸1	宣和通宝	1119	7	土110	元豊通宝	1078
4	土56	嘉裕元宝	1056	8	A区検	聖宋元宝	1101

第6表 出土土器一覽

No	出土地点	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度 口縁 底部	色調		成形・調整・形態の特徴等
								外	内	
1	8住	土師	壺?	18.2			1/12	暗橙褐	暗橙褐	外面ハケ 内面ヨコナデ
2	8住	土師	壺?	(16.0)	8.6		1/3	暗褐	暗褐	内外ミガキ 底部ヘラケズリ
3	8住	土師	甕	15.4			1/3	暗褐	暗褐	内外摩擦 口内面ハケ 外面波状文
4	8住	土師	甕	14.8			一部	橙褐	橙褐	外面ヨコナデ後波状文 内面横ミガキ
5	8住	土師	壺		8.0		完	暗橙褐	暗橙褐	内外面摩擦著しい
6	23住	土師	甕	14.0			1/8	淡褐	淡褐	内外ナデ
7	23住	土師	甕	10.2			1/16	暗褐	暗褐	内外工具ナデ 口縁部ヨコナデ 胴部上半に波状文
8	23住	土師	甕	17.2			1/16	淡褐	淡褐	内外ナデ 頸部に波状文
9	31住	土師	高坏					橙褐	橙褐	内外面ナデ
10	31住	土師	壺?	12.6			1/6	暗褐	暗褐	外面ミガキ、内面ナデ
11	31住	土師	短頸壺?	9.0			1/4	暗橙褐～暗褐	暗橙褐～暗褐	内外面工具ナデ
12	31住	土師	壺	14.6			1/10	淡褐	淡褐	内外面ヨコナデ
13	31住	土師	壺		5.0		1/5	淡褐～暗褐	暗褐	内外面工具ナデ 底面ケズリ
14	31住	土師	壺?					暗赤褐	暗赤褐	内外面赤彩 ミガキ
15	31住	土師	壺	17.3			3/4	淡褐	淡褐	内外面ナデ 口縁端部面取り
16	31住	土師	壺		7.6		1/5	暗褐	暗褐	外面ハケ、内面ナデ 底部付近外面ヨコナデ 底面ナデ 底部ドーナツ状
17	31住	土師	甕	11.8			1/12	暗褐～暗橙褐	暗褐	外面下半縦のミガキ、上半工具ナデ 内面工具ナデ 口縁部ヨコナデ
18	31住	土師	甕	13.6			1/6	暗褐	暗褐	外面衝書波状文、内面横ミガキ
19	31住	土師	甕	13.0			1/4	淡褐～暗橙褐	淡褐～褐	外面ハケ 内面工具ナデ 口縁部付近ヨコナデ
20	31住	土師	甕					暗褐	淡褐～暗褐	内外面工具ナデ、胴部上半衝書波状文
21	31住	土師	甕					暗褐	淡褐	外面ハケ、内面ナデ
22	31住	土師	甕	22.0			1/16	暗褐	淡褐～暗褐	内外面ハケ
23	31住	土師	甕	13.0			一部	暗橙褐	暗褐	ヨコナデ
24	31住	土師	甕	15.2			1/10	淡褐	暗褐	ヨコナデ 外面一部指ナデ
25	31住	土師	甕	14.0			1/8	淡褐～橙褐	淡褐	ヨコナデ
26	31住	土師	甕	18.4			1/12	暗橙褐	暗褐	ヨコナデ
27	31住	土師	甕	15.0			1/8	暗褐	褐～暗褐	外面ハケ摩擦、口縁部内面ハケ、胴部内面工具ナデ 口縁やや内湾
28	31住	土師	甕	15.4			一部	暗褐	褐～暗褐	外面ハケ、内面ヨコナデ
29	31住	土師	甕	14.6			1/4	暗褐	褐～暗褐	外面ハケ、口縁部内面ハケ、胴部内面工具ナデ
30	32住	土師	高坏	22.6			1/4	橙褐	橙褐	内外ミガキ摩擦 口縁端部尖り気味
31	32住	土師	高坏					暗黄褐	暗黄褐	外面ミガキ 内面工具ナデ 透かし穴4単位
32	32住	土師	甕					橙褐	橙褐	内外摩擦 頸部外面に波状文
33	32住	土師	甕					暗褐	暗褐	外面板状工具によるナデ、下半に一部ハケあり 内面上半ミガキ、下半工具ナデ
34	32住	土師	甕	18.2			完	暗褐	暗橙褐	内外ナデ 外面頸部衝書直線文
35	32住	土師	ミニチュア	4.5	3.6	4.8	一部 完	赤褐	赤褐	内外指ナデ 一部ミガキ 輪積痕明瞭 底面剝落

No.	出土地点	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
							口縁	底部	外	内	
36	33住	土師	鉢	14.2			1/10		褐	褐	内外面ミガキ摩滅
37	33住	土師	器台	9.7			完		暗橙褐	暗橙褐	脚部外面ナデ 口縁部付近指ナデ 内面ハケ
38	33住	土師	鉢	21.6			1/8		褐	褐	内外面赤彩 ミガキ密だが摩滅 口縁部ヨコナデ
39	33住	土師	甕	17.4			完		暗褐	暗褐	内外面ハケ 口縁部ヨコナデ
40	33住	土師	壺		6.3		2/3		黒～褐	褐	外面ヘラケズリ後ミガキ 内面ナデ 底部ヘラケズリ
41	33住	土師	壺	16.8			1/6		橙褐	橙褐	外面ハケメ摩滅 内面縦のミガキ 口縁部ヨコナデ
42	33住	土師	壺						褐	暗褐	外面ミガキ 内面ハケ
43	33住	土師	壺						黒～赤褐	褐	外面ヘラケズリ後ミガキ 内面ナデ
44	38住	土師	甕?	16.6			1/6		暗褐	暗褐	外面ハケ 内面ヨコナデ
45	38住	土師	甕?	15.6			一部		暗褐	暗褐	内外面ヨコナデ
46	38住	土師	甕	15.0			一部		暗褐	淡褐	内外ともヨコナデ
47	38住	土師	壺?		4.6		1/2		暗褐	暗褐	内外面に赤彩
48	38住	土師	壺		6.4		2/3		暗橙褐	暗灰褐	内外面ナデ 底部ナデ
49	38住	土師	壺?	17.4			1/6		橙褐	橙褐	内外面ナデ 口縁部に指頭圧痕
50	38住	土師	壺	13.8			1/2		暗褐	暗褐	やや摩滅 外面頸部ハケ、胴部ミガキ 内面ナデ
51	44住	土師	高坏						暗褐	暗褐	坏部外面ケズリ、内面ナデ 脚部外面ハケ、内面粗いナデ 透かし穴の単位不明
52	46住	土師	壺?		5.0		1/3		褐	黒～暗褐	内外面摩滅
53	46住	土師	高坏	17.2			1/6		淡橙褐	淡橙褐	内外面摩滅
54	44住	土師	鉢	19.8			1/3		淡褐	暗褐	内外面ともナデ 胴部下半ヘラケズリ
55	46住	土師	壺	18.0			2/3		橙褐	橙褐	胴部工具ナデ 口縁部ナデ 内面工具ナデ、一部ハケ
56	44住	土師	鉢	19.8			1/3		淡褐	暗褐	内外面ナデ 外面下半ヘラケズリ
57	44住	土師	甕						暗褐	暗褐	外面ヘラケズリ 内面板状工具による丁寧なナデ
58	46住	土師	甕	15.4			1/6		褐	暗褐	外面ハケ 口縁部内外面ナデ
59	46住	土師	甕	16.0			1/3		暗褐	暗褐	内外面ハケ
60	44住	土師	甕	17.6			一部		暗褐	暗褐	外面ハケ、内面ナデ
61	45住	土師	甕	14.6			1/8		暗褐	暗褐	口縁部ヨコナデのちハケ 内面丁寧なナデ
62	46住	土師	台付甕		9.4		1/4		橙褐	橙褐	外面ハケ 脚部内面ケズリ
63	44住	土師	甕		6.6		完		暗褐	暗褐	外面ハケ、底部付近ヘラケズリ 内面工具ナデ、底部一部ハケ後ナデ 底部ナデ後ケズリ状のなで付け
64	44住	土師	甕		6.4		1/2		褐	褐	外面横→縦の工具ナデ、底部付近はヘラケズリ 内面ハケ 底部ナデ
65	45住	土師	甕	13.0			完		暗褐	暗褐	内外面ナデ 外面下半ケズリ
66	44住	土師	甕	25.2			1/6		明淡褐	暗褐	内外とも摩滅 外面ハケ
67	46住	土師	甕	17.4			1/4		暗褐	褐～暗褐	口縁部ヨコナデ 胴部内外面摩滅
68	45住	土師	壺	16.2			完		暗橙褐	暗橙褐	内外とも摩滅
69	45住	土師	甕						暗褐	暗褐	胴部上半に波状文 外面ミガキ、内面ナデ 炉体土器
70	45住	土師	甕	15.4	6.2	24.3	1/2	1/2	暗橙褐	暗橙褐	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ 体部外面上半ハケ、下半ケズリ 内面ナデ
71	40住	土師	甕	19.4			一部		暗褐	暗褐	内外面ナデ 口唇部に刻み

No.	出土地点	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
							口縁	底部	外	内	
72	40住	土師	壺?		5.2		一部		暗褐	暗褐	内外面ナデ
73	40住	土師	甕						暗褐	暗褐	外面ハケ 内面ナデ
74	土152	土師	甕	8.0			1/2		淡黄褐	淡黄褐～淡褐	外面クロロナデ 内面一部ハケ 底面ナデ
75	42住	土師	高坏						暗褐～赤	暗褐～赤	脚部外面・坏部内面赤彩後ミガキ 脚部内面は工具ナデ
76	42住	土師	?	10.0			一部		暗褐	暗橙褐	外面指ナデ 内面工具ナデ 口縁部ヨコナデ 口縁は波状となるか?
77	42住	土師	甕		7.2		1/6		暗橙褐	暗橙褐	内外面ナデ
78	42住	土師	壺		6.6		3/4		橙褐	橙褐	外面ナデ 内面ハケ
79	42住	土師	壺	13.2			1/8		褐	褐	折り返し口縁 外面ハケ 内面ナデ
80	42住	土師	甕						暗褐	暗褐	外面ハケ 内面ナデ
81	42住	土師	甕	5.6			1/4		暗褐	暗褐	内外面工具ナデ 底部ナデ
82	42住	土師	甕	5.1			1/10		暗褐	暗褐	内外面工具ナデ 底部ナデ
83	42住	土師	甕	19.6			一部		暗褐	暗褐	内外面ヨコナデ
84	42住	土師	壺	18.0			1/10		暗褐	暗褐	外面ハケ 内面ヨコナデ
85	42住	土師	甕	17.8			1/10		暗褐	暗褐	外面ハケ 内面ヨコナデ
86	42住	土師	甕	19.2			一部		暗褐	暗褐	内外面ナデ 体部に簾状文?を施文 口唇に単節LR縄文を施文
87	土83	土師	高坏						褐	褐	脚部外面ハケ後ミガキ、内面ナデ、しぼり痕あり 坏部内面ミガキ
88	土83	土師	甕	15.6			1/4		褐	橙褐	内外面ハケ
89	土83	土師	甕	15.8			1/10		褐	褐～暗褐	口縁部内外ハケ 胴部外面ハケ、内面ナデ 摩滅
90	土111	土師	甕	21.4			1/12		橙褐	橙褐	内外ナデ
91	土102	土師	壺						淡褐	淡褐	頸部内外ともハケ 口縁部外面ナデ、内面ヨコハケ
92	土149	土師	甕						黒～暗褐	暗褐	外面ハケ 内面工具ナデ
93	土23	土師	高坏						赤褐	赤褐	内外面赤彩
94	11住	弥生	甕	12.6			1/8		暗褐	暗褐	内外面波状文 口唇部に刻み
95	13住	弥生	壺	18.0			1/12		淡褐	淡褐	内外面ともナデ 口縁部に連続山形文 口唇部に縄文
96	31住	土師	甕						暗褐	暗褐	外面ナデ 胴部上半に波状文 内面ミガキ
97	31住	弥生	壺						明褐	明褐	内外面とも摩滅 外面T字文 98と同一個体
98	31住	弥生	壺						明褐	明褐	97と同一個体
99	42住	土師	甕						明赤褐	明赤褐	波状文 内面ナデ
100	42住	土師	甕						暗褐	暗褐	外面波状文 内面ナデ
101	35住	弥生	甕						暗橙褐	暗橙褐	波状文下に斜行する櫛書短沈線文 内面ナデ
102	33住	弥生	甕						明橙褐	明橙褐	櫛書短沈線文下に櫛書鋸歯状文 内面ナデ
103	38住	弥生	甕						淡褐～暗褐	淡褐～暗褐	斜行する櫛書短沈線文 内面ナデ
104	土152	土師	甕						暗褐	明淡褐	簾状文 内面ナデ
105	土152	弥生	甕						明淡褐	明淡褐	斜行する櫛書短沈線文
106	24住	弥生	壺?						明褐	明褐	内外とも摩滅著しい 外面4条の平行沈線の下に波状文
107	30住	弥生	甕						暗褐	暗褐	櫛書横線文下に斜行する櫛書短沈線文 内面ナデ
108	47住	土師	甕						暗黄褐	暗黄褐	へラ書き鋸歯状文 内面ナデ

No.	出土地点	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
							口縁	底部	外	内	
109	46住	弥生	?						暗褐	暗褐	内外面とも摩滅 外面に鋸歯状の沈線
110	検出面	土師	甕						淡褐	淡褐	外面縦の工具ナデ 波状文 内面ハケ
111	検出面	弥生	甕						暗褐	暗褐	内外とも摩滅 口縁部にボタン状の貼付け
112	44住	弥生	甕						明淡褐	明淡褐	内外とも摩滅 内面ナデ
113	41住	弥生	甕						淡褐	淡褐	籬状文下に斜行する櫛書短沈線文 内面粗いナデ
114	C区検	弥生	壺						明黄褐	明橙褐	内外面ナデ 外面籬状文
115	8住	須恵	長頸壺A	5.6			3/4		緑灰	緑灰	口縁全体・内面口縁部に自然釉付着
116	8住	須恵	短頸壺	6.2			1/20		灰	暗灰	内外面自然釉付着
117	8住	須恵	高坏		11.6			1/4	暗灰	灰	外面の一部に自然釉付着
118	8住	須恵	坏A		7.7			一部	暗灰	暗灰	底面回転系切り
119	8住	土師	坏A	17.4	6.1	5.3	5/8	完	灰褐	灰褐	底面回転系切り
120	8住	黒A		12.3			1/4		暗灰褐	黒	外面口縁部ナデ 内面やや摩滅 黒色処理後ミガキ
121	8住	黒A	椀		60		1/3		橙褐	黒	付高台
122	9住	須恵	坏A		5.8		1/3		白灰	白灰	底面回転系切り
123	9住	須恵	長頸壺						黒灰	暗灰	内外面自然釉付着
124	9住	須恵	坏A		6.8			一部	暗灰	暗灰	底面回転系切り
125	9住	須恵	坏蓋B	14.4			1/8		暗灰	暗灰	底面回転系切り
126	9住	土師	坏	14.4			1/8		暗褐	暗褐	端部ヨコナデ
127	9住	土師	坏	13.8	5.2	3.9	1/3	完	暗褐	黄褐	口縁部ヨコナデ
128	9住	土師	坏		7.8		1/2		暗褐	暗褐	底面ナデ
129	9住	土師	甕	14.8			1/4		淡褐	淡褐	底面回転系切り
130	9住	須恵	甕		13.8			一部	黒灰	暗灰	外面粗いハケ 内面縦のナデ 畿内系丸底甕
131	9住	須恵	甕E						橙灰	橙灰	外面タタキ目 内面ナデ 底面工具ナデ
132	11住	黒A	坏?	17			1/6		橙灰	橙褐	胴部下半口縁部ナデのち粗いケズリ 上半タタキ目 内面口縁部ナデ
133	11住	黒A	坏A		7.0		1/2		暗褐	黒	内面摩滅
134	11住	黒A	坏?		5.2		1/2		褐	黒	内面摩滅
135	11住	黒A	坏A	12.8	5.8	4.2	1/3	完	明褐	黒	黒色処理後ミガキ 底面回転系切り
136	11住	黒A	坏A	12.7	5.6	4.3	7/8	完	暗褐	黒	外面口縁部ナデ 内面黒色処理後放射状ミガキ 底面回転系切り
137	11住	黒A	坏A	13.0	4.4	4.0	1/10	完	淡褐	黒	口縁部ナデ 黒色処理後ミガキ ミガキは口縁部横、以下は放射状 底面回転系切り
138	11住	土師	坏	8.6	3.5	4.2	1/5	1/6	赤褐	暗褐	口縁部ヨコナデ 外面下半ヘラケズリ 内面ナデ
139	11住	須恵	蓋						暗灰	暗灰	口縁部ナデ 天井部回転ヘラケズリ つまみ貼り付け後ヨコナデ
140	11住	須恵	蓋B	14.4					暗灰	暗灰	
141	11住	須恵	蓋B	13.0			1/6		暗灰	暗灰	
142	11住	須恵	蓋B	12.8			1/10		暗灰	暗灰	天井部回転ヘラケズリ 内外面にヘラ書き記号あり
143	11住	須恵	蓋B	12.6			1/6		暗灰	暗灰	
144	11住	須恵	坏B		9.0		1/3		橙灰	橙灰	底面回転ヘラケズリ後付高台 焼成不良
145	11住	須恵	高坏		13.0		1/6		暗灰	暗灰	

No	出土地点	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
							口縁	底部	外	内	
I46	11住	須恵	壺		7.5			1/4	暗灰	暗灰	口縁部回転ヘラケズリ後付高台
I47	11住	須恵							黒灰	黒灰	内面一部に自然釉付着
I48	11住	須恵	高坏	18.0			1/4		暗灰	暗灰	坏部外面下半回転ヘラケズリ
I49	11住	須恵	壺蓋	13.3		3.9	7/12		白灰	白灰	天井部回転ヘラケズリ つまみ部貼り付け後ヨコナデ 美濃須衛窯産か
I50	11住	須恵	壺		8.0		1/4		暗青灰	暗青灰	外面底部付近回転ヘラケズリ 付高台後ナデ
I51	11住	須恵	長頸壺A		7.4		完		白灰	白灰	外面下半回転ヘラケズリ 底部底部回転ヘラケズリ後付高台 外面施釉 釉調暗緑〜乳白青 美濃須衛窯産か
I52	11住	土師	甕B	19.2			1/3		暗褐	褐	口縁部外面口縁部内面カキ目 外面胴部ハケメ 内面工具ナデ
I53	11住	土師	小型甕D	7.2			1/5		暗褐	暗褐	口縁部口縁部 外面カキ目 内面口縁部
I54	11住	土師	甕B	22.4			1/8		暗橙褐	暗橙褐	口縁部外面口縁部内面カキ目 外面胴部ハケメ 内面工具ナデ
I55	11住	土師	甕B	22.6			1/5		褐	暗褐	外面ハケ 内面工具ナデ、口縁部カキ目
I56	16住	須恵	坏A	10.9	5.6	3.6	1/16	1/8	暗灰	灰	口縁部口縁部 底部回転糸切り
I57	16住	須恵	坏	12.4			1/8		灰	暗灰	口縁部口縁部 底部回転ヘラケズリ後付高台
I58	16住	須恵	坏B		9.6		1/4		灰	灰	口縁部口縁部 底部回転ヘラケズリ後付高台
I59	16住	須恵		11.0			1/10		暗灰	暗灰	口縁部口縁部
I60	16住	土師	盤		6.8			一部	褐	褐	口縁部口縁部
I61	16住	土師	坏	16.0			1/10		褐	褐	口縁部口縁部
I62	16住	黒A?	坏A		6.0				褐	褐	口縁部口縁部 底部回転糸切り
I63	16住	黒A	坏A	14.4	6.8	3.5	1/6	1/8	淡褐〜黒	淡褐〜黒	内外面一部黒抜け
I64	16住	灰釉	皿	14.1	6.2	3.2	1/3	1/3	白灰	白灰	漬け掛け施釉
I65	16住	黒A	坏A	16.0			1/10		褐	褐	口縁部口縁部
I66	16住	土師	甕B	21.0			1/5		明褐	暗褐	胴部外面ハケ内面工具ナデ 口縁部外面ヨコナデ内面ハケ
I67	13住	須恵	蓋B	10.8				1/12	暗灰	暗灰	端部ヨコナデ 外面自然釉付着
I68	13住	須恵	蓋B	11.6				一部	暗灰	暗灰	端部ヨコナデ
I69	13住	須恵	蓋B	12.6				1/12	暗灰	暗灰	端部ヨコナデ 外面自然釉付着
I70	13住	須恵	坏蓋B	15.2				1/8	灰褐	灰褐	焼成不良のため土師質に近い
I71	13住	須恵	蓋B	13.4				一部	暗灰	暗灰	端部ヨコナデ
I72	13住	須恵	蓋B	15.4				1/12	灰褐	灰褐	天井部回転ヘラケズリ 端部ヨコナデ
I73	13住	須恵	蓋B	16.6				1/10	暗灰	暗灰	端部ヨコナデ
I74	13住	須恵	蓋B	17.4				一部	暗灰	暗灰	端部ヨコナデ
I75	13住	須恵	坏B		11.2			1/4	暗灰	暗灰	底面欠損
I76	13住	須恵	坏B	8.8				1/4	暗灰	暗灰	底面欠損
I77	13住	須恵	坏B		7.4			1/6	暗灰	暗灰	底面欠損
I78	13住	須恵	坏	13.6				一部	橙褐	灰	還元不良で土師質に近く、胎土も柔らかい
I79	13住	須恵	坏A		7.4			1/6	暗灰	暗灰	底部回転糸切り 軟質須恵器か
I80	13住	須恵	坏A		6.0			1/3	黒褐	黒褐	底面摩滅
I81	13住	須恵	坏A			8.4		1/2	暗灰	暗灰	底部回転ヘラ切り 還元不良か

No.	出土地点	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度 口縁 底部	色調		成形・調整・形態の特徴等
								外	内	
182	13住	黒A	坏A	6.4			1/5	暗褐	黒	ロクロナデ 内面黒色処理後ミガキ 底部回転系切り
183	13住	黒A	碗	15.8	7.0	4.9	1/2	暗褐	黒	ロクロナデ 付高台後ナデ
184	13住	灰釉	碗	16.6	7.6	5.1	一部	暗灰	暗灰	ロクロナデ 漬け掛け施釉 内面に重ね焼き痕あり 底部回転系切り後付高台後ナデ
185	13住	土師	高坏	14.4			1/8	橙褐	橙褐	ロクロナデ
186	13住	土師	高坏	11.2			2/3	橙褐	橙褐	摩滅 外面ロクロナデ 内面ケズリ後ナデ
187	13住	須恵	坏B	22.2			1/12	暗灰	暗灰	ロクロナデ 体部に2条沈線
188	13住	須恵	甕	22.7			一部	暗灰	暗灰	ロクロナデ 口縁部ヨコナデ 内外面自然釉付着
189	13住	須恵	短頸壺	14.2			1/12	暗灰	暗灰	ロクロナデ 口縁部ヨコナデ
190	13住	土師	甕		12.4		1/4	褐	暗褐	内外とも工具ナデ 底面ナデ
191	12住	須恵	高坏		11.8		一部	暗灰	暗灰	ロクロナデ
192	14住	須恵	蓋B	11.4			1/12	暗灰	暗灰	ロクロナデ 端部ヨコナデ
193	14住	須恵	甕		12.4		一部	暗灰	暗灰	外面ヘラケズリ 内面工具ナデ 底部ナデ
194	15住	土師	小型甕D		5.8		完	暗褐	暗褐	外面カキ目 内面ロクロナデ 底部回転系切り
195	15住	土師	小型甕D		7.6		1/4	暗灰	暗灰	外面カキ目摩滅 内面ロクロナデ 底部回転系切り
196	15住	軟質須恵	坏A	15.0			一部	淡灰	淡灰	ロクロナデ
197	15住	土師	甕B	20.0			1/10	暗灰	暗灰	口縁部ヨコナデ 外面ハケ 内面上半カキ目 下半工具ナデ
198	17住	須恵	蓋B	15.0			1/8	暗灰	暗灰	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ
199	17住	須恵	蓋B	16.6			1/10	淡灰	淡灰	ロクロナデ
200	17住	須恵	蓋B	13.1			1/4	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ
201	17住	須恵	蓋B	14.3		3.5	1/12	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ つまみ部貼り付け後ヨコナデ
202	17住	須恵	蓋					青灰	青灰	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ つまみ部貼り付け後ヨコナデ 内面自然釉付着 内面に重ね焼き痕あり
203	17住	須恵	坏A	12.4			1/6	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ
204	17住	須恵	坏A	14.0	7.3	3.6	1/12	暗灰	暗灰	ロクロナデ 外面底部付近回転ヘラケズリ 底部回転系切り
205	17住	須恵	坏A	13.2	7.2	3.8	1/4	青灰	青灰	ロクロナデ 底部回転系切り
206	17住	須恵	坏A	13.2	6.3	3.6	2/3	暗灰	暗灰	ロクロナデ 底部回転系切り
207	17住	須恵	坏A	13.4	7.6	3.7	1/20	暗灰	暗灰	ロクロナデ 底部ヘラ切り後ヘラケズリ
208	17住	須恵	甕	13.2			1/4	暗灰	暗灰	ロクロナデ 外面に自然釉付着
209	17住	須恵	長頸壺A	11.6			2/3	暗灰	暗灰	ロクロナデ 把手部欠損 口縁部・頸部内面に自然釉付着
210	17住	須恵	甕	23.7			一部	灰	灰	ロクロナデ
211	22住	須恵	坏A	12.8	6.8	38	一部	暗灰	暗灰	ロクロナデ 底部回転系切り
212	22住	須恵	壺		10.4		一部	灰	灰	外面回転ヘラケズリ 内面ロクロナデ
213	22住	須恵	蓋B	16.4			一部	暗灰	暗灰	ロクロナデ
214	22住	須恵	蓋B	19.2			一部	暗灰	暗灰	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ
215	26住	須恵	蓋B	11.7			1/16	灰	灰	ロクロナデ
216	26住	須恵	壺?		7.2		1/12	灰	灰	外面回転ヘラケズリ 内面ロクロナデ
217	26住	須恵	坏A	6.3			完	淡灰	淡灰	ロクロナデ 底部回転系切り

No	出土地点	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
							口縁	底部	外	内	
218	26住	須恵	坏A	14.0	6.2	3.9	1/20	1/2	淡灰	淡灰	内外クロコナデ 底部回転系切り
219	26住	土師	小型甕D	7.7				1/3	淡褐	淡褐	外面カキ目 内面クロコナデ
220	26住	土師	小型甕D	6.7				完	橙褐	橙褐	外面カキ目 内面クロコナデ 底部回転系切り
221	26住	土師	小型甕C						暗橙褐	暗橙褐	外面上半ナデ、下半ヘラケズリ 内面上半ナデ、下半工具ナデ
222	26住	須恵	甕	25.4			1/28		暗褐灰	暗灰	クロコナデ
223	18住	須恵	坏B	10.0	6.3	4.5	1/2	3/5	暗灰	青灰	底部回転ヘラケズリ 付高台後ナデ 底面にヘラ書き記号あり
224	18住	須恵	坏A	13.3	5.6	4.4	1/2	7/8	白灰	白灰	底部ヘラ切り後ナデ 底面にヘラ書き記号あり
225	18住	須恵	坏A	13.4	6.0	4.8	1/4	7/8	白灰	白灰	焼成不良 底部摩擦
226	18住	須恵	蓋B	16.2			一部		橙褐	橙褐	焼成不良
227	18住	須恵	坏B	16.4			1/8		橙褐	橙褐	焼成不良
228	18住	須恵	坏A	13.4			1/8		橙褐	橙褐	焼成不良
229	18住	須恵	坏B	14.6			一部		橙褐	橙褐	焼成不良で胎土は土師に近い 内外面とも摩擦著しい
230	18住	須恵	坏B	15.2			1/8		橙褐	橙褐	焼成不良で胎土は土師に近い 内外面とも摩擦著しい
231	18住	須恵	坏B	10.8				完	灰	灰	クロコナデ 底部回転ヘラケズリ 付高台後ナデ
232	18住	土師	小型甕D		5.4			1/4	暗褐	暗褐	外面カキ目 内面クロコナデ 底部回転系切り
233	18住	土師	甕		6.6			1/2	暗褐	暗褐	内外とも工具ナデ 底面ナデ
234	18住	黒A	坏A	11.8			1/8		淡褐	黒	クロコナデ 内面黒色処理後ミガキ (上半縦、下半横)
235	18住	土師?	坏?	13.4			1/10		暗褐	暗褐	クロコナデ 内面黒色処理後ミガキ
236	18住	土師	甕A	20.0			1/10		暗橙褐	暗橙褐	内外面ナデ
237	18住	土師	甕A	20.2			1/4		暗褐	暗褐	口縁部ヨコナデ 胴部内外とも工具ナデ
238	18住	土師	甕B						暗橙褐	暗橙褐	外面縦のハケ 内面ナデ 輪積痕残る
239	30住	須恵	蓋B	13.6		2.9	1/6		暗灰	暗灰	クロコナデ 天井部回転ヘラケズリ つまみ部貼り付け後ヨコナデ
240	30住	須恵	蓋B	17.8			一部		灰	灰	クロコナデ 外面自然釉付着
241	30住	須恵	蓋B	15.6			一部		暗灰	暗灰	内外面クロコナデ 端部ヨコナデ
242	30住	須恵	蓋B	14.2			一部		淡灰	淡灰	内外面クロコナデ 端部ヨコナデ
243	30住	須恵	蓋B	11.6			一部		黒灰	暗灰	クロコナデ
244	30住	須恵	蓋B	9.6			1/4		暗灰	暗灰	クロコナデ 天井部回転ヘラケズリ
245	30住	黒B	坏?		4.4			1/4	黒	黒	内外とも黒色処理後ミガキ
246	30住	黒A	坏A	13.5	7.2	4.5	1/4	完	暗褐	黒	クロコナデ 内面黒色処理後ミガキ (摩擦) 底部回転系切り後ナデ
247	30住	須恵	坏B		9.6		一部		黒灰	暗灰	クロコナデ 底部回転ヘラケズリ 付高台後ナデ 外面自然釉付着
248	30住	土師	甕B		9.2		1/2		暗橙褐	暗橙褐	外面ハケ 内面底部付近ナデ、以上はハケ 底部ナデ
249	45住	土師	甕B	20.0			1/3		暗褐	暗褐	口縁内面カキ目 外面ハケ、内面指ナデ
250	45住	土師	甕B		10.8			1/4	暗褐	暗褐	外面ハケ、内面工具ナデ 249と同一個体か
251	43住	須恵	坏A		5.8			完	灰	灰	内外面クロコナデ 底部回転系切り
252	43住	須恵	坏蓋B	13.8			1/12		橙灰	橙灰	内外面クロコナデ
253	43住	須恵	坏蓋B	16.8			1/5		暗灰	暗灰	内外面クロコナデ 天井部回転ヘラケズリ
254	43住	土師	小型甕B	5.8			一部		暗褐	暗褐	外面ハケ 内面ヨコナデ

No.	出土地点	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
							口縁	底部	外	内	
255	43住	土師	甕A		8.8		一部	底部	暗褐	暗褐	外面ナデ、底部付近ケズリ 内面ナデ
256	43住	土師	甕		10.0		1/4		暗褐	黄褐	外面ケズリ 内面ナデ 底面ナデ
257	43住	土師	甕?	16.4			1/4		褐~暗褐	褐~暗褐	内外面ナデ
258	43住	土師	甕B	19.2			1/6		橙褐	橙褐	外面ハケ 口縁部内面カキ目、外面ヨコナデ
259	43住	土師	甕B						橙褐	橙褐	外面ハケ摩滅 内面ナデ 口縁部内面ハケ
260	43住	土師	甕B		11.4		1/5		橙褐	黄橙褐	外面ハケ、底部付近ケズリ 内面ハケ 底面ナデ
261	43住	土師	甕B	18.6			1/6		暗褐	暗橙褐	内外面ナデ
262	43住	土師	甕A	15.4			1/6		暗橙褐	暗橙褐	内外面ナデ
263	43住	土師	甕A	17.8			1/12		暗褐	褐	内外面ナデ
264	43住	土師	甕A	22.8			一部		褐	褐	内外面工具ナデ 口縁部ヨコナデ
265	24住	須恵	蓋B	16.4			1/6		灰	暗灰	ロクロナデ 外面に自然釉付着
266	24住	須恵	蓋B	12.8			1/6		暗灰	暗灰	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ
267	24住	須恵	瓶		11.0		1/8		暗灰	暗灰	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ後付高台
268	24住	須恵	坏B		7.0		1/8		暗灰	暗灰	ロクロナデ
269	24住	須恵	坏	10.0			1/10		暗灰	暗灰	ロクロナデ 口縁部ヨコナデ
270	24住	須恵	坏	12.4			1/12		暗灰	暗灰	ロクロナデ 口縁部ヨコナデ
271	24住	須恵	坏	15.6			1/12		暗灰	暗灰	ロクロナデ 内外面自然釉付着
272	24住	土師	坏	13.6			1/8		暗褐	淡褐	内外面ロクロナデ
273	24住	須恵	横瓶						暗灰	暗灰	外面回転ヘラケズリ 頸部付近はロクロナデ 内面上半工具ナデ 下半指ナデ
274	24住	須恵	長頸壺						灰色	灰色	外面下半回転ヘラケズリ 上半ナデ 自然釉付着 内面ロクロナデ
275	24住	須恵	壺	11.0			1/6		暗灰	暗灰	外面回転ヘラケズリ 内面ロクロナデ 底部ナデ後付高台
276	24住	須恵	壺	7.4			完		暗灰	暗灰	内外ロクロナデ 底部回転糸切り後付高台 内外面自然釉付着
277	24住	須恵	甕						暗灰	暗灰	胴部タタキ目 頸部ロクロナデ 内面工具ナデ 頸部外面に自然釉付着
278	24住	須恵	甕	22.4							外面タタキ目 内面工具ナデ 底部ナデ
279	24住	土師	小型甕D	15.4	8.2	15.4	1/10	1/4	暗褐	暗褐	外面カキ目後ハケメ 口縁部ヨコナデ 内面工具ナデ 底部ナデ
280	41住	須恵	甕?		9.8			一部	暗灰	暗灰褐	内外面ナデ
281	41住	須恵	坏A		7.0		1/4		暗灰	暗灰	内外面ロクロナデ 底部ヘラ切り
282	41住	須恵	坏	14.0			1/10		暗灰	暗灰	内外面ロクロナデ
283	41住	須恵	坏	15.4			1/12		暗灰	暗灰	内外面ロクロナデ
284	41住	須恵	蓋B	16.6			一部		暗灰	暗灰	内外面ロクロナデ
285	41住	灰釉	碗		8.4			1/2	暗灰	暗灰	内外面ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ 外面自然釉付着
286	P 23	須恵	坏A	13.0	7.0	3.8	1/16	3/4	淡灰	淡灰	内外ロクロナデ 底部回転糸切り後付高台 漬け掛け施釉
287	C 区検	須恵	坏A	13.0	6.0	4.0	1/12	1/2	暗灰	暗灰	ロクロナデ 底面回転糸切り
288	37住	須恵	坏B		11.4		1/5		暗灰	暗灰	ロクロナデ 底部回転糸切り
289	堅6	土師	甕A	20.4			1/12		褐	褐	内外面板状工具によるナデ 口縁部ヨコナデ
289	37住	須恵	鉢?	20.6			一部		暗灰	暗灰	ロクロナデ 口縁部ヨコナデ
291	堅4	灰釉	碗	13.2			1/20		淡灰	淡灰	ロクロナデ

No.	出土地点	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
							口縁	底部	外	内	
292	堅4	灰釉	碗	14.8	7.3	5.9	1/3	1/2	淡灰	淡灰	ロクロナデ 底部回転糸切り後付高台
293	土21	須恵	坏	13.8			1/8		淡褐	淡褐	ロクロナデ
294	土30	土師	甕		8.6			1/5	灰褐～暗褐	褐～暗褐	外面ハケ、底部付近ケズリ 内面工具ナデ
295	建2P8	土師	甕B	25.4			1/12		淡褐～褐	淡褐～褐	摩滅 内外ともハケか
296	土3	須恵	甕	19.0			1/12		灰	淡灰	ロクロナデ
297	土5	須恵	甕D						暗灰	青灰	外面タタキ目 内面当て具後工具ナデ
298	土8	須恵	坏	6.0			1/4		淡灰	淡灰	ロクロナデ 底部回転糸切り
299	土20	土師	坏	13.0			1/10		淡褐～赤褐	淡褐～赤褐	ロクロナデ
300	土117	須恵	蓋	16.6				1/12	暗紫灰	暗紫灰	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ
301	土133	須恵	甕		16.4			1/8	暗灰	暗灰	内外ナデ
302	土143	須恵	短頸壺	17.7			1/6		暗灰～黒灰	暗灰	ロクロナデ
303	25住	土師	坏	12.4			1/6		褐	褐	ロクロナデ 外面下半ヘラケズリ
304	25住	須恵	壺		10.6		1/8		暗灰	暗灰	摩滅のため調整不明
305	25住	須恵	蓋B	19.2			1/10		暗灰	暗灰	内外面ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ
306	25住	須恵	長頸壺A						暗灰	暗灰	口縁部を欠くがほぼ完存 ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ後付高台
307	25住	土師	甕A	17.2	8.0	18.0	1/6	完	褐	褐	内外面板状工具によるナデ 外面底部付近ヘラケズリ 底面ナデ
308	25住	土師	甕A	19.6			1/12	完	褐	褐	内外面工具ナデ 外面一部ハケ後ナデ 内面輪積痕残る
309	25住	土師	甕A	20.4			1/12		褐	褐	内外面板状工具によるナデ 口縁部ヨコナデ
310	25住	土師	甕B	19.4			1/5		暗褐	暗褐	内外面板状工具によるナデ 口縁部ヨコナデ
311	25住	土師	甕B	19.6			1/8		濃橙褐	濃橙褐	外面ハケ 内面板状工具によるナデ 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ
312	25住	土師	甕B		8.8			1/3	褐	濃橙褐	外面ハケ 内面板状工具によるナデ 口縁部ヨコナデ
313	土29	須恵	坏A	5.8			1/4		淡灰	淡灰	外面ハケ、底部付近ヘラケズリ 内面工具ナデ 底面ナデ 311と同一個体か
314	土29	須恵	長頸壺	11.6			1/8		淡灰～灰	淡灰～灰	ロクロナデ 底部回転糸切り
315	土29	須恵	蓋	15.0			1/16		暗灰	灰	ロクロナデ 内外とも自然袖付着
316	土29	土師	坏		4.2				橙褐～灰褐	橙褐	ロクロナデ 外面上半は回転ヘラケズリ 底部回転糸切り
317	土137	土師	盤B		11.6			2/3	淡褐灰	淡褐灰	ロクロナデ 脚部外面ロクロ目顕著
318	土140	須恵	坏A	6.4			1/4		淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ 底部回転糸切り
319	土105	須恵	坏A	6.4			1/6		暗灰	暗灰	ロクロナデ 底部回転糸切り
320	土59	須恵	坏A	5.6			1/2		灰	灰	ロクロナデ 底部回転糸切り
321	A区検	灰釉	碗	7.6			1/5		淡灰	淡灰	内面ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ 底面回転ヘラケズリ後付高台
322	A区検	須恵	短頸壺	10.8			一部		黒灰	黒灰	ロクロナデ
323	A区検	灰釉	輪花碗	16.1			1/5		淡灰	淡灰	ロクロナデ 輪花単位は不明
324	B区検	須恵	蓋	17.2			1/12		暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ 外面自然袖付着
325	B区検	須恵	甕?						暗灰	暗灰	内外とも工具ナデ 気泡多量に混入し、焼成時に大きくゆがむ
326	B区検	須恵	甕		20.0			1/10	暗灰	暗灰	外面タタキ目、底部付近ナデ 内面工具ナデ
327	21住	土師質土器	皿	10.0			1/6		淡褐	淡褐	ロクロナデ 13C
328	21住	須恵質	搦鉢	24.3			1/12		暗灰	灰	ロクロナデ 14Cか

No.	出土地点	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
							口縁	底部	外	内	
329	竪1	土師	皿	6.1			1/4		橙褐	橙褐	ロクロナデ 底部回転糸切り
330	竪1	土師	皿	10.4	5.4	2.8	1/3	2/3	橙褐～灰褐	橙褐～灰褐	ロクロナデ 底部回転糸切り 15C
331	竪1	灰釉	長頸壺	9.0			1/5		淡灰	淡灰	ロクロナデ 底面回転糸切り後付高台 周囲は意図的に打ち欠かれる 底面は平滑で、砥石として転用されたものか
332	竪1	山茶碗	碗	5.4	5.4			一部	暗黄灰	暗黄灰	ロクロナデ 丸石3 13C前葉
333	竪1	内耳土鍋		27.4	27.4		1/6		暗橙褐	暗褐	内外ともナデ
334	竪1	内耳土鍋		26.0	26.0		1/20		淡灰褐～黒褐	淡灰褐～黒褐	ロクロナデ
335	竪1	古瀬戸	折縁深皿	30.3			1/16		淡黄褐	淡黄褐	外周下半は回転ヘラケズリ 15C
336	竪10	土師質	皿	12.8	8.8	2.7	1/10	一部	淡褐	淡褐	ロクロナデ 15C
337	竪10	土師質	皿	10.4	7.0	4.6	1/8	1/3	淡褐	淡褐	ロクロナデ 底部回転糸切り 14C末～15C
338	竪10	土師質	皿	11.4			1/8		淡褐	淡褐	ロクロナデ
339	竪10	青磁	瓶子						灰白	灰白	ロクロナデ 釉調透明淡緑 13C
340	竪10	東海系	捏鉢	27.2					灰	灰	ロクロナデ 口縁端部に沈線 13C末～14C初
341	竪10	古瀬戸	四耳壺						暗灰	暗灰	ロクロナデ 内面指頭圧痕 13C後半
342	井戸1	白磁	碗	13.0			一部		白灰	白灰	ロクロナデ 玉縁口縁 釉調透明白色 IV類 12C
343	井戸1	白磁	壺						灰白	灰白	ロクロナデ 釉調透明白色 13C
344	井戸1	青磁	盤	11.1			1/20		灰白	灰白	ロクロナデ 13C
345	井戸1	青磁	碗						暗灰	暗灰	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ 釉調透明暗緑 13C
346	井戸1	青磁	碗	15.2			一部		灰	灰	ロクロナデ 蓮弁文 釉調透明淡緑 13C
347	井戸1	須恵質	搦鉢	24.3			1/8		淡黄褐	淡黄灰	内外ロクロナデ 14C?
348	井戸1	須恵質	搦鉢	28.8			1/20		淡黄灰	淡灰褐	内外ともナデ 14C?
349	井戸1	奈良火鉢		37.0			1/28		黒	黒	内外ともミガキ 花文のスタンプを押捺 13C後半～14C
350	井戸1	常滑	甕	35.8			一部		茶褐～灰	茶褐～灰	内外ともロクロナデ
351	14住	土師質土器	皿	7.6	6.0	1.3	1/4	1/5	淡灰褐	淡灰褐	ロクロナデ 底部回転糸切り 15C
352	9住	古瀬戸	天目茶碗	5.8			1/12		茶灰	茶灰	ロクロナデ 底部付近回転ヘラケズリ 釉調黒～茶 15C
353	13住	古瀬戸	卸皿		9.0			完	暗灰	暗灰	内外面とも施釉 底内面に断面V字のヘラ書き沈線 13～15C
354	竪7	青磁	碗	15.0			一部		灰	灰	ロクロナデ 蓮弁文 釉調透明淡緑 13C
355	土35	青磁	碗	17.0			一部		白灰	白灰	ロクロナデ 蓮弁文 釉調透明淡緑 13C
356	24住	東海系	捏鉢	25.6			1/8		暗灰	暗灰	内外ロクロナデ 口縁端部に沈線
357	A区検	古瀬戸	折縁深皿	28.0			1/24		淡灰	淡灰	内外面ロクロナデ 内外とも施釉 15C後半
358	A区検	古瀬戸	折縁深皿	20.5			1/20		淡灰	淡灰	内外ロクロナデ 内外とも施釉 釉葉硬化 15C
359	A区検	青磁	碗	16.4			一部		灰	灰	ロクロナデ 釉調透明淡緑
360	A区検	古瀬戸	蓋	4.6		1.1	2/3		淡灰	淡褐灰	ナデ 全面に施釉
361	A区検	土師	皿	10.9	7.0	2.7	1/4		淡褐～橙褐	暗褐	ロクロナデ 底部回転糸切り 14C末～15C

第7表 遺構単位石器組成

出土遺構／器種	C	F	RF	MF	FA	PP	PI	PII	PC	Ws	Si	KW	Su	PT	計	出土遺構／器種
第8号住居址														3	3	第8号住居址
第9号住居址									2	1					3	第9号住居址
第11号住居址										1				1	2	第11号住居址
第13号住居址		1													1	第13号住居址
第14号住居址			1												1	第14号住居址
第16号住居址					1				1	1					3	第16号住居址
第18号住居址		1													1	第18号住居址
第19号住居址														1	1	第19号住居址
第20号住居址		2												2	4	第20号住居址
第21号住居址	2	3			1									2	8	第21号住居址
第22号住居址		1							2		1				4	第22号住居址
第24号住居址		2	1									6			9	第24号住居址
第25号住居址	1	1		1											3	第25号住居址
第30号住居址								1		1					2	第30号住居址
第33号住居址										1					1	第33号住居址
第42号住居址						1									1	第42号住居址
第44号住居址									2						2	第44号住居址
第1号竪穴状遺構		3	1							3			1	6	14	第1号竪穴状遺構
第10号竪穴状遺構			1						1						2	第10号竪穴状遺構
第5号土坑		1													1	第5号土坑
第9号土坑		1													1	第9号土坑
第11号土坑							1								1	第11号土坑
第13号土坑								1							1	第13号土坑
第43号土坑										1					1	第43号土坑
第44号土坑					1										1	第44号土坑
第55号土坑								1							1	第55号土坑
第61号土坑														1	1	第61号土坑
第70号土坑		1													1	第70号土坑
第81号土坑										1					1	第81号土坑
第104号土坑									2						2	第104号土坑
第143号土坑										4					4	第143号土坑
第152号土坑										1					1	第152号土坑
第1号井戸	4	3	1	1					5					10	24	第1号井戸
検出面		4				1			4				1	1	11	検出面
計	7	24	5	2	3	2	1	3	19	15	1	6	2	27	117	計
出土遺構／器種	C	F	RF	MF	FA	PP	PI	PII	PC	Ws	Si	KW	Su	PT	計	器種／出土遺構

C:石核, F:剥片, RF:二次加工のある剥片, MF:微細剥離痕のある剥片, FA:打製斧形石器, PP:磨製鏃形石器
 PI:礫石器I類(凸面敲打), PII:礫石器II類(凸面研磨), PC:礫石器複合, Ws:砥石状石器, Si:錘状石器I類
 KW:錘状石器II類, Su:硯形石器, PT:礫片

第8表 実測図掲載個体属性一覧

最大長・最大幅・最大厚:mm, 重量:g

No.	出土遺構1	出土遺構2	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	礫面	接合	備考
12	第9号住居址	南西	PC	粘板岩	33.6	17.3	11.5	9.3	ほぼ全面	第1号接合資料	
13	第9号住居址	南西	PC	粘板岩	17.8	15.6	10.0	3.3	ほぼ全面	第1号接合資料	
30	第1号竪穴状遺構	d	Ws	凝灰岩	99.0	35.0	17.5	67.5	なし	単独	赤化面あり
33	第1号竪穴状遺構	サブトレンチ	Ws	凝灰岩	42.5	34.9	15.0	33.4	背面・側面	単独	
35	第1号竪穴状遺構	サブトレンチ	Su	千枚岩	54.6	41.0	17.6	23.4	なし	第2号接合資料	
45	検出面	-	Su	千枚岩	36.8	31.8	4.7	4.7	なし	第2号接合資料	
74	第30号住居址	覆土	Ws	凝灰岩	27.0	33.9	7.4	9.1	なし	単独	
85	第143号土坑	覆土	Ws	粘板岩	35.1	15.0	8.8	3.8	なし	第3号接合資料	
86	第143号土坑	覆土	Ws	粘板岩	68.4	25.5	8.0	18.4	なし	第3号接合資料	
87	第143号土坑	覆土	Ws	粘板岩	64.0	25.6	2.3	5.4	なし	第3号接合資料	
88	第143号土坑	覆土	Ws	粘板岩	64.0	25.9	4.2	5.8	なし	第3号接合資料	
89	第152号土坑	覆土	Ws	粘板岩	77.0	21.3	10.7	20.4	なし	第3号接合資料	
91	第1号井戸	東	PC	粘板岩	63.8	28.2	16.6	44.6	ほぼ全面	第4号接合資料	
103	第1号井戸	覆土	C	硬砂岩	72.5	41.7	25.5	62.5	打面・側面	第5号接合資料	黒化面あり
104	第1号井戸	覆土	MF	硬砂岩	55.7	29.5	26.0	18.8	打面・側面	第5号接合資料	
114	検出面	-	PC	粘板岩	61.0	22.2	13.5	29.8	ほぼ全面	第4号接合資料	

第9表 遺構単位石材組成

出土遺構\石材	Ob	An	Co	CoSa	HSa	Sa	Sh	STu	Sc	Tu	Sl	Ph	CrSc	Ch	Ho	Qu	計	石材/出土遺構
第8号住居址					3												3	第8号住居址
第9号住居址										1	2						3	第9号住居址
第11号住居址		1					1										2	第11号住居址
第13号住居址																1	1	第13号住居址
第14号住居址									1								1	第14号住居址
第16号住居址					1	1				1							3	第16号住居址
第18号住居址														1			1	第18号住居址
第19号住居址							1										1	第19号住居址
第20号住居址	1		1		1											1	4	第20号住居址
第21号住居址				2	2											4	8	第21号住居址
第22号住居址					1	1		1						1			4	第22号住居址
第24号住居址					3		2		1			2			1		9	第24号住居址
第25号住居址	1													1	1		3	第25号住居址
第30号住居址										2							2	第30号住居址
第33号住居址										1							1	第33号住居址
第42号住居址								1									1	第42号住居址
第44号住居址					1			1									2	第44号住居址
第1号竪穴状遺構		1			4	1				3		1		1		3	14	第1号竪穴状遺構
第10号竪穴状遺構						1							1				2	第10号竪穴状遺構
第5号土坑																1	1	第5号土坑
第9号土坑																1	1	第9号土坑
第11号土坑						1											1	第11号土坑
第13号土坑					1												1	第13号土坑
第43号土坑											1						1	第43号土坑
第44号土坑								1									1	第44号土坑
第55号土坑					1												1	第55号土坑
第61号土坑					1												1	第61号土坑
第70号土坑																1	1	第70号土坑
第81号土坑										1							1	第81号土坑
第104号土坑						2											2	第104号土坑
第143号土坑											4						4	第143号土坑
第152号土坑											1						1	第152号土坑
第1号井戸					12		1	2			1			3	1	4	24	第1号井戸
検出面					3				1		1	1	1	2		2	11	検出面
計	2	2	1	2	34	7	5	6	3	9	10	4	2	9	3	18	117	計
出土遺構/石材	Ob	An	Co	CoSa	HSa	Sa	Sh	STu	Sc	Tu	Sl	Ph	CrSc	Ch	Ho	Qu	計	石材/出土遺構

Ob:黒耀岩, An:安山岩, Co:礫岩, CoSa:礫質砂岩, Hsa:硬砂岩, Sa:砂岩, Sh:頁岩, STu:珪質凝灰岩, Sc:輝綠凝灰岩
 Tu:凝灰岩, Sl:粘板岩, Ph:千枚岩, CrSc:結晶片岩, Ch:チャート, Ho:ホルンフェルス, Qu:珪岩

第10表 石材単位器種組成

石材\器種	C	F	RF	MF	FA	PP	PI	PII	PC	Ws	Si	KW	Su	PT	計	石材/器種
Ob	1	1													2	Ob
An														2	2	An
Co														1	1	Co
CoSa														2	2	CoSa
HSa	3	4		1	2			2	5			3		14	34	HSa
Sa							1		5					1	7	Sa
Sh									1	1		2		1	5	Sh
STu					1	1			3		1				6	STu
Sc			2			1									3	Sc
Tu								1		8					9	Tu
Sl									4	6					10	Sl
Ph		2												2	4	Ph
CrSc			1						1						2	CrSc
Ch		4		1										4	9	Ch
Ho		1										1		1	3	Ho
Qu	3	12	2											1	18	Qu
計	7	24	5	2	3	2	1	3	19	15	1	6	2	27	117	計
石材/器種	C	F	RF	MF	FA	PP	PI	PII	PC	Ws	Si	KW	Su	PT	計	石材\器種

第11表 金属器一覧

No.	器種	出土地点	重量(g)	形状・形態、残存状況
1	釘?	9住	4.3	中央部の膨らみはさびぶくれの可能性あり
2	不明	11住	11.5	被熱・発泡。青銅製品
3	不明	11住	9.6	
4	不明	11住	11.7	
5	刀子	13住	2.7	茎部
6	釘	13住	2.2	脚部欠損
7	釘	13住	1.2	脚部欠損
8	釘	13住	1.6	頭部・脚部欠損
9	毛抜型鉄器	13住	7.2	脚部欠損
10	釘	14住	4.0	脚部欠損
11	釘	14住	5.0	頭部・脚部欠損
12	ノミ状製品	15住	104.9	刃部の一部と茎部を欠損。
13	釘	15住	3.2	脚部欠損
14	釘	15住	1.9	脚部・頭部欠損
15	釘	15住	4.4	脚部・頭部を欠損。
16	刀子	18住	4.0	茎部。木質残存。
17	釘?	21住	6.3	頭部・脚部欠損。
18	不明	21住	16.8	
19	釘	21住	13.1	脚部欠損
20	不明	22住	10.5	穿孔あり。
21	鏃	22住	10.2	箆被部下半以下・刃部の大半を欠損。雁股鏃。
22	釘	28住	0.9	ほぼ完存。長さ3.5cm。
23	釘	27住	2.1	頭部・脚部を欠損。
24	釘	28住	1.7	完存だがやや湾曲する。長さ3.5cm。
25	釘	28住	2.8	頭部欠損。
26	不明	29住	22.3	円環状の突起を持つ。
27	燧鉄?	豎1	4.8	基部欠損。
28	釘	豎1	2.6	脚部欠損。
29	釘	豎1	2.9	頭部・脚部欠損。
30	釘	豎1	2.1	脚部欠損。
31	不明	豎1	18.2	板状。側縁の断面は片そぎの三角形を呈する。
32	釘	豎1	2.2	頭部・脚部欠損。
33	釘	豎1	2.9	?
34	釘	豎1	4.5	脚部欠損。
35	釘	豎1	13.8	脚部欠損。
36	釘	豎1	6.8	完存。長さ6.2cm。
37	釘	豎1	6.2	脚部欠損。
38	釘	豎5	7.8	頭部・脚部欠損。
39	不明	豎7	16.3	先端部を欠損。
40	不明	豎7	6.4	両端を欠損。
41	釘	土8	0.8	頭部・脚部欠損。
42	不明	P4	2.2	中央の穴は方形か。
43	刀子?	井戸1	4.9	
44	刀子	土143	3.6	
45	飾金具?	・ P2	8.8	
46	釘	A区検	1.7	脚部欠損。
47	釘	A区検	5.5	頭部・脚部欠損。
48	釘	B区検	4.9	頭部・脚部欠損。
49	釘	A区検	8.5	脚部欠損。
50	紡軸	A区検	5.9	

VI 調査のまとめ

今回の調査によって、弥生時代末～中世の集落址を確認することができ、これまで今一つ不明確だった竹瀧南原遺跡の内容を明らかにすることができた。ここでは、これまで述べてきた調査結果を踏まえ、集落の変遷等について概観してまとめとしたい。

既に第II章で述べたように、竹瀧南原遺跡の位置する田川と牛伏川に挟まれた一帯は、度重なる牛伏川の氾濫により遺跡が破壊され、かつての集落の分布を把握しづらい地区である。竹瀧南原遺跡も、過去の調査では若干の遺構と遺物を確認したにとどまり、その実態は明らかではなかった。今回の調査区は、こうした河川の氾濫による破壊を逃れ、弥生時代末～中世にわたる各時期の遺構を確認することができ、この点にまず大きな成果を認めることができよう。以下、各時期ごとに概観する。

①弥生時代末～古墳時代前期（3～4世紀）

今回の調査地点では8軒の住居址を確認できた。この地区で古墳時代前期の集落が確認されたのは初めてのことである。近在には東日本最古級の前期古墳である弘法山古墳があり、該期の動向を探るうえでも重要な知見が得られたといえる。

遺構分布はB区・C区が中心となり、該期集落はまだ東側に広がっている可能性が高い。住居址には該期の土器群が多く出土しており、31住・44住などは遺構形態・遺物内容とも該期の良好な資料といえよう。周辺遺跡では、田川上流の石行遺跡の他、田川左岸の出川南・出川西遺跡で該期集落が確認されているにとどまっており、弘法山古墳の築造集団の集落や、該期の集落の展開については未だ不明確な点が多い。こうした課題の追求の上で、今回の調査によって一定の資料蓄積ができたものとする。特に住居址出土土器群は全般的に石行遺跡出土のものより古い様相を示している。また、住居址単位の土器群には新古相がうかがえ、弘法山古墳築造時期前後の様相を考える上で重要な資料となろう。

なお今回の調査地点からは、弥生時代後期前半にさかのぼる遺物が、遺構には伴っていないものの少量出土している。今回の調査地点から南へ400mほどの竹瀧遺跡第2次調査地点では、弥生時代後期初頭～前半の集落址が確認されており、弥生時代後期以降、この一帯に集落が展開していたことが窺える。古墳時代中期・後期は遺構・遺物とも見られず、断絶があるようである。

②奈良・平安時代（8～9世紀）

古墳時代中期・後期の断絶後、8世紀前半から再びこの地が占地される。牛伏川・田川に挟まれた一帯では、平安時代の集落はこれまで百瀬遺跡・向原遺跡で確認されていたのみであった。今回の調査により、未だ面的な把握には至らないものの、該期の集落の広がりが確認できた点で、重要な所見が得られたといえよう。この地区一帯の古代の集落の展開の把握は田川左岸の該期遺跡群の動向と合わせて今後追及すべき課題であろう。

今回の調査では、8世紀～9世紀代の遺構・遺物が確認でき、遺構の数が最も多く、23軒を検出した。ただし、明確に帰属時期のわかるものは限られており、8世紀前半が2軒、後半が6軒、9世紀前半が3軒、後半が1軒程度となる。遺構の分布は、調査地区の全体に及ぶが、C区北側では遺構の分布が見られなくなる。C区では平安時代の掘立柱建物址が1棟確認されており、この建物址が集落の北限あるいは西限に相当していた可能性も考えられる。今回の調査地点では10世紀を下る古代の住居址は確認されず、12世紀代と思われる土坑墓が確認された他、遺物がわずかに見られたに過ぎない。土坑墓は1基のみであったが、この時

期に墓域が営まれていた可能性もあろう。

③中世（13～15世紀）

10世紀～12世紀にわたる断絶の後、再び集落が確認されるのは13世紀になってからである。これまでの近在の遺跡の調査結果では、中世の集落址は明確には確認されておらず、若干の遺構・遺物の出土を見たに過ぎなかった。今回の調査で、13～15世紀にわたる時期の集落の一端を明らかにすることができた。文献史料によれば、この時期竹淵地区一帯に竹淵郷とよばれる国衙領があったとされているが、実態や故知については明らかではなかった。今回の調査によって、中世の集落を確認したことによって、竹淵郷の実態を解明する一つの足がかりとなるかもしれない。

中世の遺構としては、まず注目すべきものとして井戸の調査を行うことができた。地下水位が高かったことが幸いし、通常では遺存しない木組の井側が良好に残存しており、該期の井戸の構造を明らかにすることができた。松本市内ではこれまで中世の井戸の調査例はいくつかあるが、今回のように残存状態が良好なものではなかった。井戸の構造は、広島県草戸千軒遺跡などで確認されているものと同一であった。近在では百瀬遺跡で今回とほぼ同規模の井戸址が確認されている。松本市内では、松本城下町跡で近世の井戸址が数多く調査されており、今回の中世のものとの比較も可能となった。

その他の遺構として竪穴状遺構・掘立柱建物址・土坑・ピットがある。該期の遺構からは遺物の出土量が乏しいことが多いが、今回の調査でも概して遺物の出土量は少なかった。このため、明確に時期のわかる遺構は限られており、竪穴状遺構（住居址としたものを含む）が3軒、井戸が一基にとどまる。遺構の年代は13～15世紀にわたる。年代のはっきりしない他の遺構についても、おそらくはこの年代幅のいずれかに帰属するものと思われる。なお、該期集落は今回の調査地点から東側及び南側にさらに広がっているものと思われる。今回の調査では、中世の集落の一部を調査できたに過ぎず、集落構造等を明らかにするには至らなかった。今後追求すべき課題であらう。

最後に本調査にあたり多大な御理解と御協力をいただいた松本市竹淵西土地地区画整理組合の皆様、ならびに地元の皆様に感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。

付 編

竹淵南原遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本遺跡は弥生時代後期～古墳時代前期（3～4世紀）および奈良・平安時代（8～9世紀）の竪穴住居跡、中世前期の掘立柱建物址などが検出されており、3～4世紀、8～9世紀、13～15世紀ごろの各時期の集落遺跡と考えられている。その他の遺構としては井戸、土坑、ピットなどが検出されており、土器、陶磁器、銭貨などの遺物が検出されている。

今回の自然科学分析調査では、平安時代の燃料材の用材選択を検討するために樹種同定を行う。

1. 試料

試料はA区8号住居址炭化物集中、B区41号住居址No.2の2点を樹種同定に選択する。8号住居址の試料は住居址中央部のピット状の窪みに少量がまとまって遺存したものである。

2. 分析方法

木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接続断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

炭化材は、いずれも落葉広葉樹で、2種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・ケヤキ）に同定された。主な解剖学的特徴を以下に示す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じた後、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じた後漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III形、1～10細胞幅、1～50細胞高。しばしば結晶を含む。

4. 考察

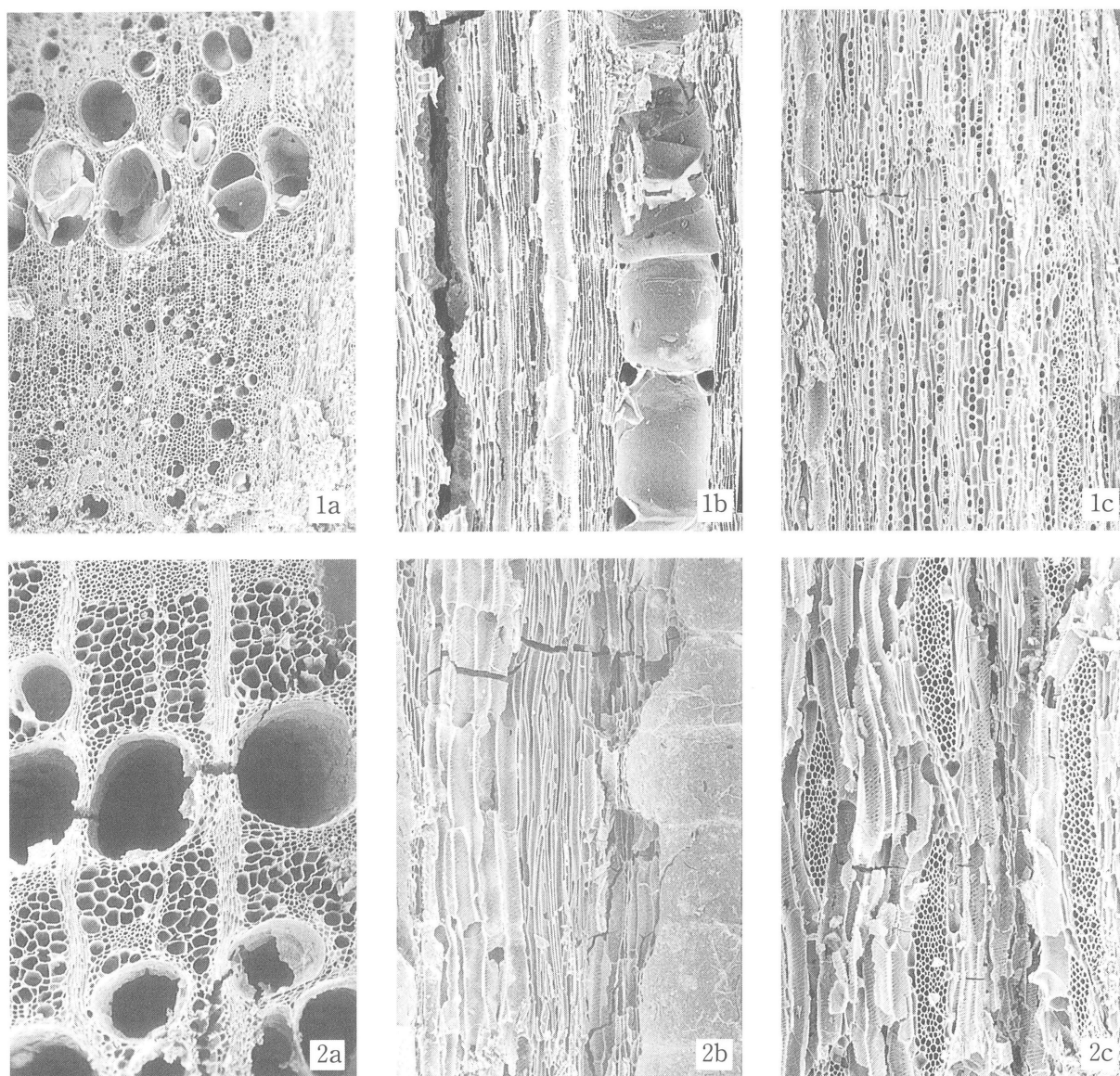
炭化材は、8号住居址では中央部のピット状の窪みに少量がまとまって残存していた。一方、41号住居址では中央部の床面上に単体で残存していた。これらの状況から住居構築材に由来する可能性があるが、断定はできない。樹種は、8号住居址がケヤキ、41号住居址がコナラ節であった。

同定された2種類のうち、コナラ節は、佐久盆地の奈良～平安時代の住居構築材にも多数確認されている。（パリノ・サーヴェイ株式会社、1988a、1988b、1989a、1994a、1994b、1995）。この結果から、41号住居址でも住居構築材にコナラ節が多数利用されていた可能性がある。これらの住居構築材は、関東地方の調査例から、遺跡周辺の植生を反映することが指摘されている（高橋・植木、1994）。したがって、古代の本遺跡周

辺では、コナラ節やケヤキなどの落葉広葉樹の生育する植生が見られたと考えられる。

引用文献

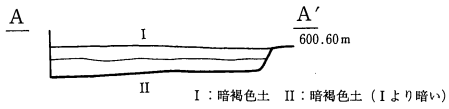
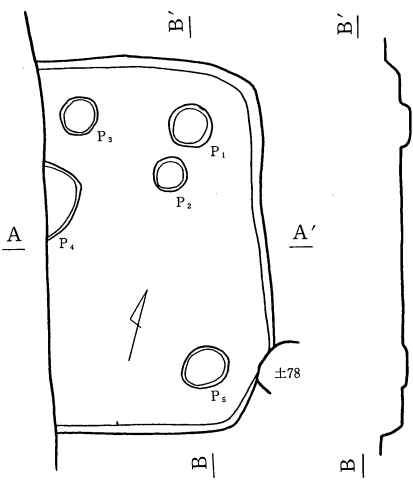
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1988a) 鋳物師屋遺跡出土炭化材同定, 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集「鋳物師屋遺跡群 鋳物師屋 ー長野県小諸市鋳物師屋遺跡発掘調査報告書ー」, p.116-117、小諸市教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1988b) 十二遺跡出土炭化材の樹種同定, 「鋳師屋遺跡群 十二遺跡 ー長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書ー」, p.393-399、御代田町教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1989a) 広畑遺跡出土炭化材の樹種同定, 「広畑遺跡ー長野県北佐久郡御代田町広畑遺跡発掘調査報告書ー」, p.35-40、御代田町教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1989b) 根岸遺跡出土炭化材の樹種同定, 「長野県北佐久郡御代田町大字御代田所在鋳師屋遺跡群 根岸遺跡発掘調査報告書」, p.291-293、御代田町教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1994a) 過去の植物利用について, 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集「東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原 ー長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書ー」, p.613-624、小諸市教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1994b) 大塚原遺跡における平安時代の住居構築材, 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集「大塚原遺跡群 大塚原(第二次) ー長野県小諸市大塚原遺跡発掘調査報告書ー」, p.81-84、小諸市教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1995) 第1号住居址出土の炭化材の樹種, 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集「三子塚遺跡群 十石坂上遺跡 ー長野県小諸市十石坂上遺跡発掘調査報告書ー」, p.12-13、小諸市教育委員会
- 高橋敦・植木真吾(1994) 樹種同定からみた住居構築材の用材選択, PALYNO、2、p.5-18、パリノ・サーヴェイ株式会社。



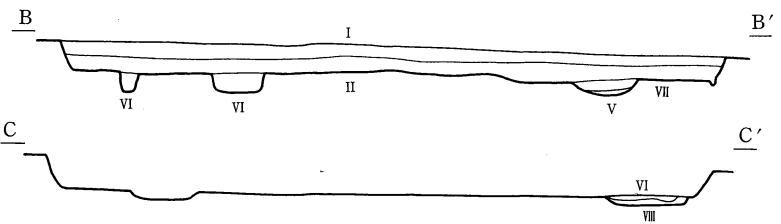
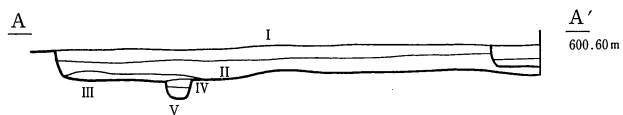
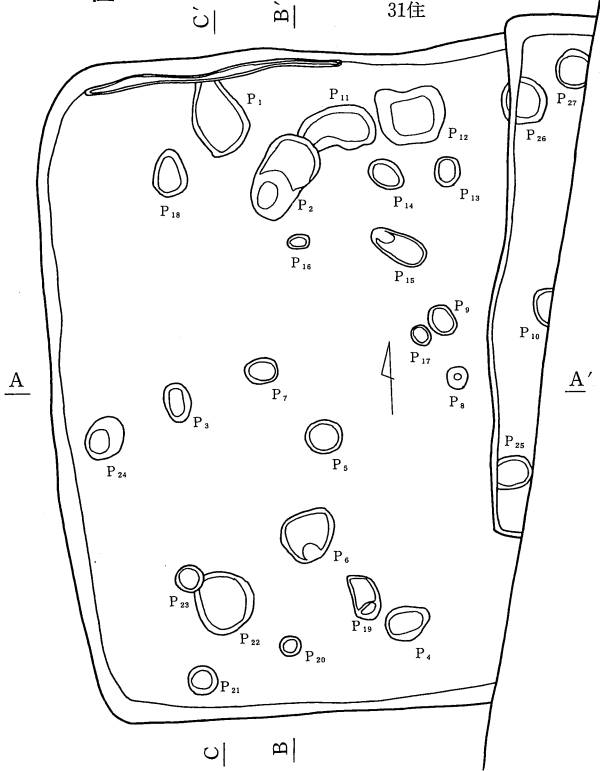
1. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (B区41号住居址No.2)
 2. ケヤキ (A区8号住居址 炭化物集中)
 a : 木口、b : 柁目、c : 板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

23住

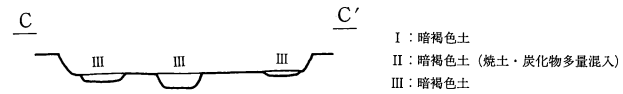
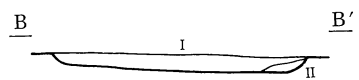
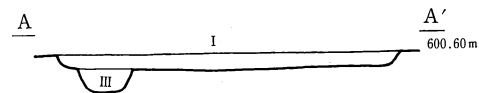
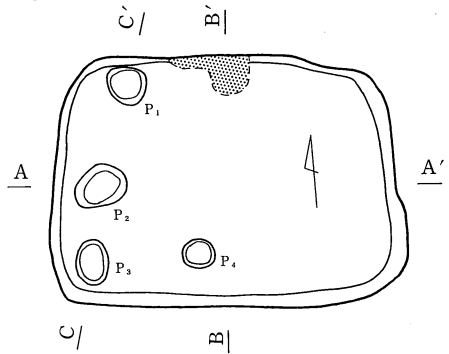


31・34住

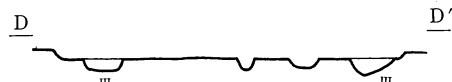
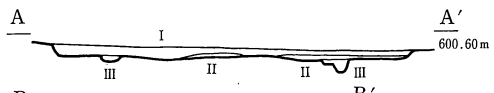
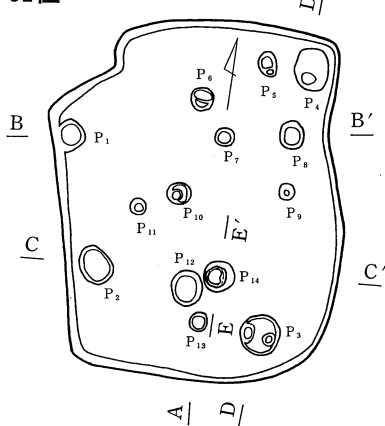


- I : 暗褐色土 (炭化物少量混入)
- II : 暗褐色土 (炭化物少量混入、やや粘質)
- III : 黄褐色土
- IV : 暗褐色土 (焼土粒少量混入)
- V : 暗褐色土 (粘質)
- VI : 暗褐色土
- VII : 暗褐色土 (褐色土塊混入)
- VIII : 暗褐色土 (VIより暗い)

40住



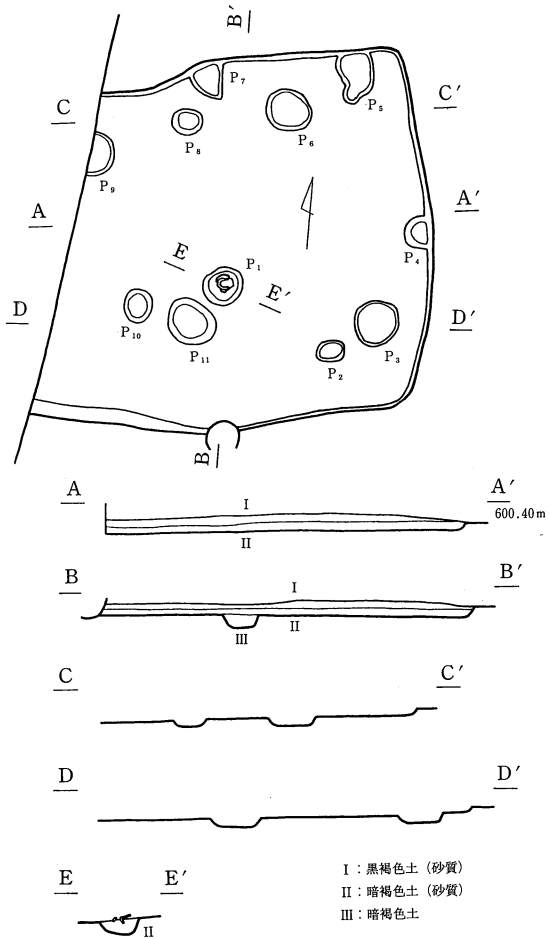
32住



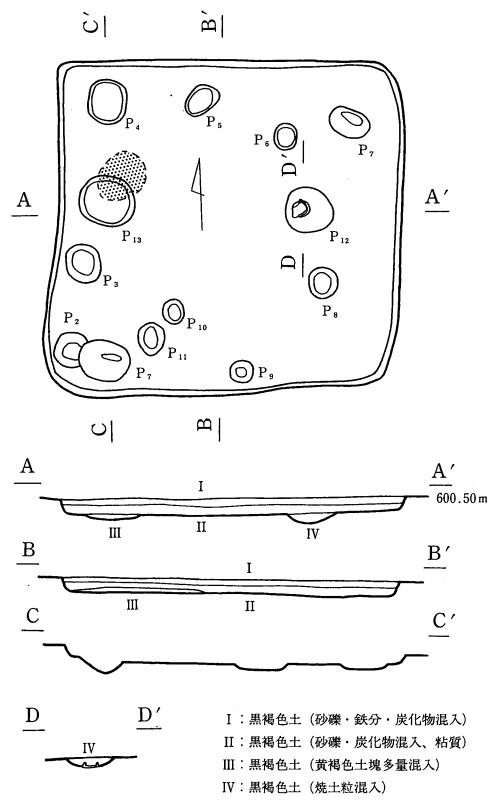
0 2 m

第5図 弥生時代末～古墳時代前期の住居址(1)

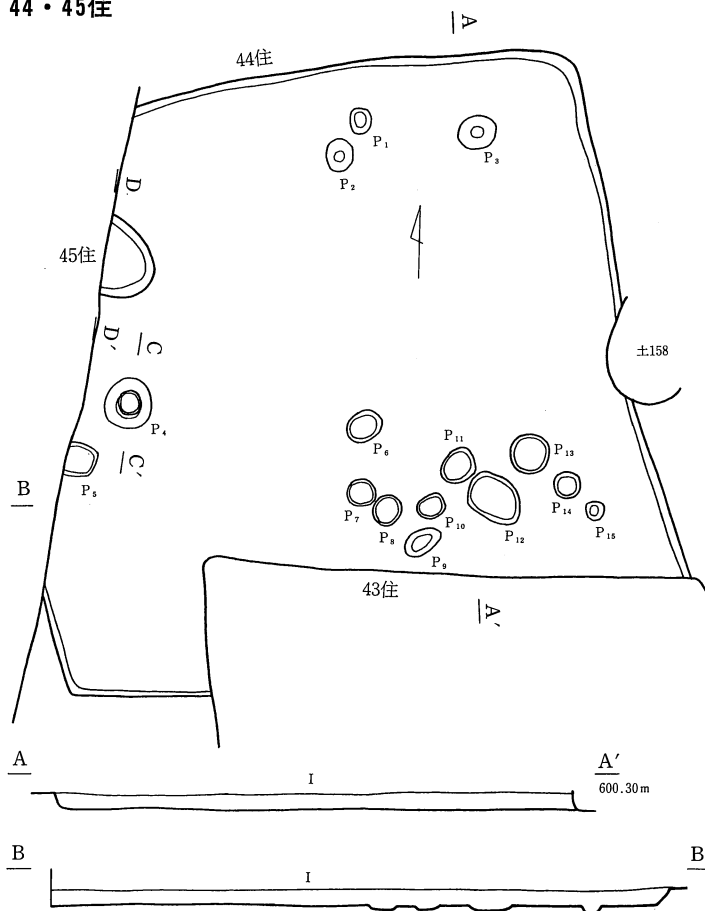
38住



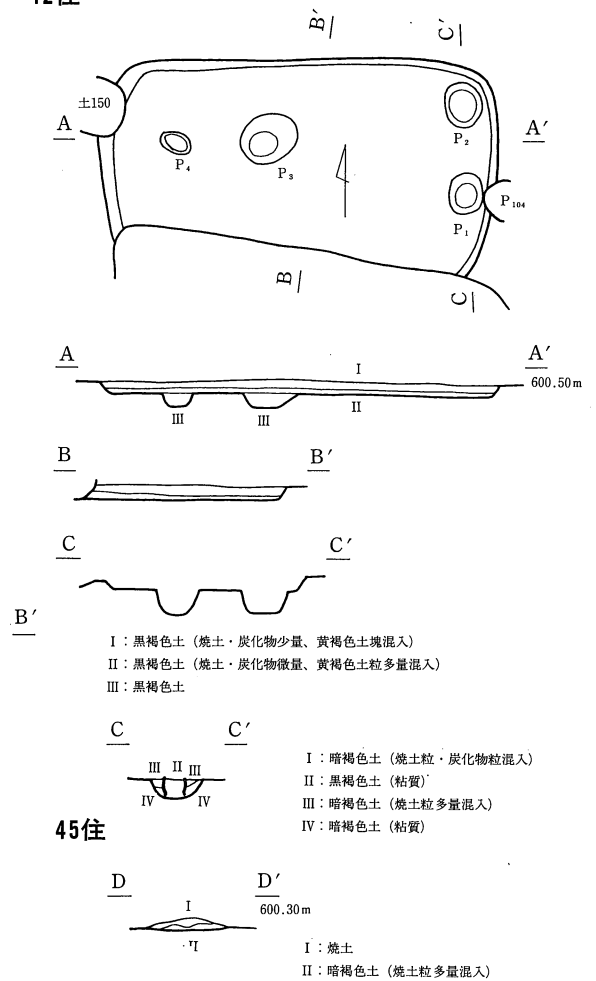
33住



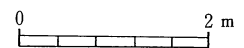
44・45住



42住

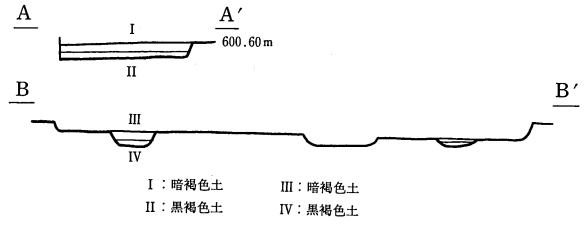
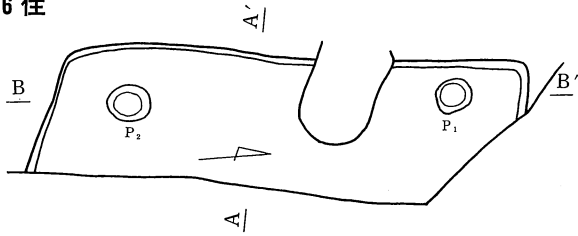


45住

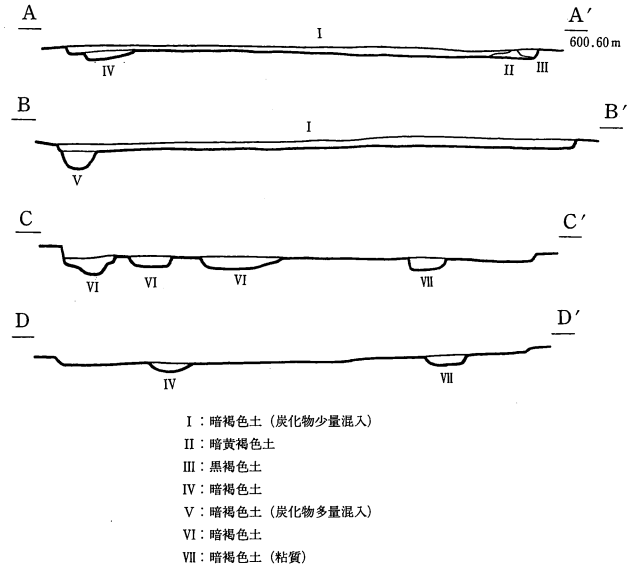
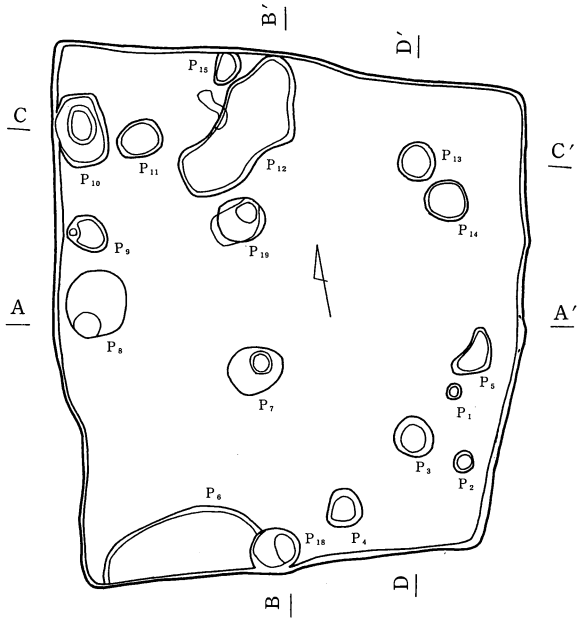


第6図 弥生時代末～古墳時代前期の住居址(2)

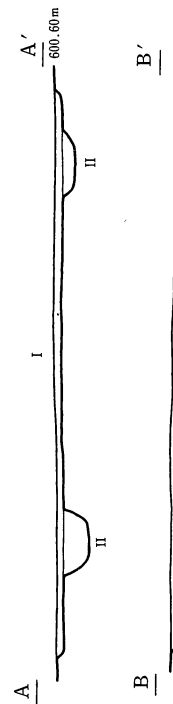
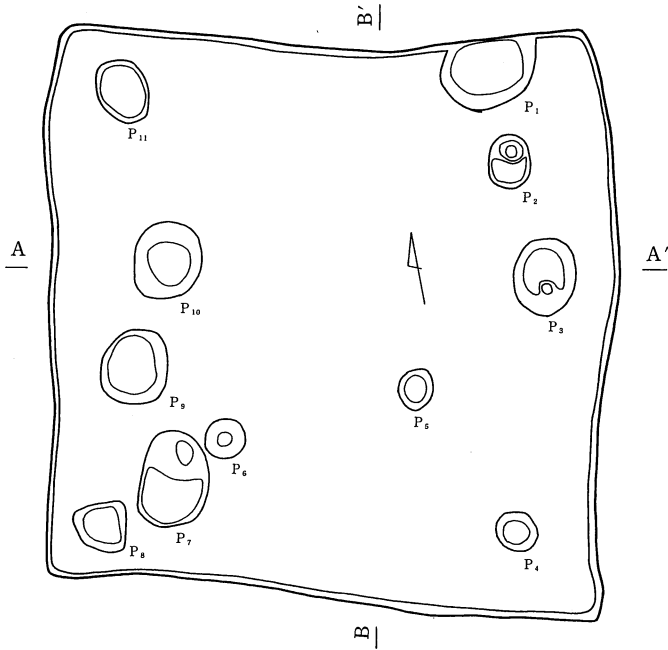
6 住



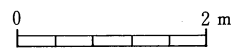
8 住



9 住

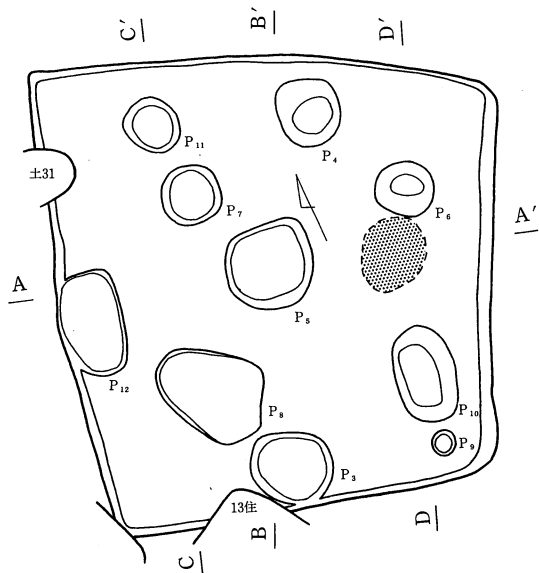


I : 暗褐色土
II : 暗褐色土

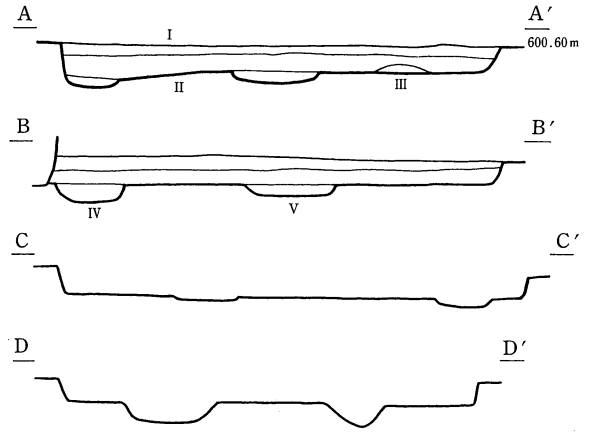


第7図 奈良・平安時代の住居址(1)

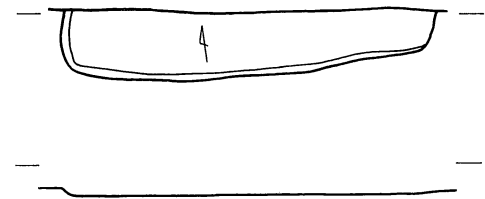
11住



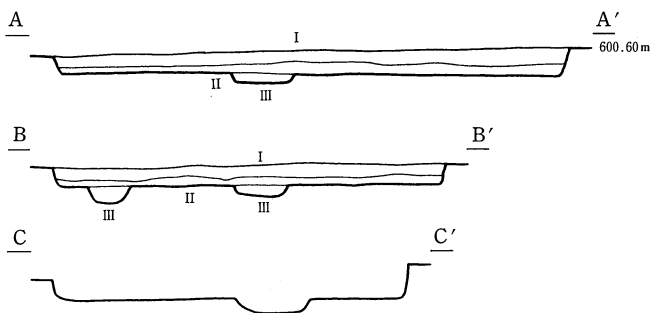
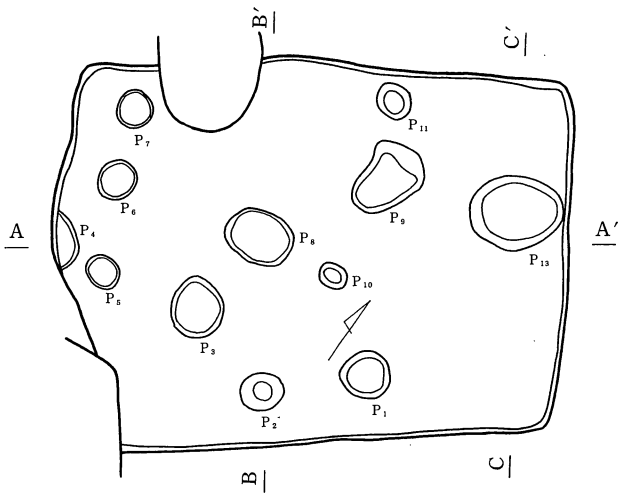
- I : 暗褐色土 (炭化物少量、砂礫多量混入)
- II : 暗褐色土 (炭化物少量混入)
- III : 焼土
- IV : 暗褐色土 (焼土・炭化物多量混入)
- V : 暗褐色土 (焼土多量混入)



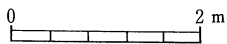
12住



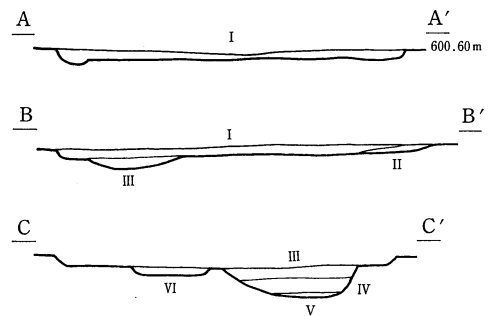
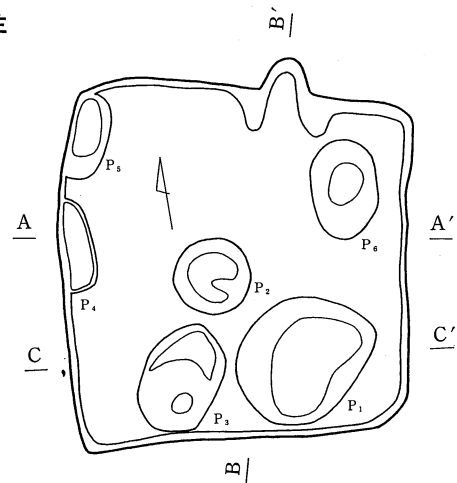
13住



- I : 暗褐色土 (炭化物・砂礫混入)
- II : 暗褐色土 (砂礫混入)
- III : 暗褐色土



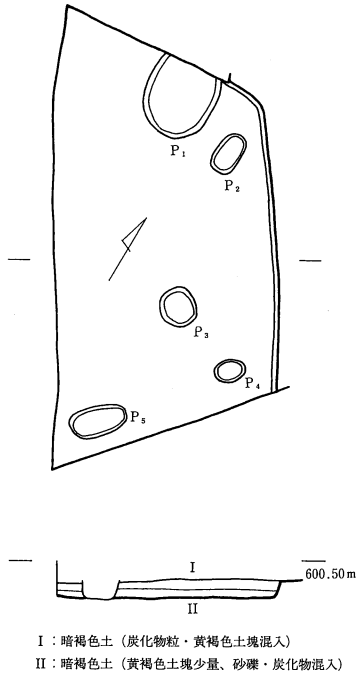
14住



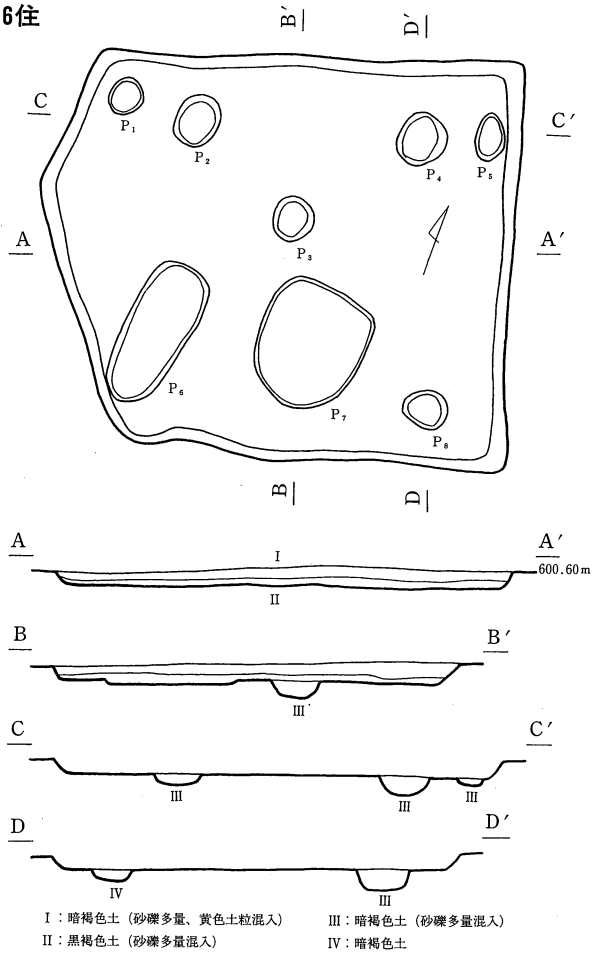
- I : 暗褐色土 (炭化物少量、砂礫多量混入)
- II : 暗褐色土 (炭化物・焼土混入)
- III : 暗褐色土 (炭化物・焼土・砂礫混入)
- IV : 暗褐色土
- V : 暗褐色土 (粘質)
- VI : 暗褐色土 (砂礫多量混入)

第8図 奈良・平安時代の住居址(2)

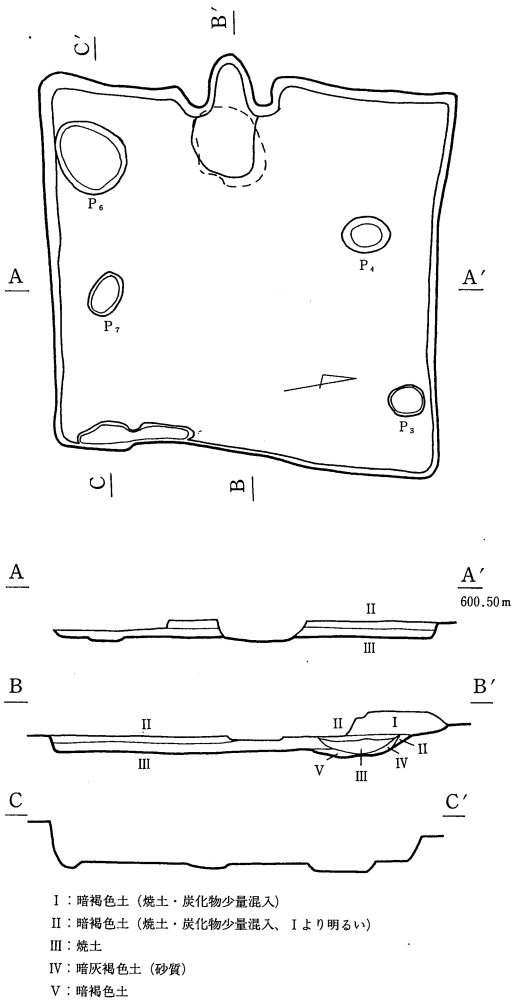
15住



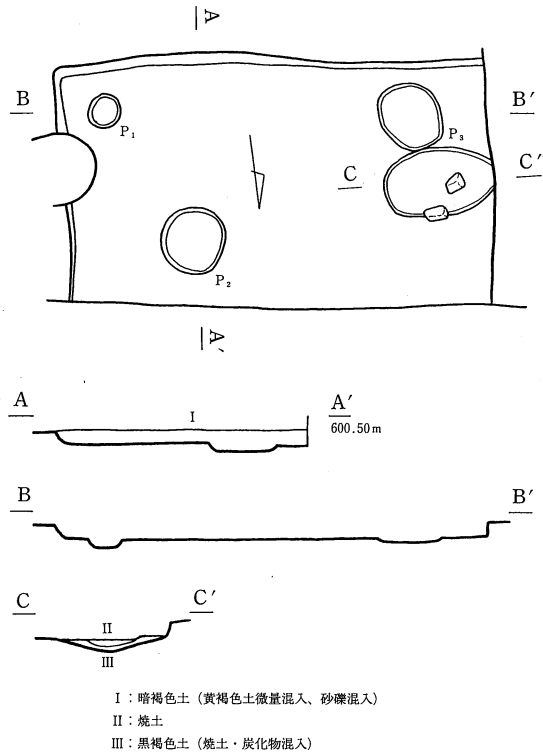
16住



18住

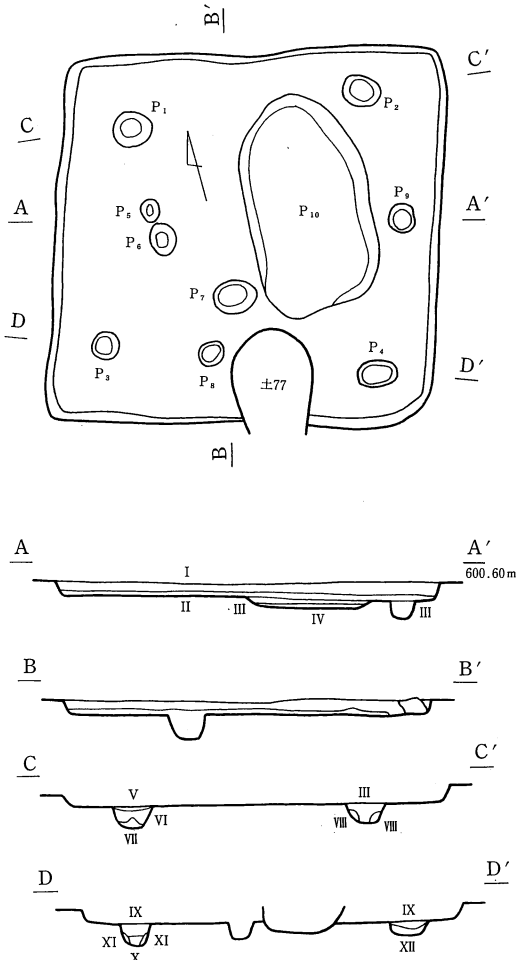


17住



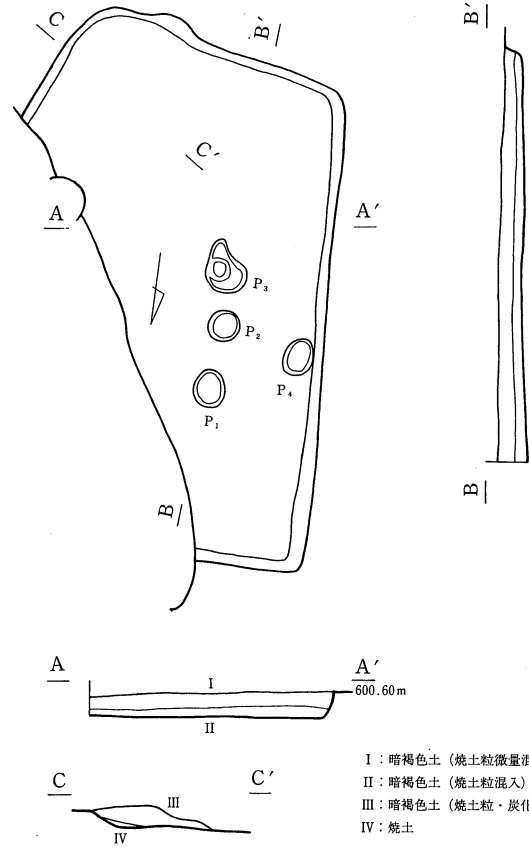
第9図 奈良・平安時代の住居址(3)

22住



- I : 暗褐色土
- II : 暗褐色土 (褐色土塊多量混入)
- III : 暗褐色土 (炭化物粒混入)
- IV : 明褐色土 (粘質)
- V : 明褐色土 (砂質)
- VI : 明褐色土
- VII : 暗褐色土
- VIII : 褐色土
- IX : 明褐色土
- X : 暗褐色土
- XI : 褐色土
- XII : 暗褐色土

24住

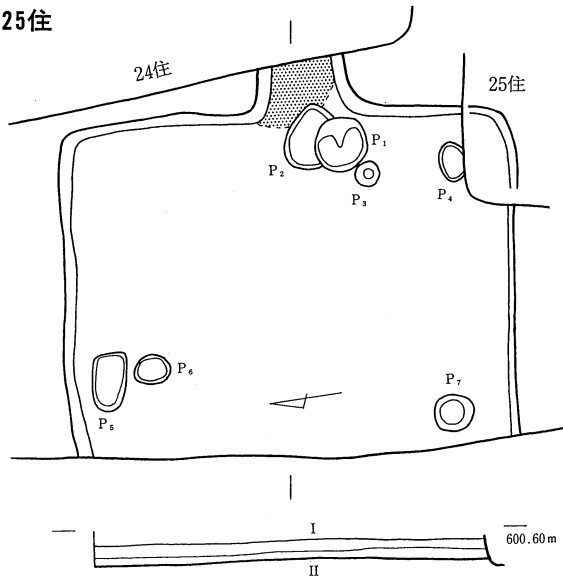


- I : 暗褐色土 (焼土粒微量混入)
- II : 暗褐色土 (焼土粒混入)
- III : 暗褐色土 (焼土粒・炭化物粒混入)
- IV : 焼土

24住出土状況

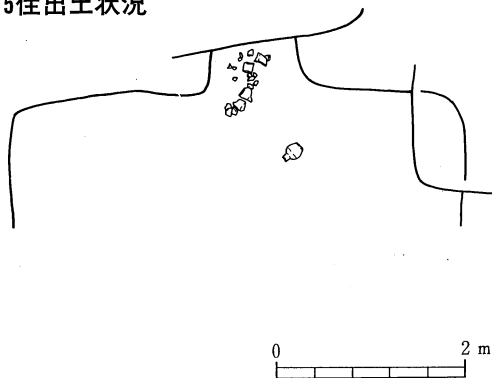


25住



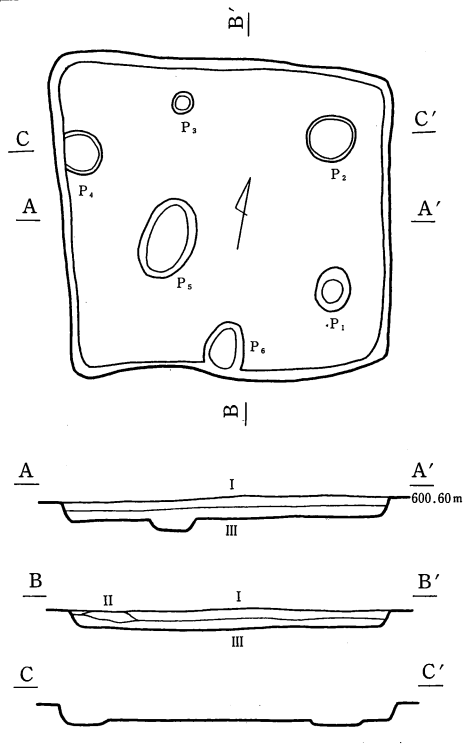
- I : 暗褐色土 (砂質)
- II : 暗褐色土

25住出土状況



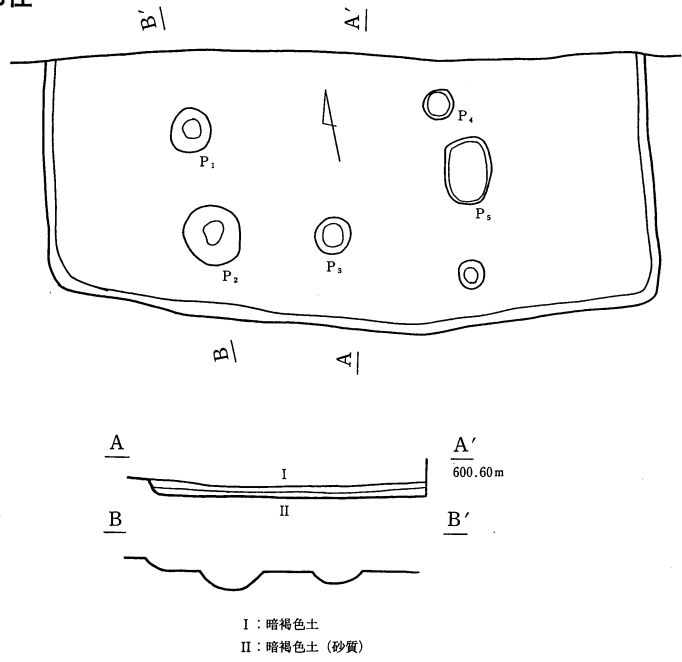
第10図 奈良・平安時代の住居址(4)

20住



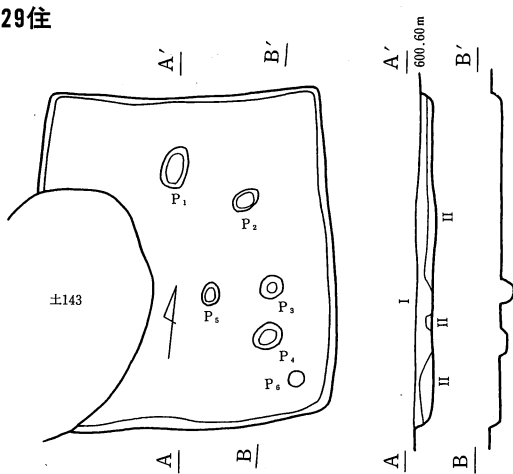
I : 暗褐色土 (炭化物少量混入)
 II : 暗褐色土 (焼土多量混入)
 III : 暗褐色土 (炭化物少量混入)

26住



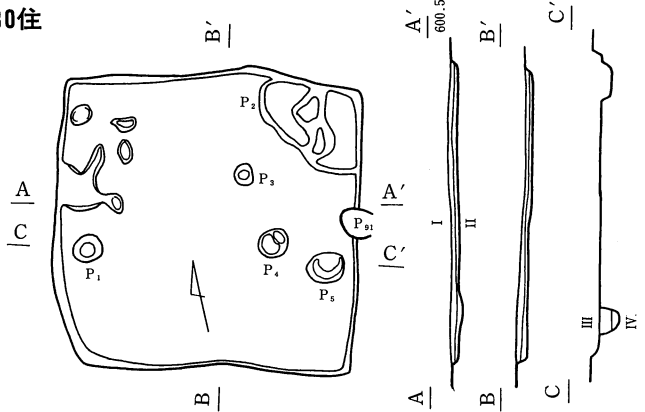
I : 暗褐色土
 II : 暗褐色土 (砂質)

29住



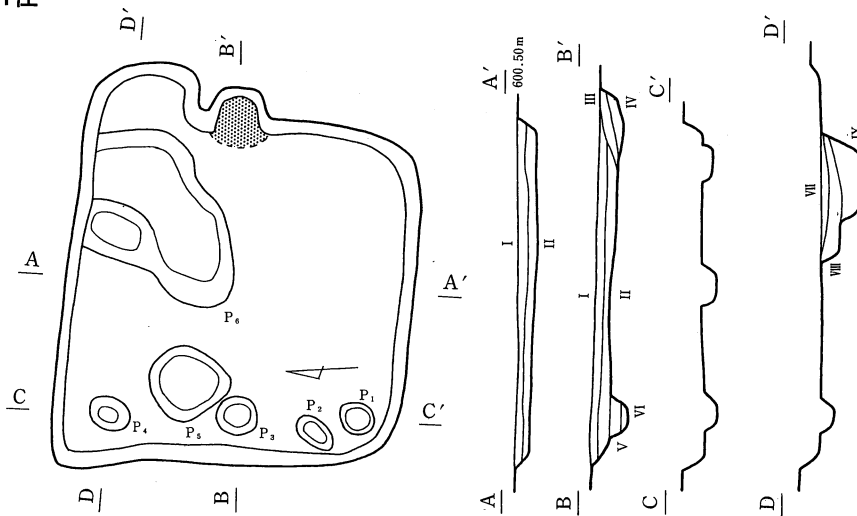
I : 暗褐色土 (炭化物粒少量混入)
 II : 黄褐色土 (鉄分微量、炭化物粒少量混入)

30住

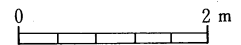


I : 暗褐色土 (炭化物粒・黄色土塊微量、砂礫混入)
 II : 黄褐色土 (灰褐色粘質土少量混入)
 III : 暗褐色土 (鉄分微量、炭化物粒少量混入)
 IV : 暗褐色土 (炭化物粒微量混入)

41住

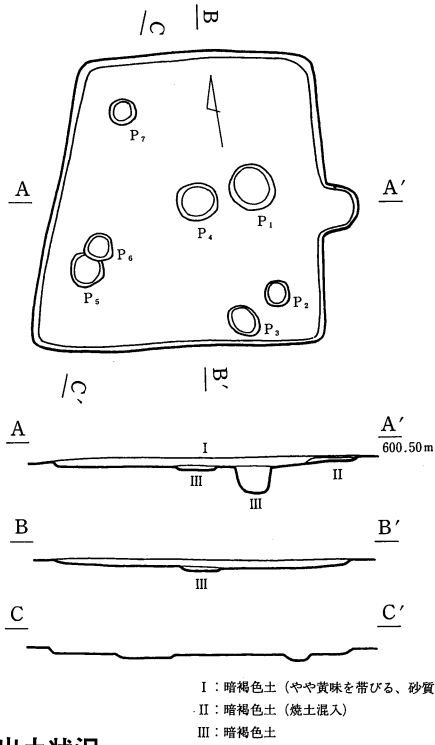


I : 暗褐色土
 II : 暗褐色土
 III : 暗褐色土 (焼土少量混入)
 IV : 暗褐色土 (焼土塊多量混入)
 V : 暗褐色土 (焼土粒・炭化物粒少量混入)
 VI : 暗褐色土 (焼土粒・炭化物粒少量混入)
 VII : 暗褐色土 (焼土粒・炭化物粒少量混入)
 VIII : 暗褐色土 (焼土粒・黄色土塊多量、炭化物粒混入)
 IX : 暗褐色土 (焼土粒少量混入、砂質)

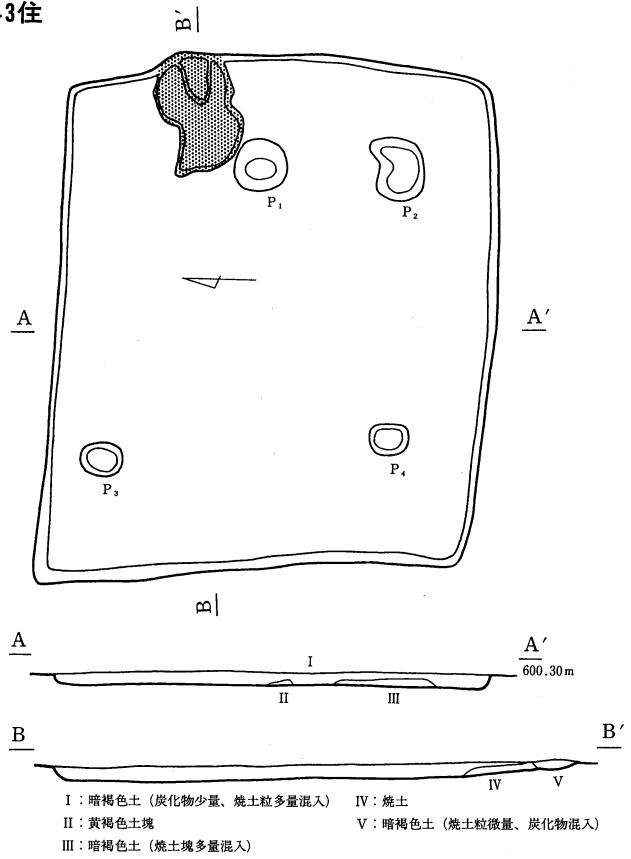


第11図 奈良・平安時代の住居址(5)

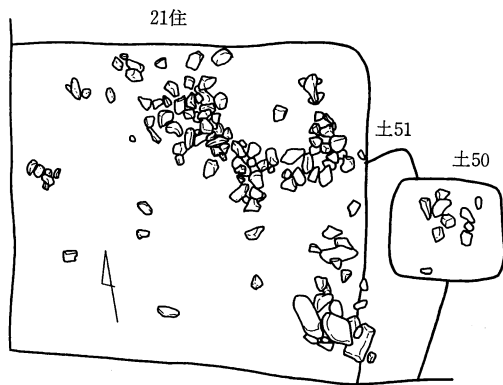
37住



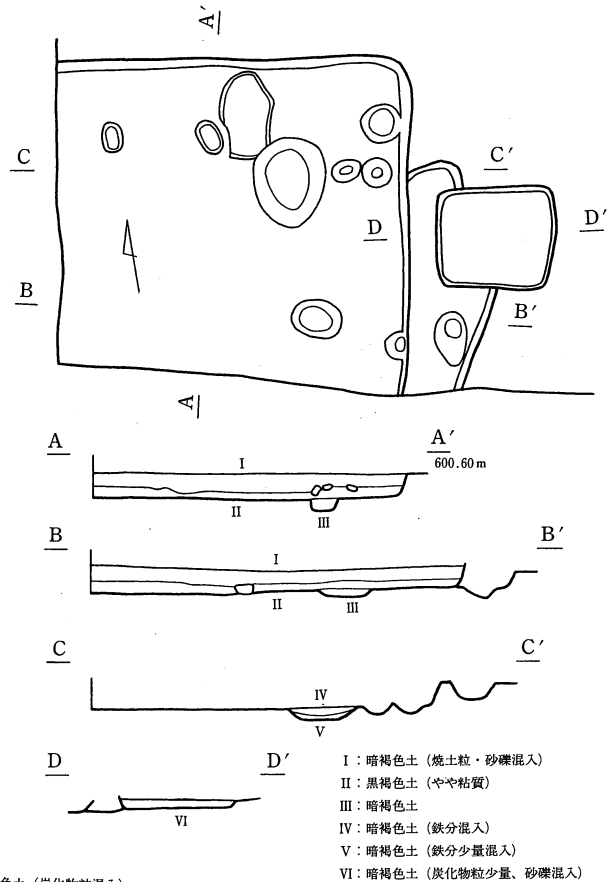
43住



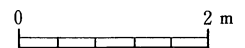
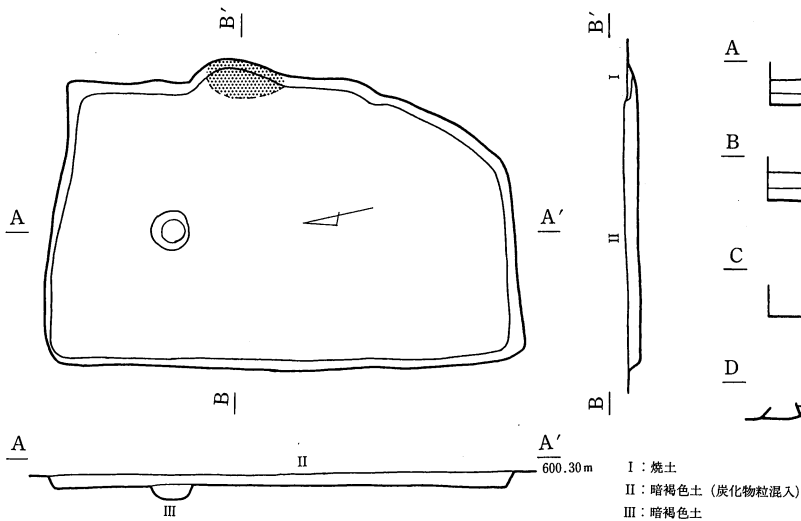
21住出土状況



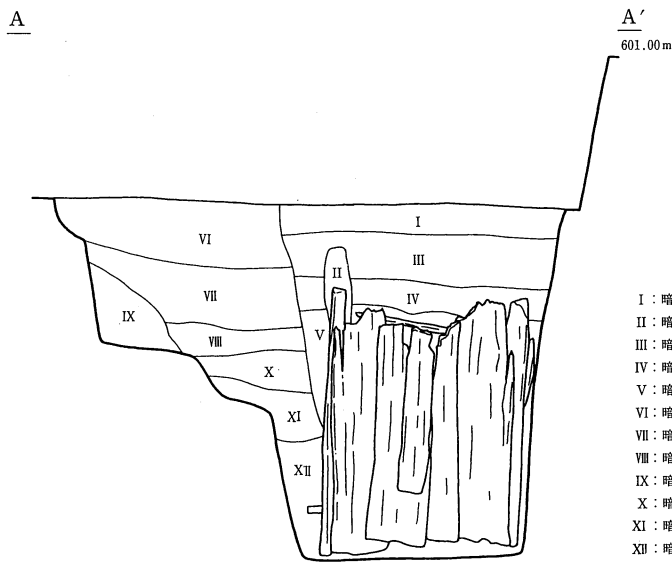
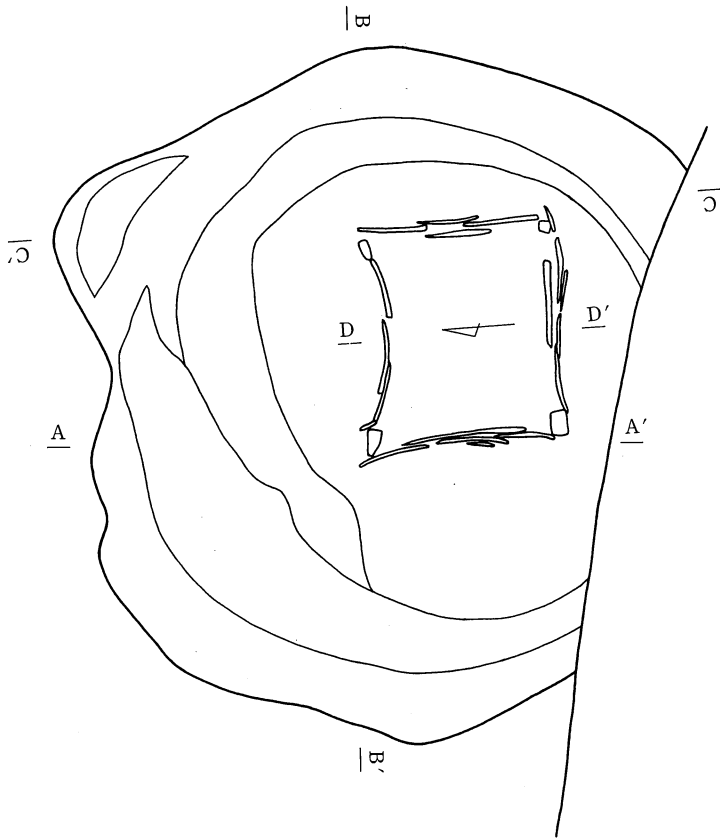
21住・土50



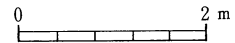
47住



第12図 奈良・平安時代の住居址(6)・中世の遺構



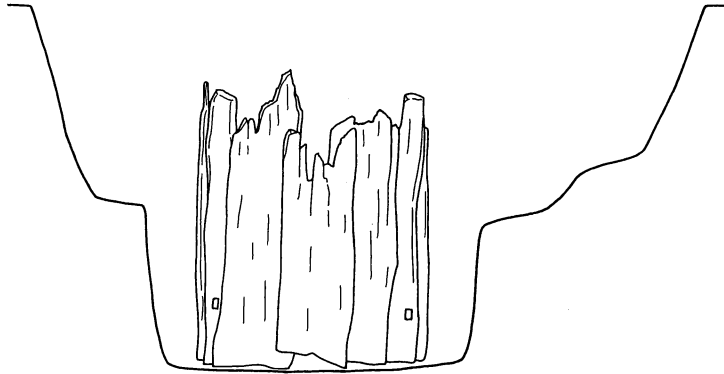
- I : 暗褐色土 (小礫混入)
- II : 暗褐色土 (木杵痕)
- III : 暗褐色土 (小礫混入)
- IV : 暗褐色土
- V : 暗褐色土
- VI : 暗褐色土 (黄褐色土ブロック混入)
- VII : 暗褐色土 (小礫混入)
- VIII : 暗褐色土 (小礫混入)
- IX : 暗褐色土 (小礫混入)
- X : 暗褐色土 (小礫混入)
- XI : 暗褐色土 (小礫混入)
- XII : 暗褐色土 (小礫混入)



第13図 井戸1(1)

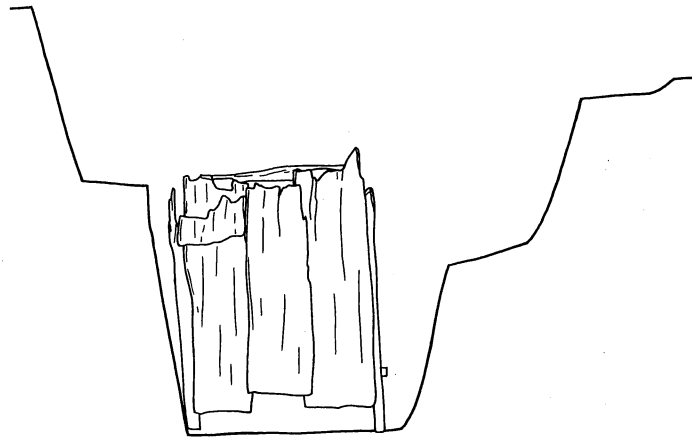
B

B'
601.00m



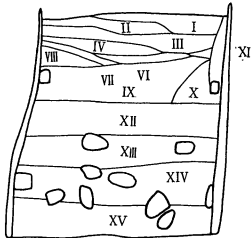
C

C'
601.00m

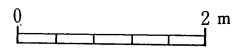


D

D'
595.00m

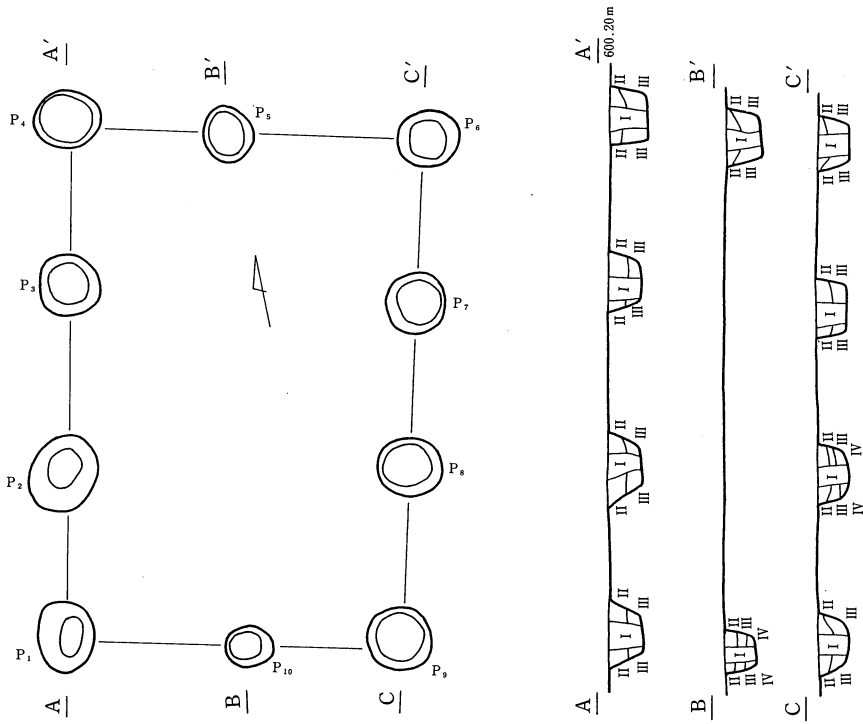


- I : 暗灰褐色土 (黄色砂混入)
- II : 暗灰褐色土
- III : 暗灰褐色土
- IV : 暗褐色土
- V : 黄褐色砂礫
- VI : 黄褐色土
- VII : 黄褐色砂礫
- VIII : 暗褐色土
- IX : 黑褐色土
- X : 黄褐色砂礫
- XI : 暗褐色土
- XII : 黑褐色土 (小礫混入)
- XIII : 黑褐色土
- XIV : 黑褐色土
- XV : 黑褐色土



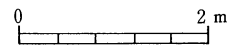
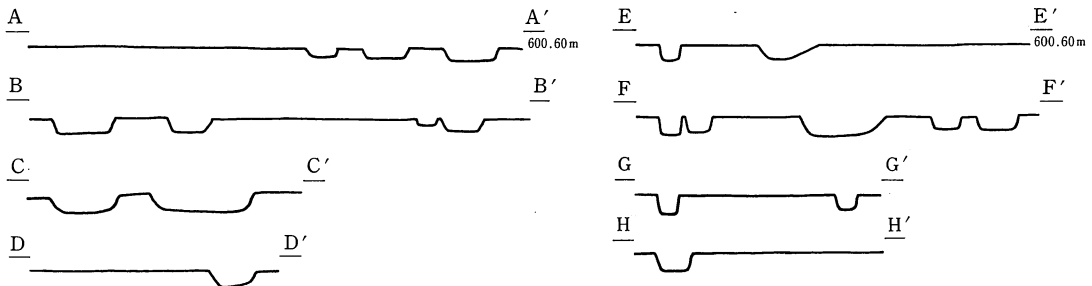
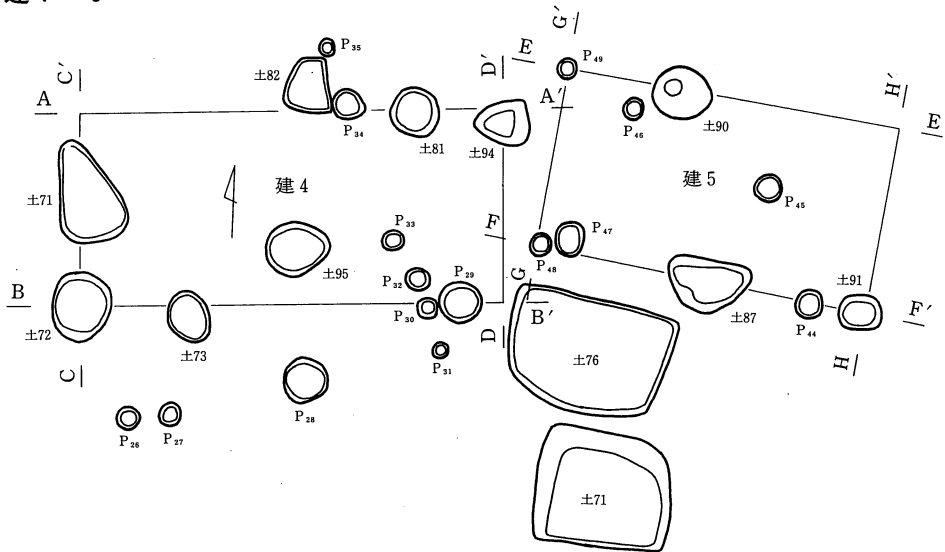
第14図 井戸1(2)

建 2



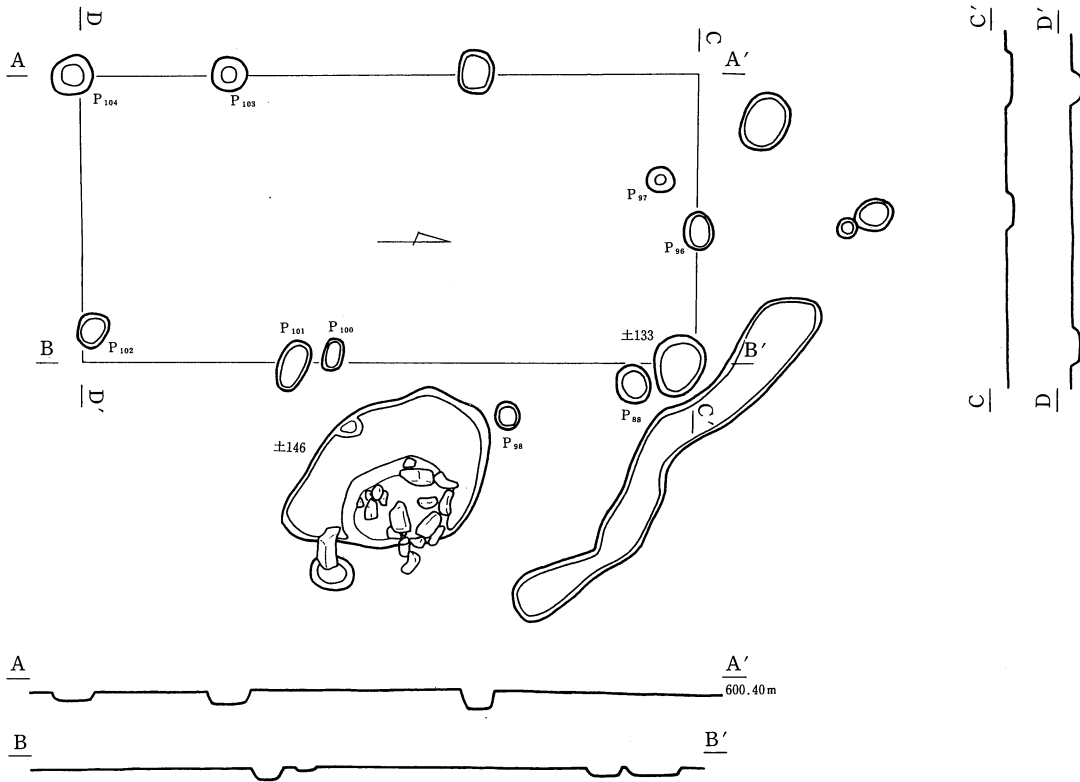
- I : 暗褐色土 (鉄分・砂礫少量混入)
- II : 暗褐色土 (鉄分・砂礫・褐色土塊混入)
- III : 暗褐色土 (鉄分・砂礫・褐色土少量混入)
- IV : 暗褐色土 (鉄分微量混入、砂質)

建 4・5

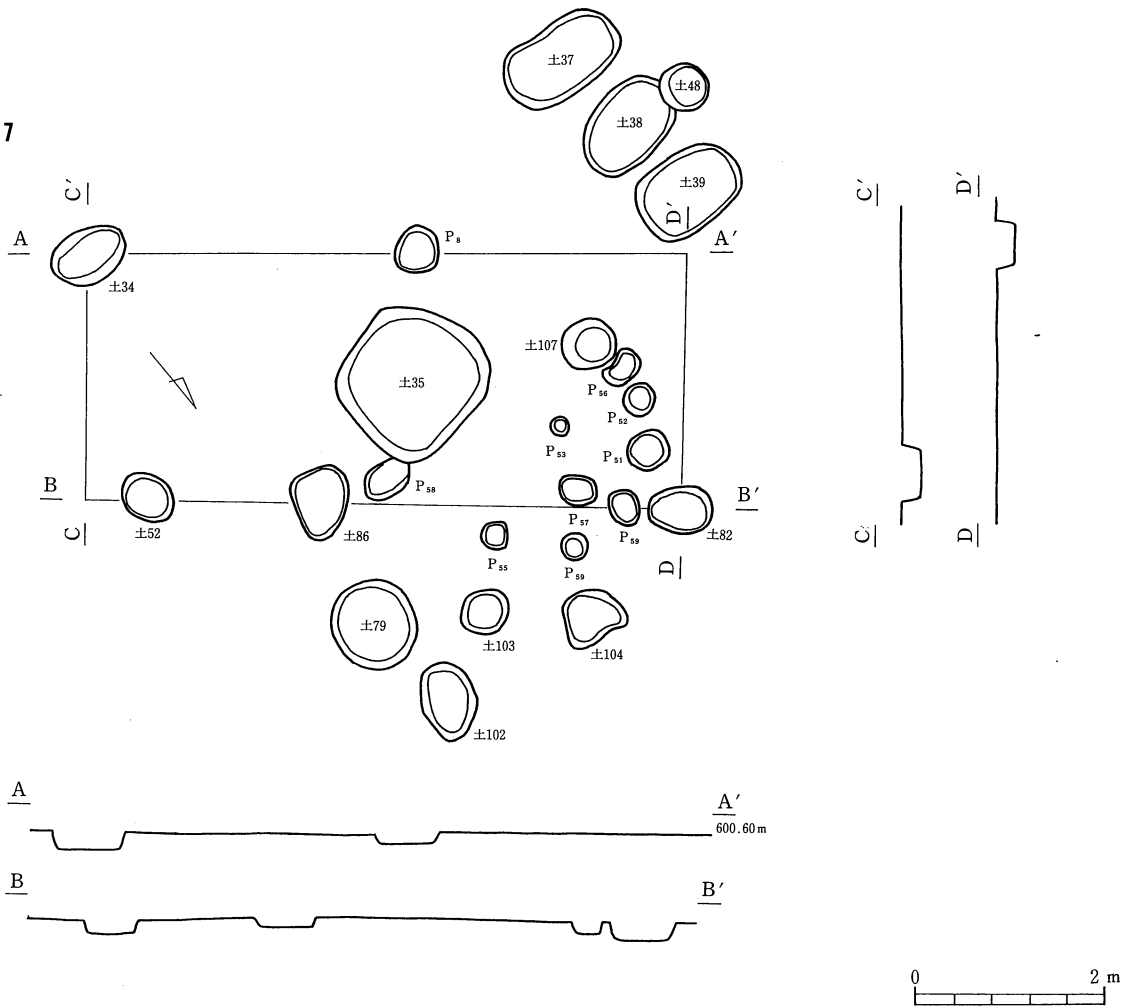


第15図 掘立柱建物址(1)

建 3

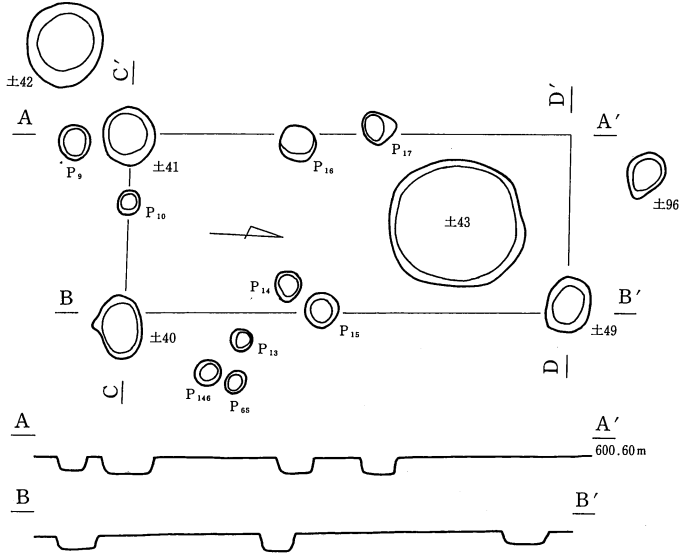


建 7

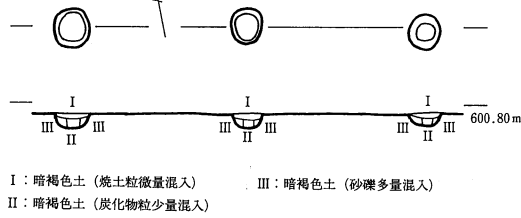


第16图 掘立柱建物址(2)

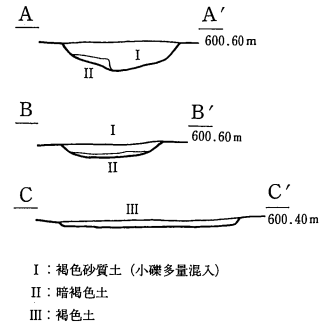
建 6



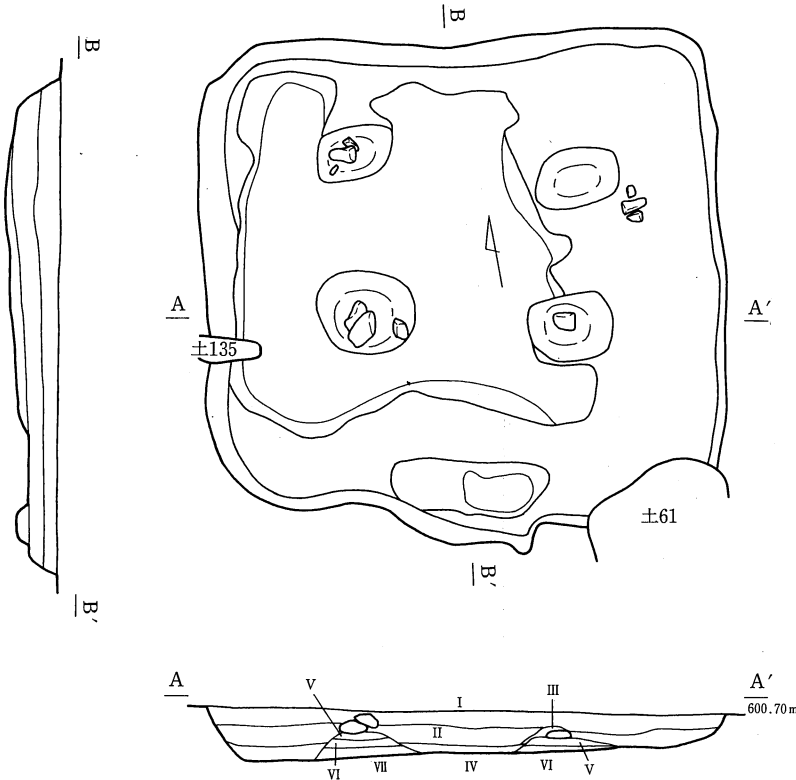
柱穴列 1



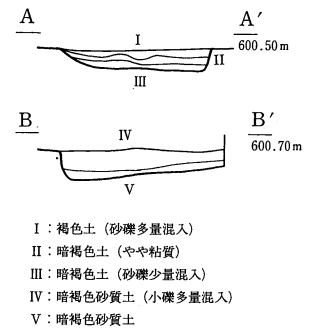
溝 1



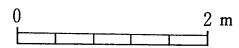
豎 10



溝 3

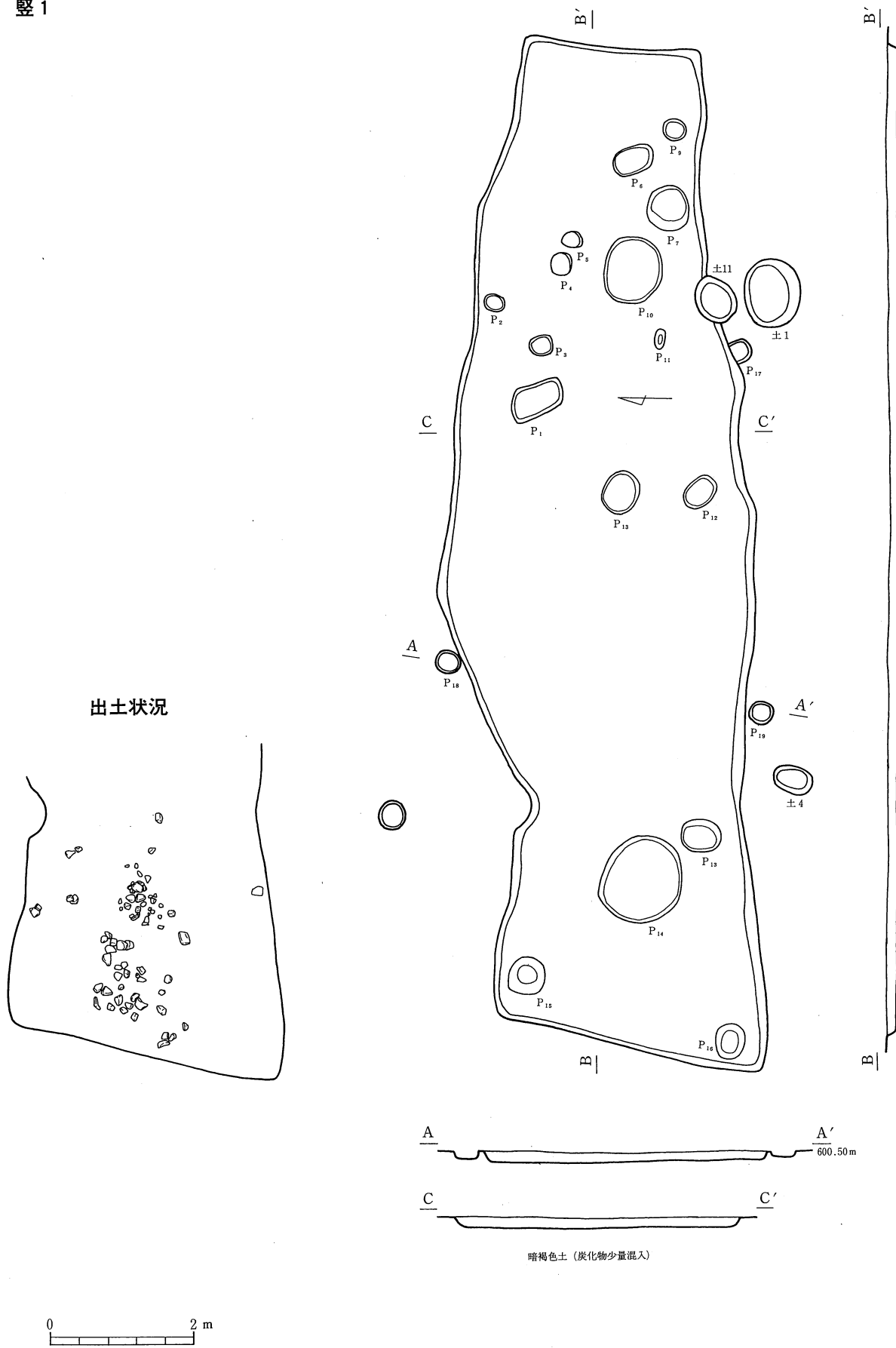


- I: 暗褐色土
- II: 灰褐色土 (炭化物多量混入)
- III: 明灰褐色土
- IV: 灰褐色土 (炭化物少量混入)
- V: 明灰褐色粘質土
- VI: 灰褐色粘質土
- VII: 暗灰褐色粘質土



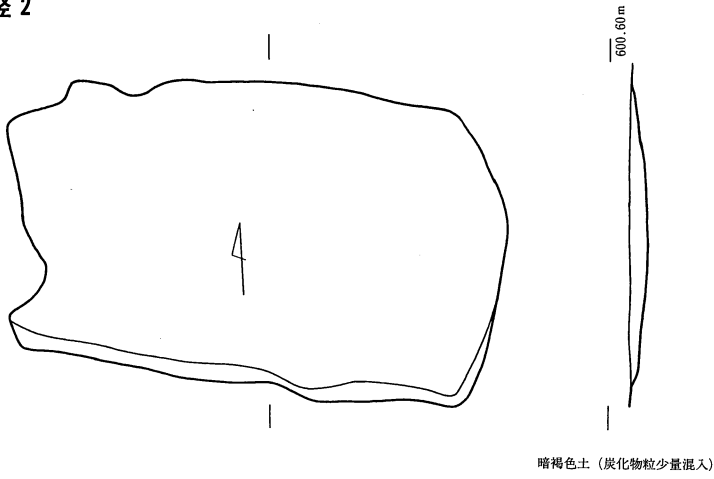
第17図 建物址(3)・豎穴状遺構(1)・溝

豎 1

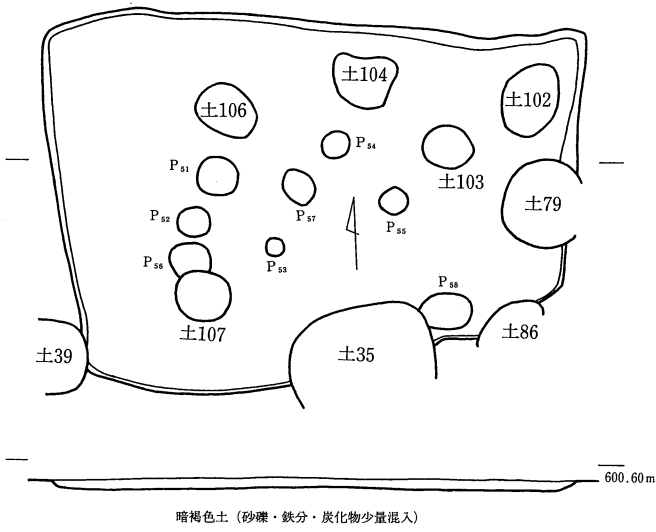


第18図 豎穴状遺構(2)

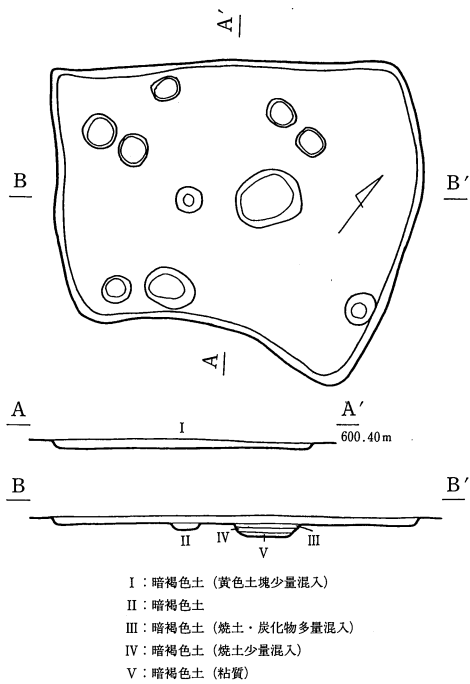
豎 2



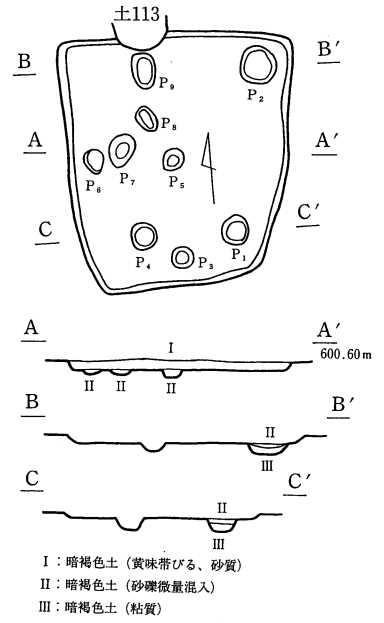
豎 4



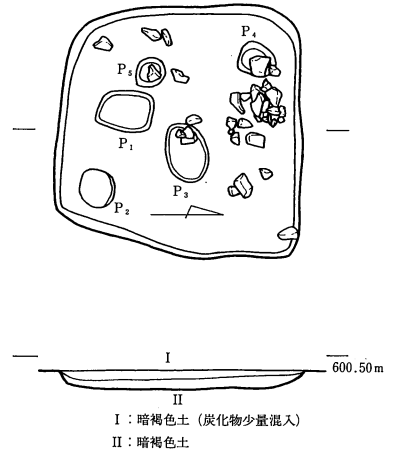
豎 6



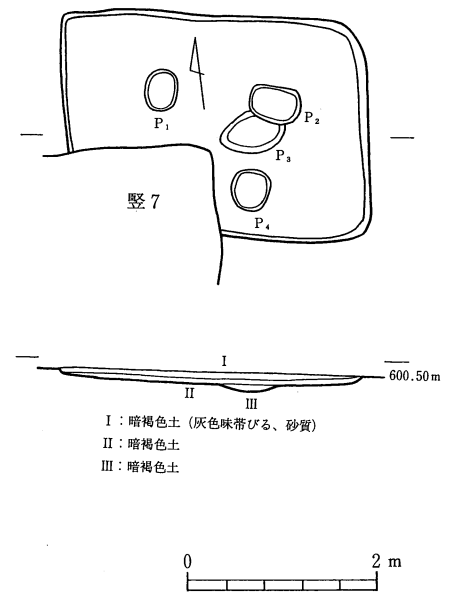
豎 5



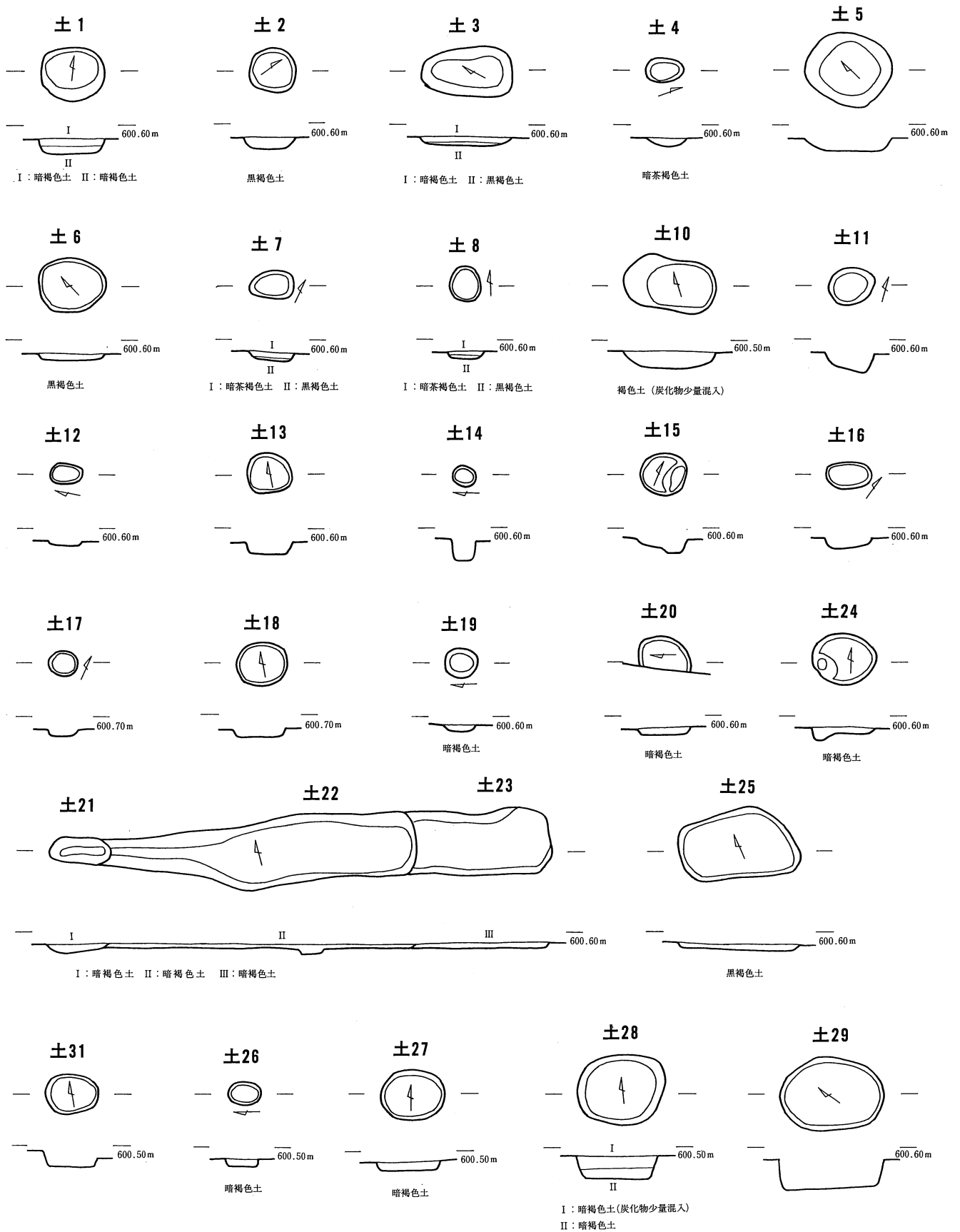
豎 7



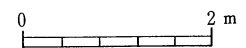
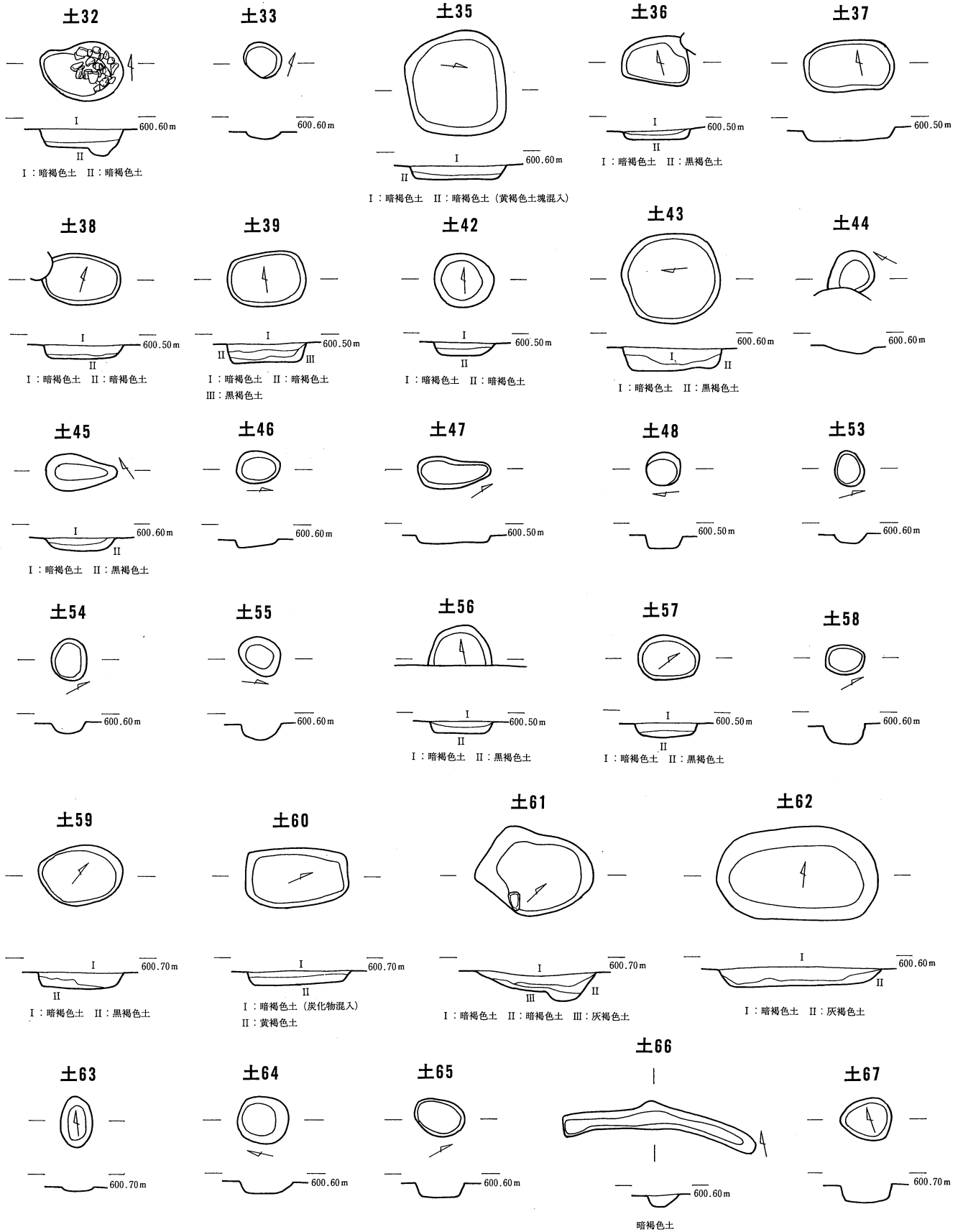
豎 8



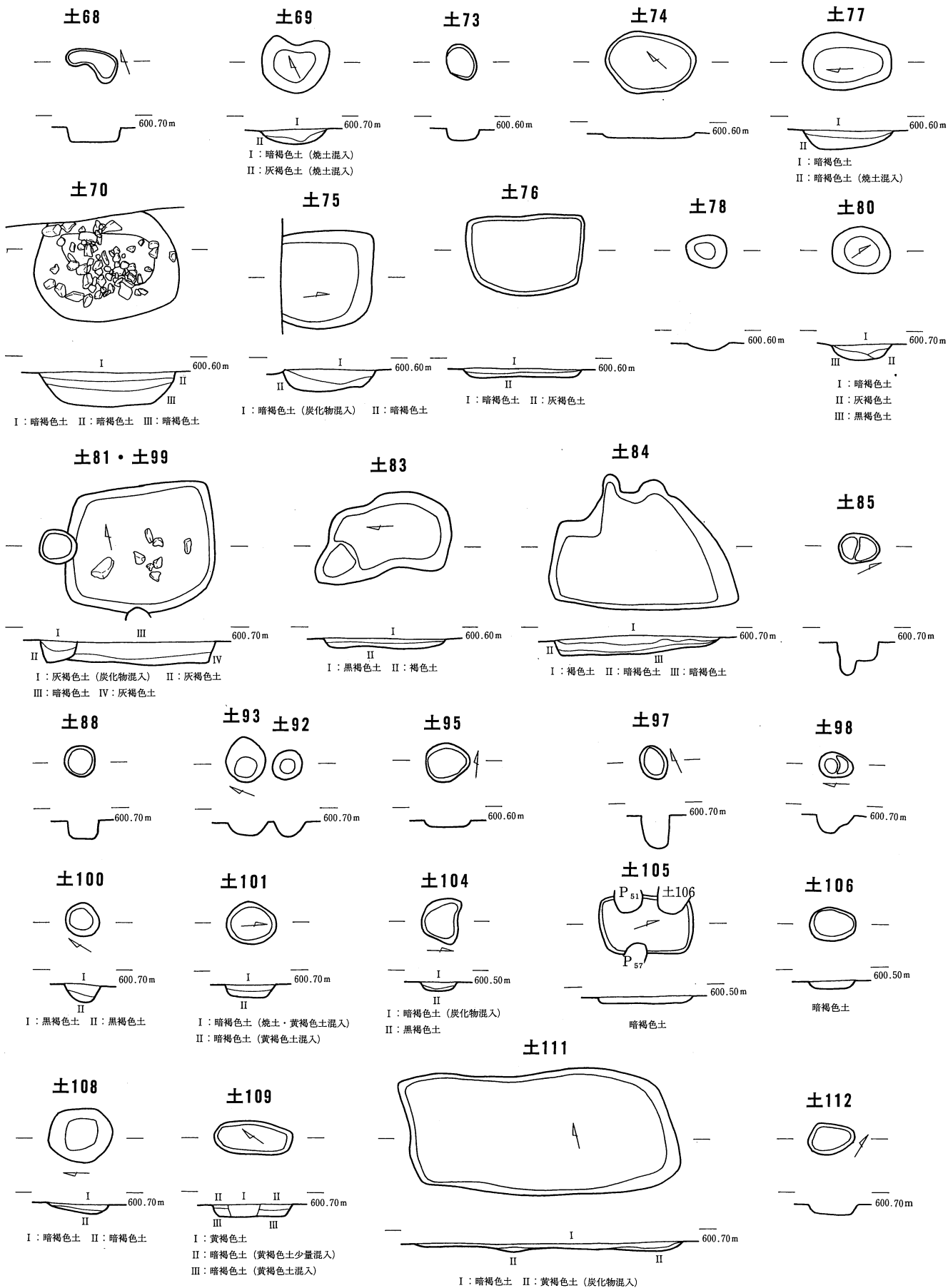
第19図 豎穴状遺構(3)



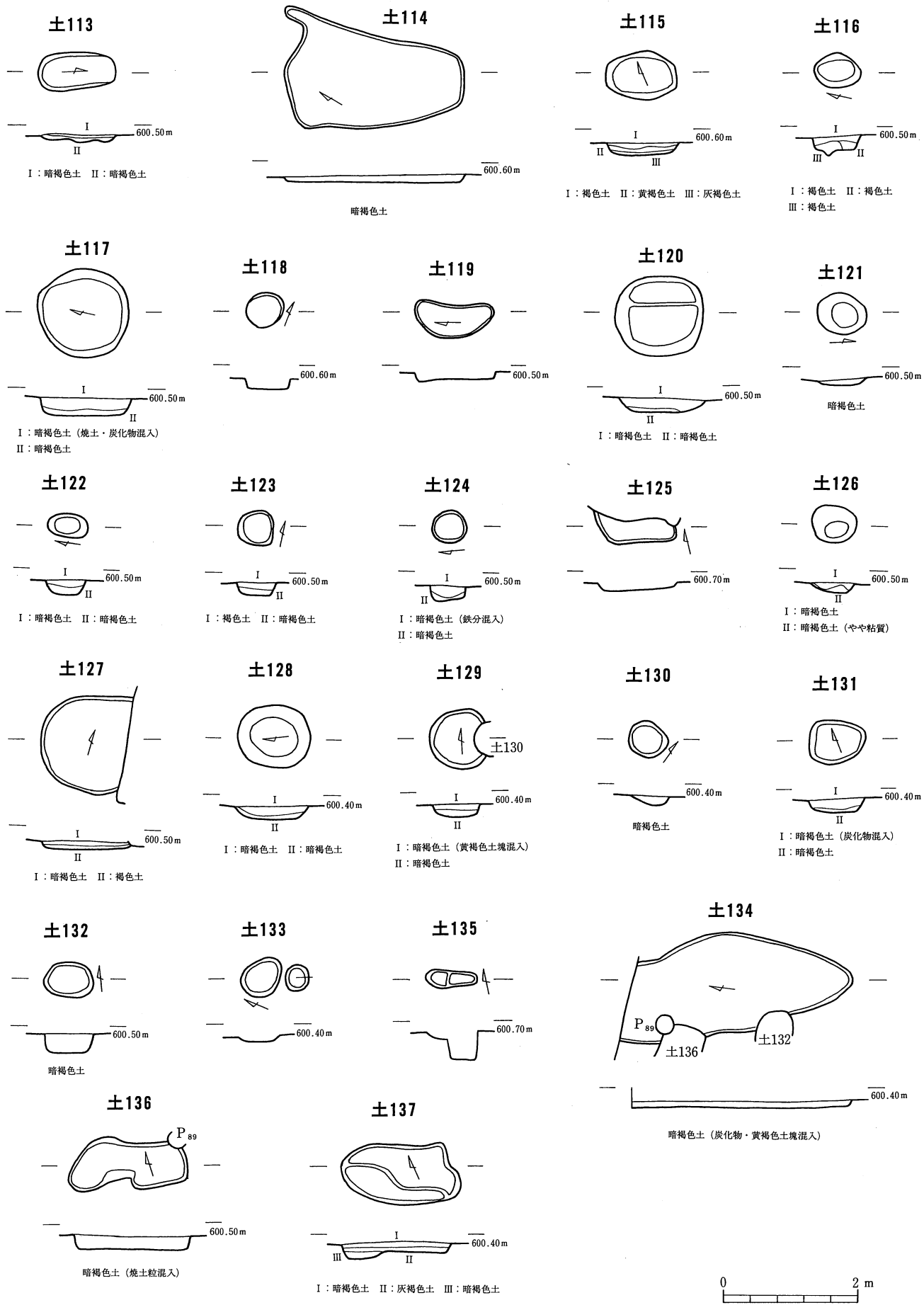
第20图 土坑(1)



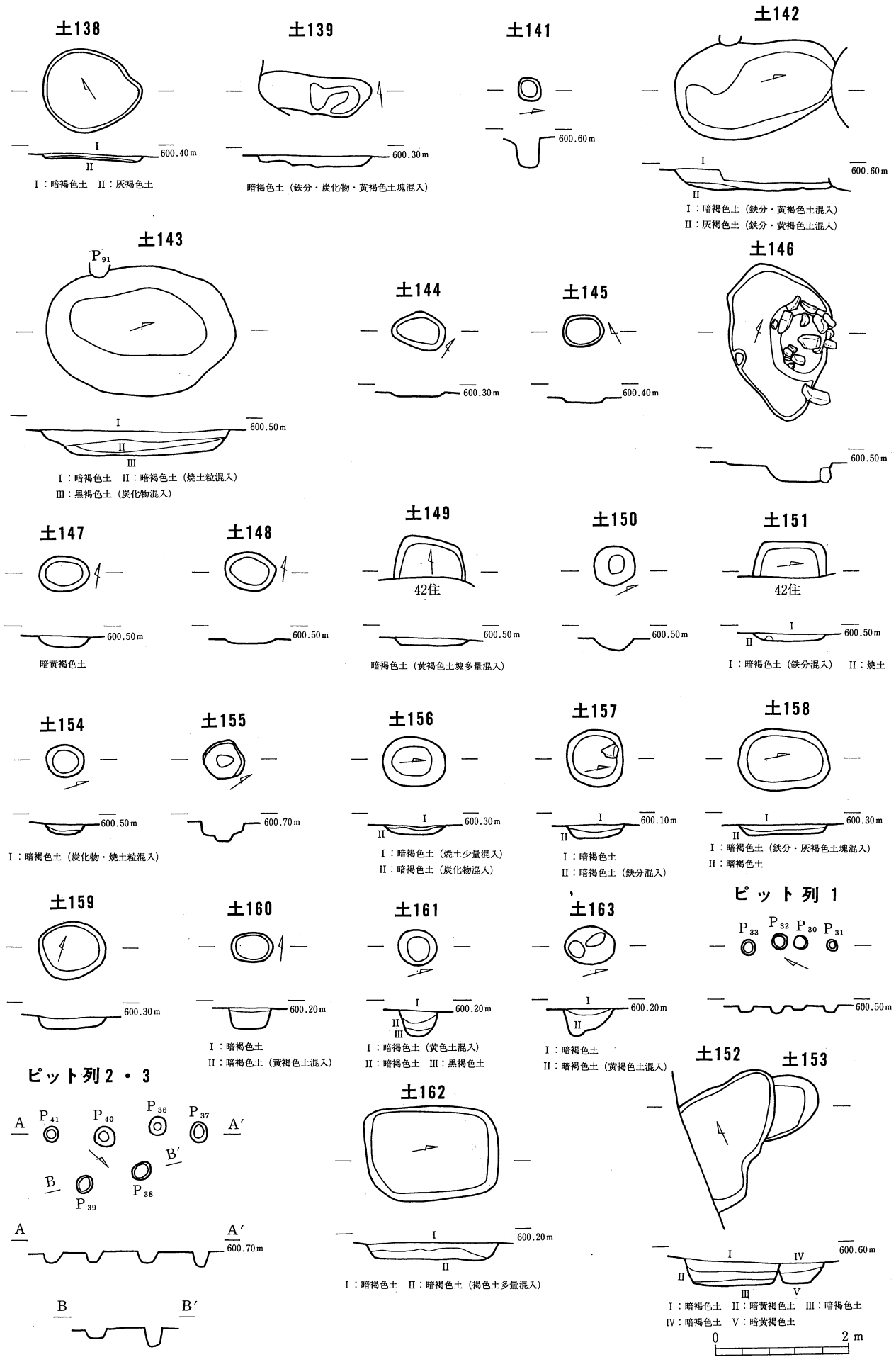
第21图 土坑(2)



第22图 土坑(3)

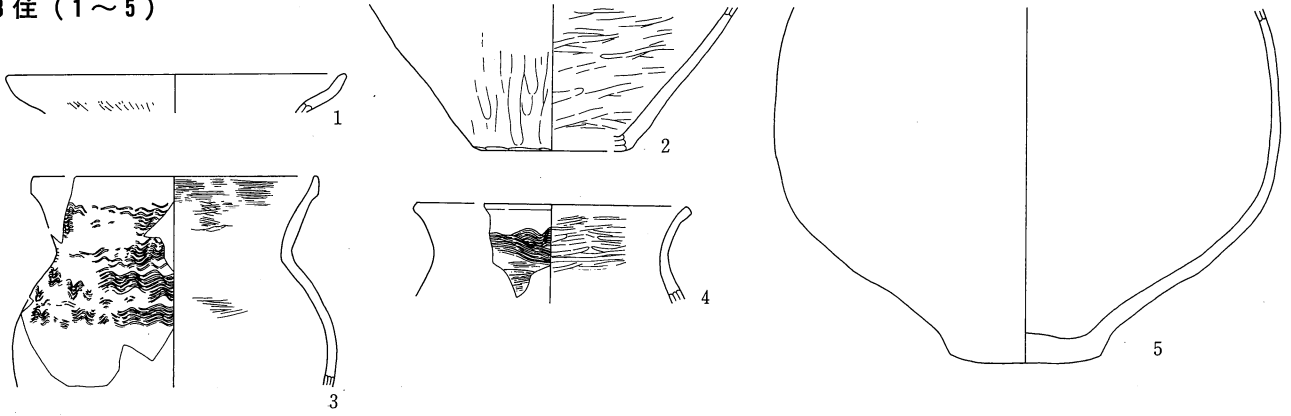


第23图 土坑(4)



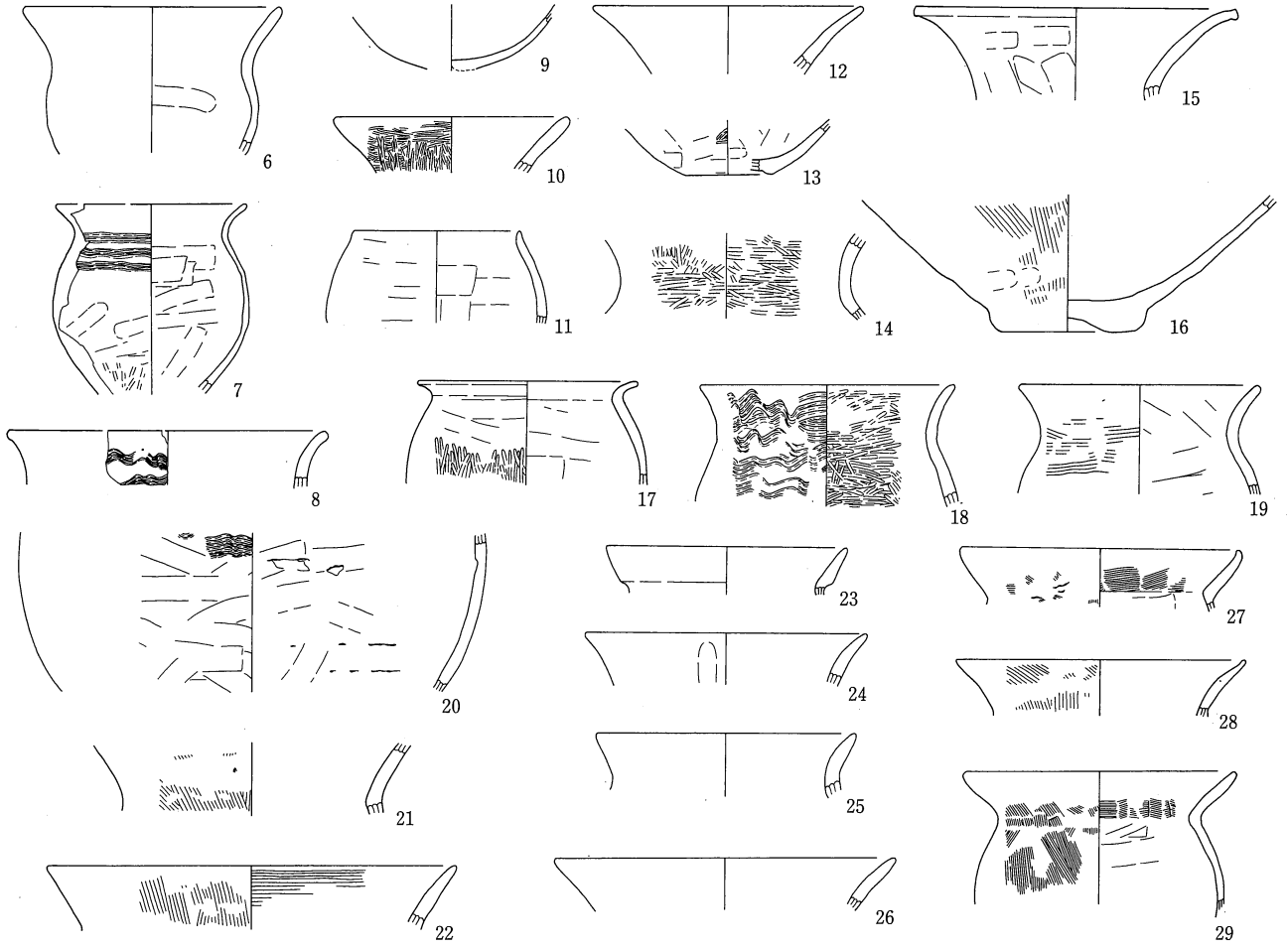
第24図 土坑(5)

8住 (1~5)

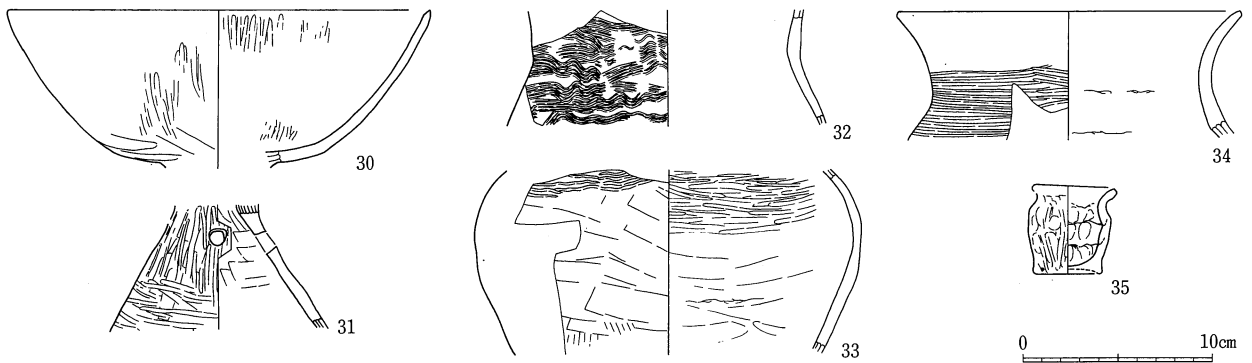


23住 (6~8)

31住 (9~29)



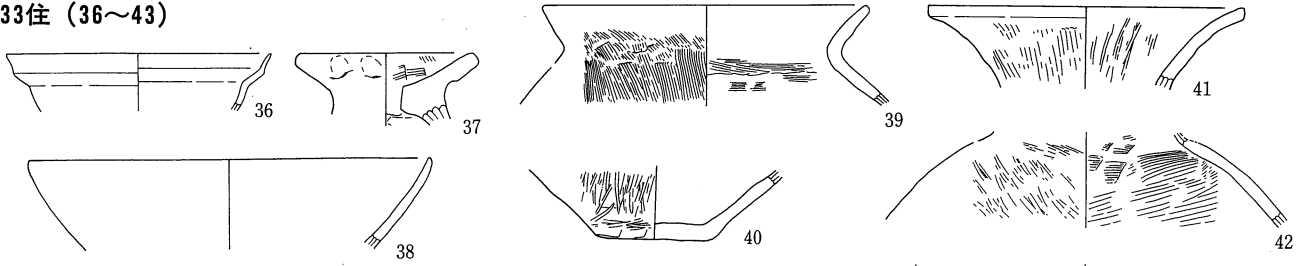
32住 (30~35)



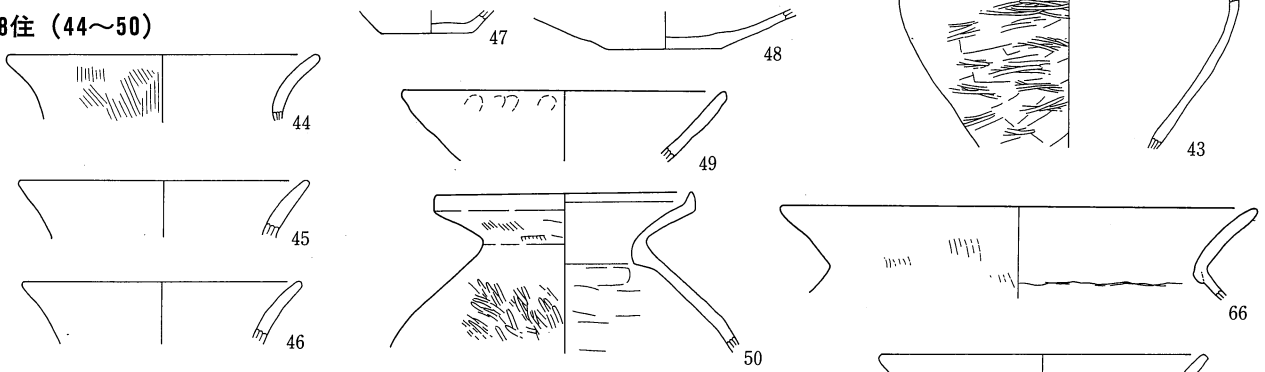
0 10cm

第25図 出土土器(1)

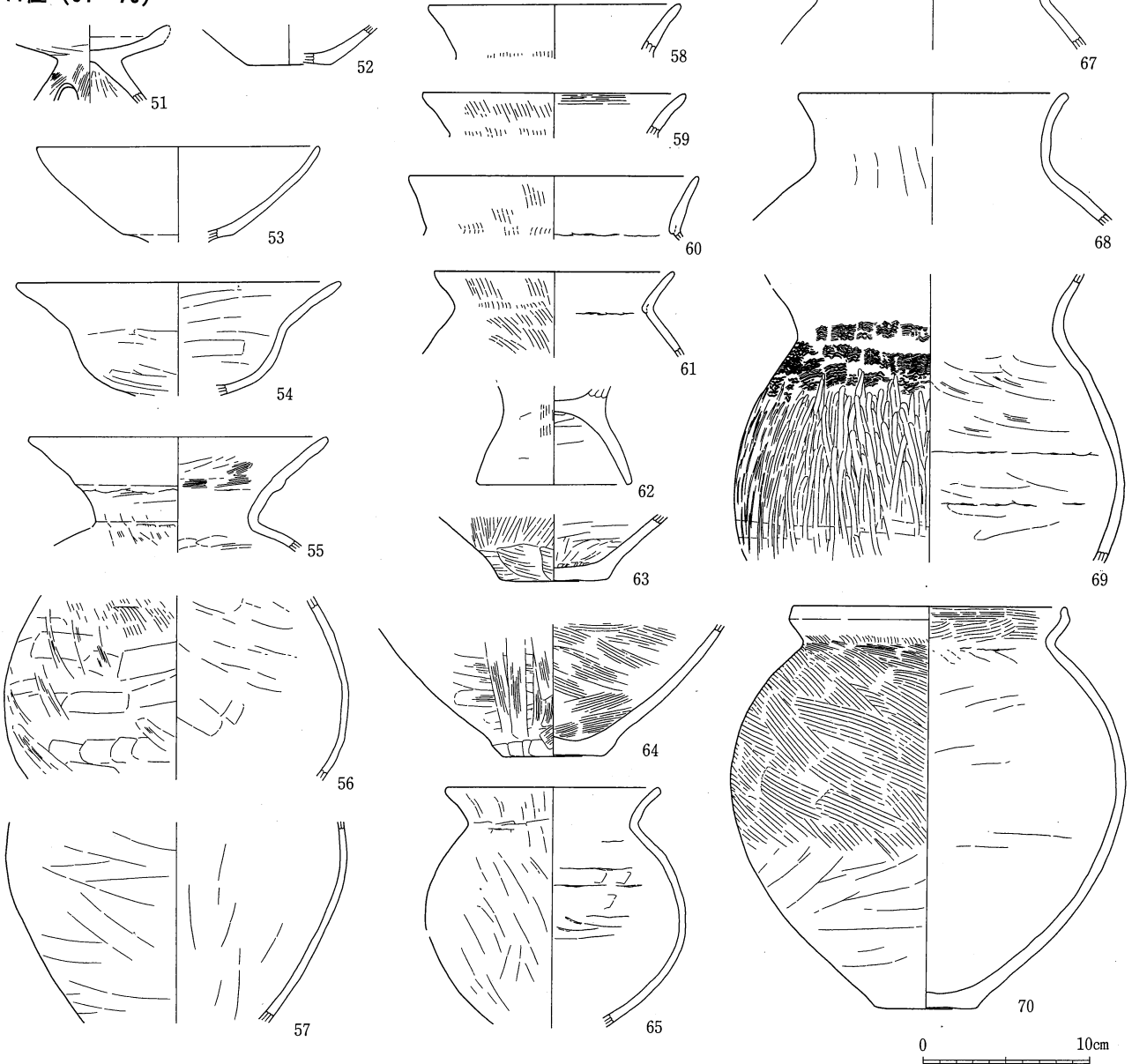
33住 (36~43)



38住 (44~50)

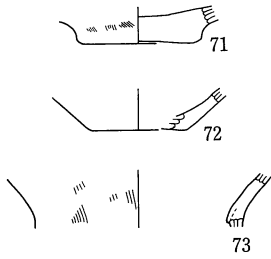


44住 (51~70)

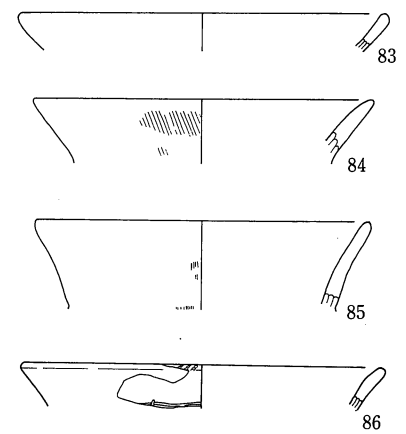
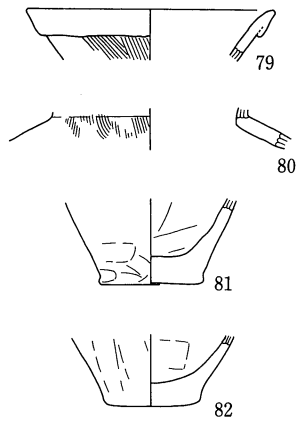
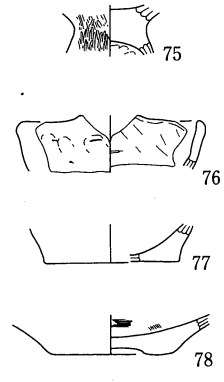


第26图 出土土器(2)

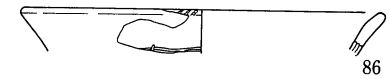
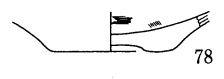
40住 (71~73)



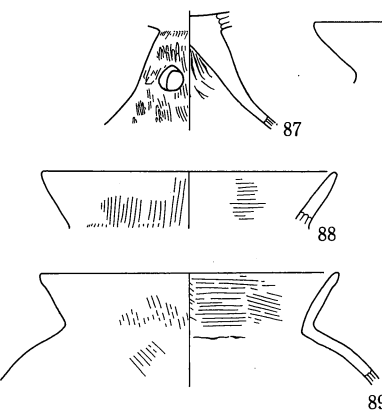
42住 (75~86)



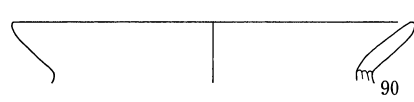
±154



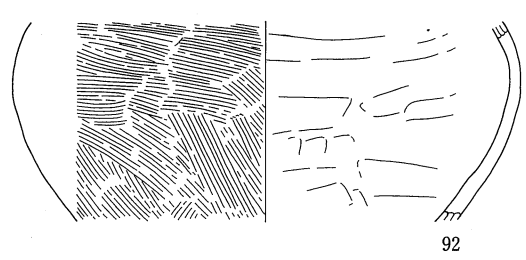
±83 (87~89)



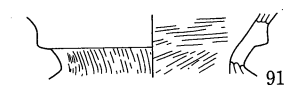
±111



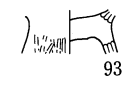
±149



±102



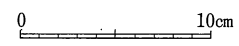
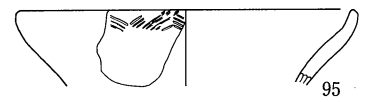
±23



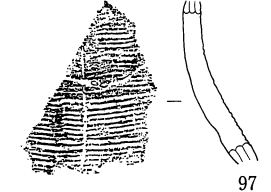
11住



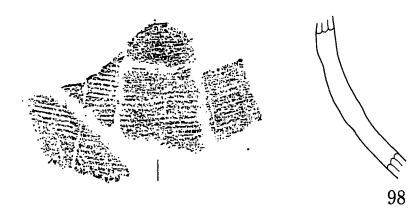
13住



96



97



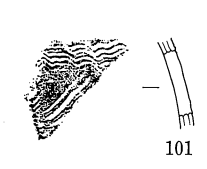
98



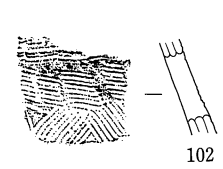
99



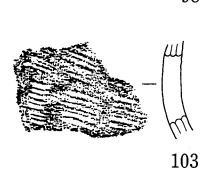
100



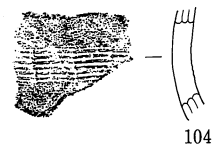
101



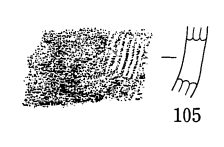
102



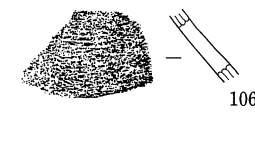
103



104



105



106



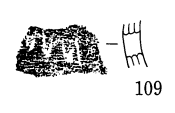
110



107



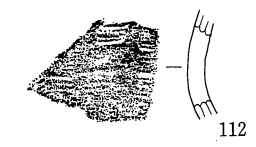
108



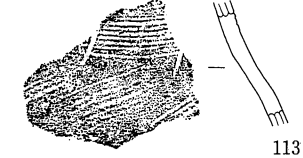
109



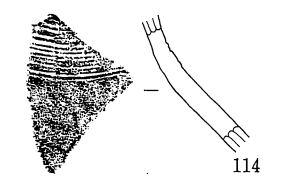
111



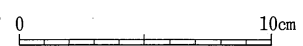
112



113

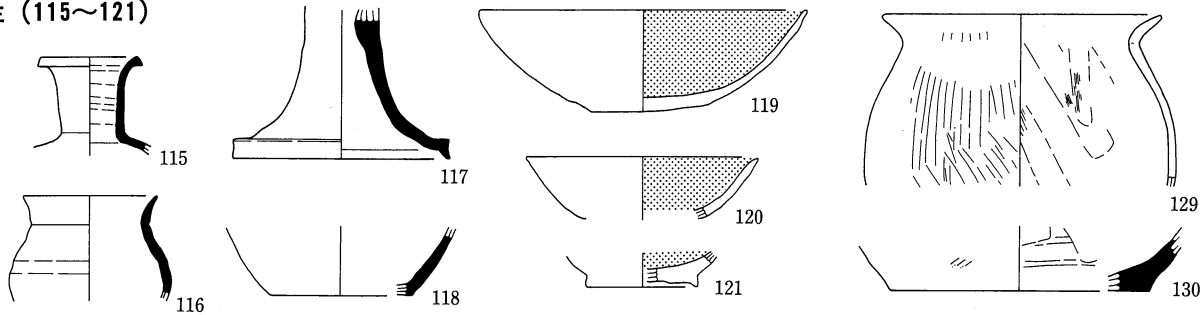


114

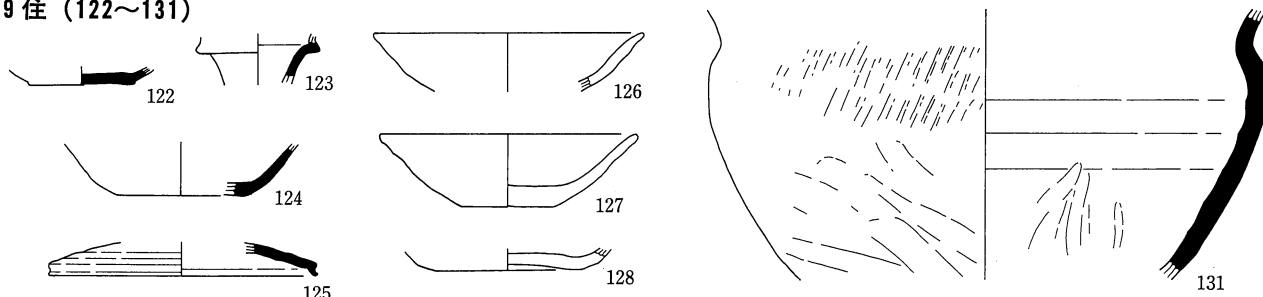


第27图 出土土器(3)

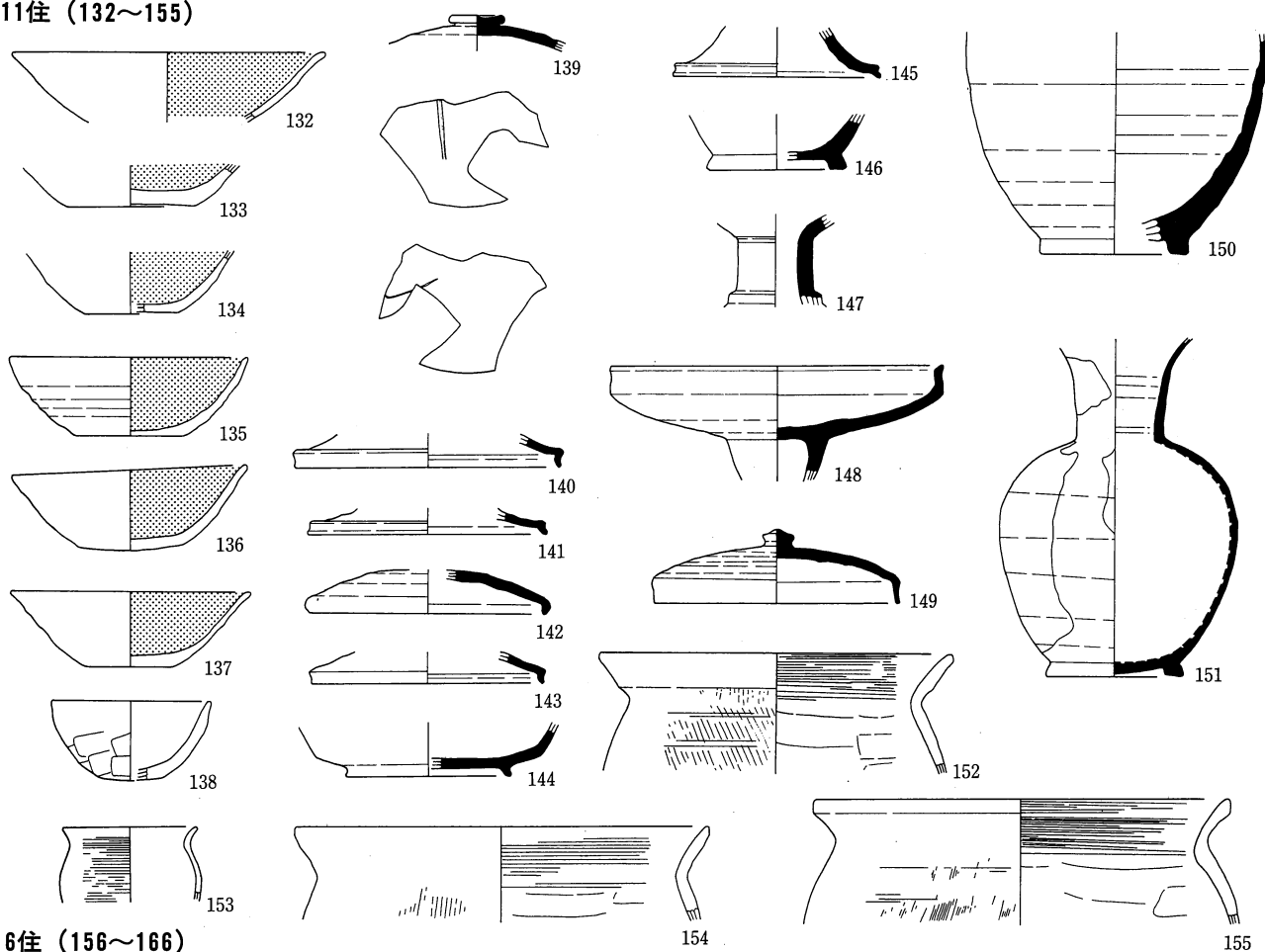
8 住 (115~121)



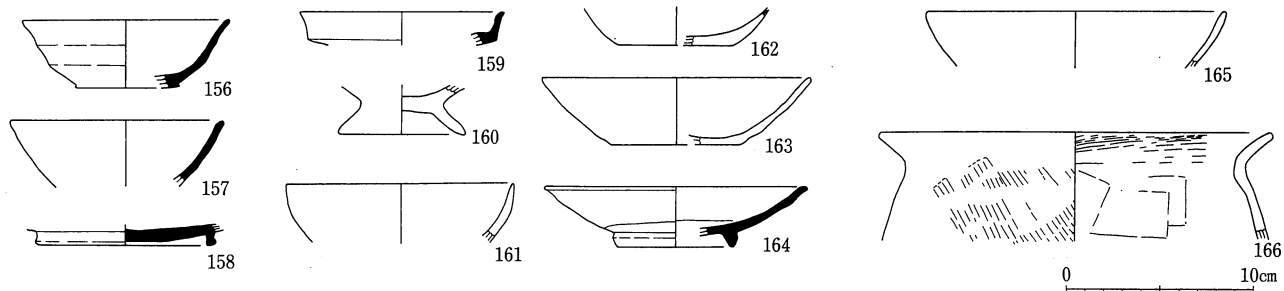
9 住 (122~131)



11 住 (132~155)



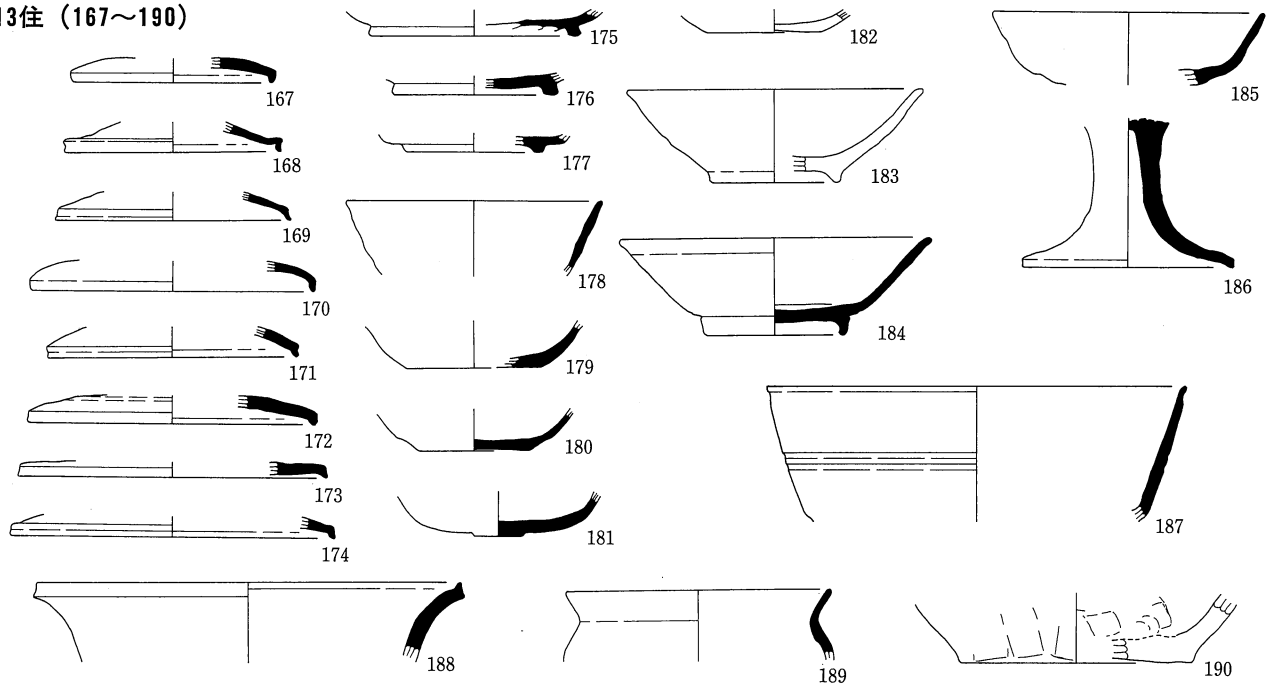
16 住 (156~166)



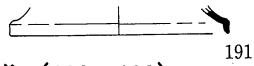
0 10cm

第28图 出土土器(4)

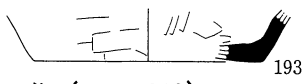
13住 (167~190)



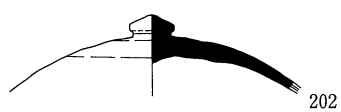
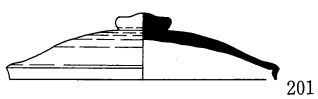
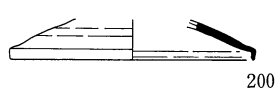
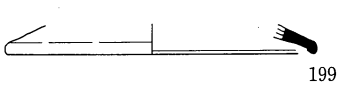
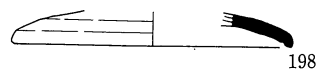
12住



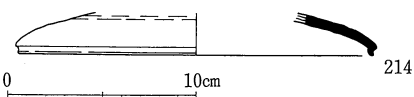
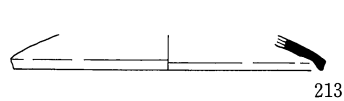
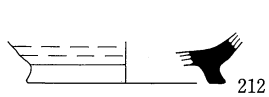
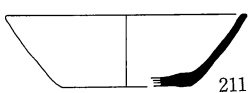
14住 (192~193)



17住 (198~210)

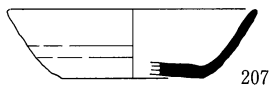
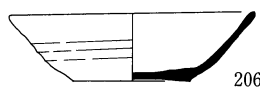
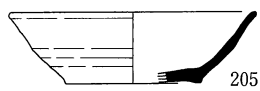
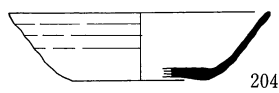
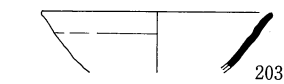
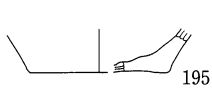
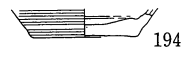


22住 (211~214)

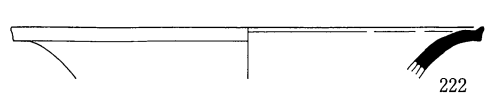
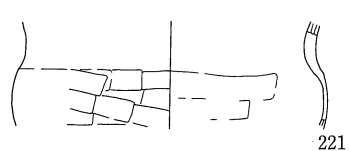
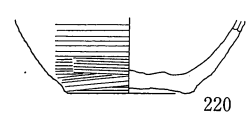
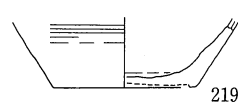
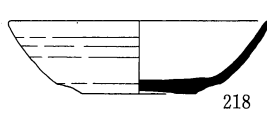
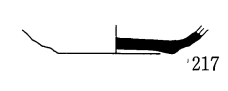
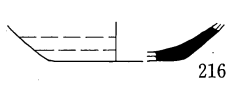
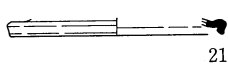


0 10cm

15住 (194~197)

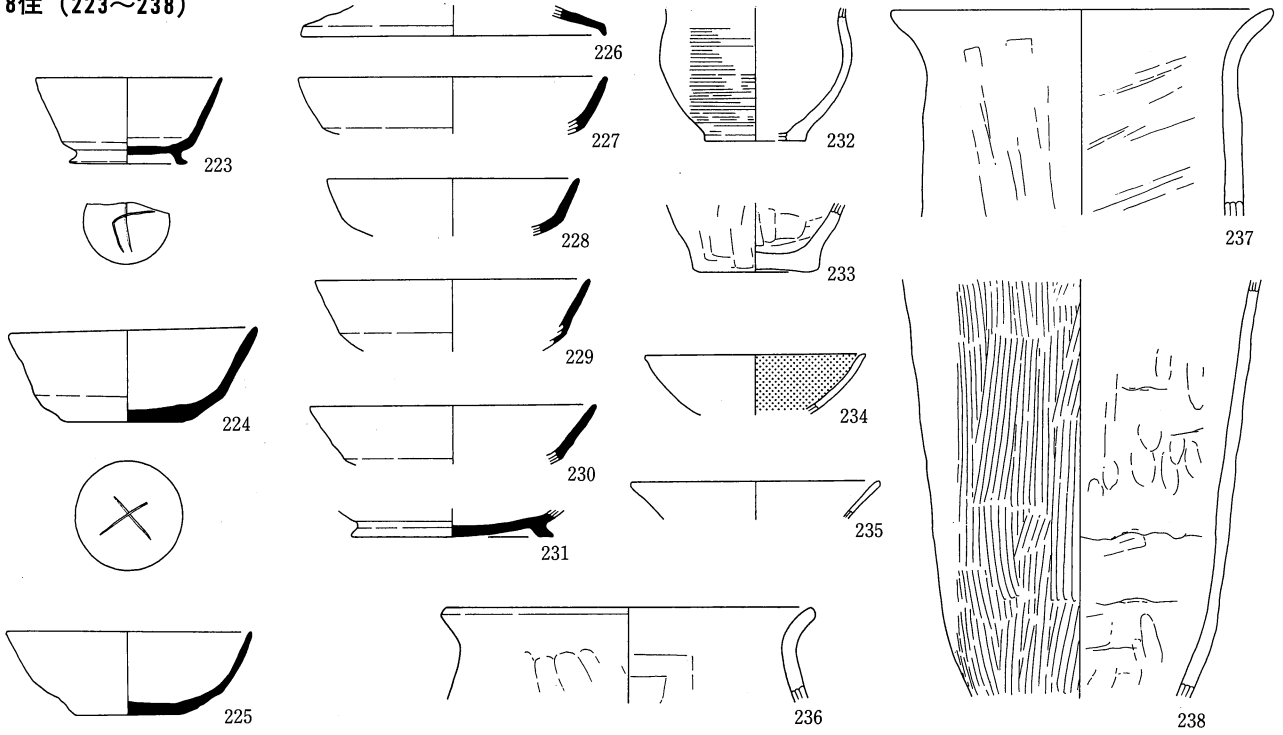


26住 (215~222)

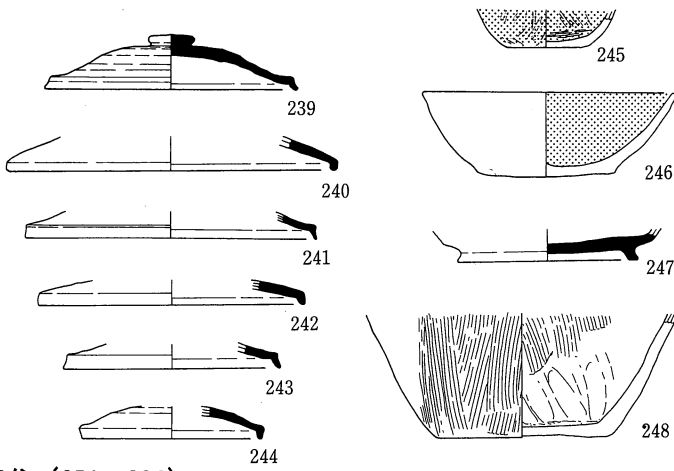


第29图 出土土器(5)

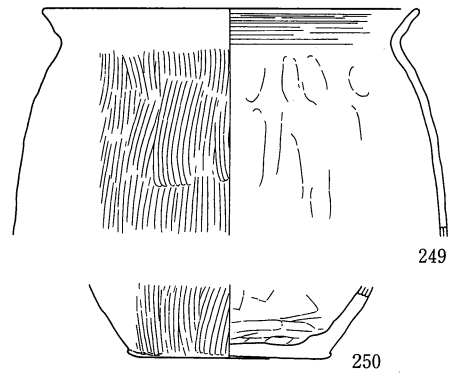
18住 (223~238)



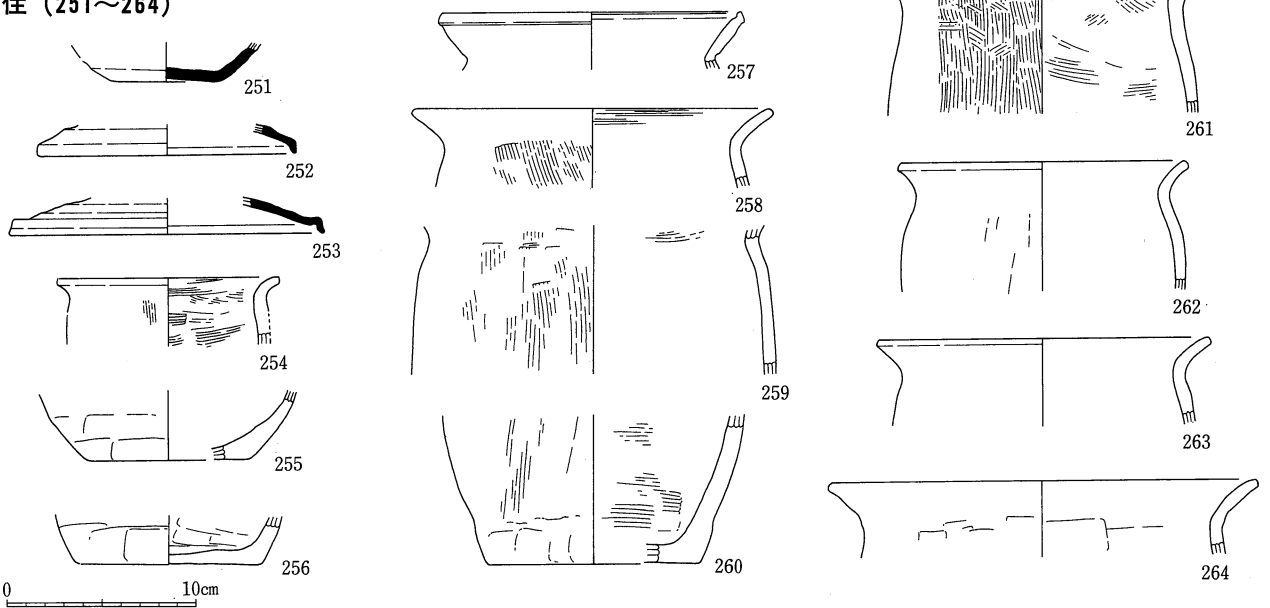
30住 (239~248)



45住 (249~250)

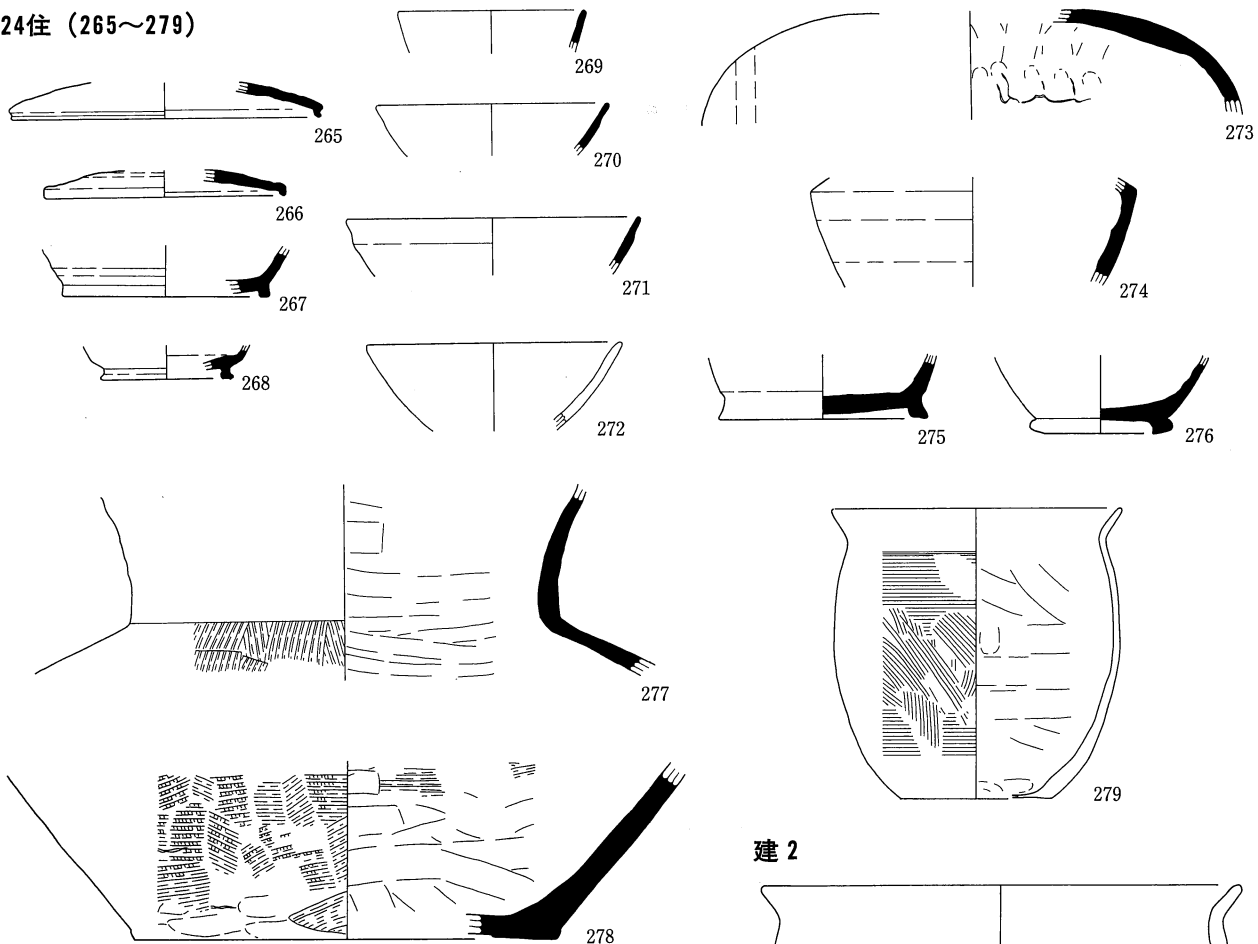


43住 (251~264)

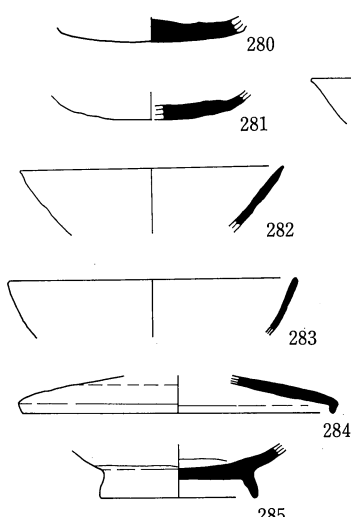


第30图 出土土器(6)

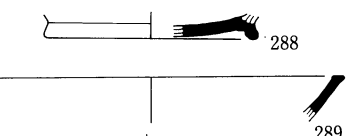
24住 (265~279)



41住 (280~285)



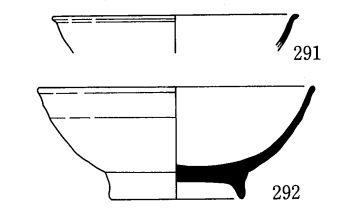
37住 (288・289)



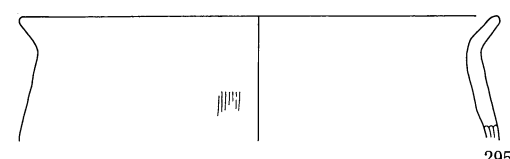
47住



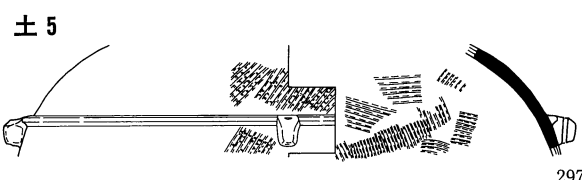
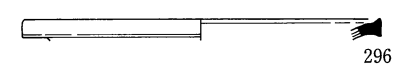
豎 4 (291・292)



建 2



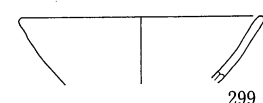
土 3



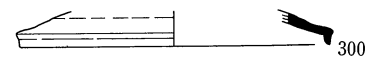
土 8



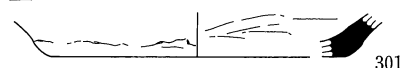
土 20



土 117



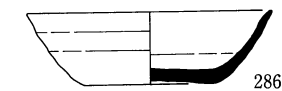
土 133



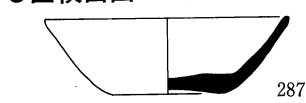
土 143



P 23



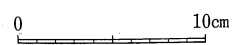
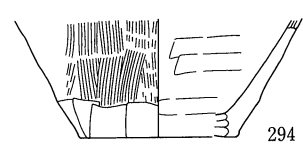
C区検出面



土 21

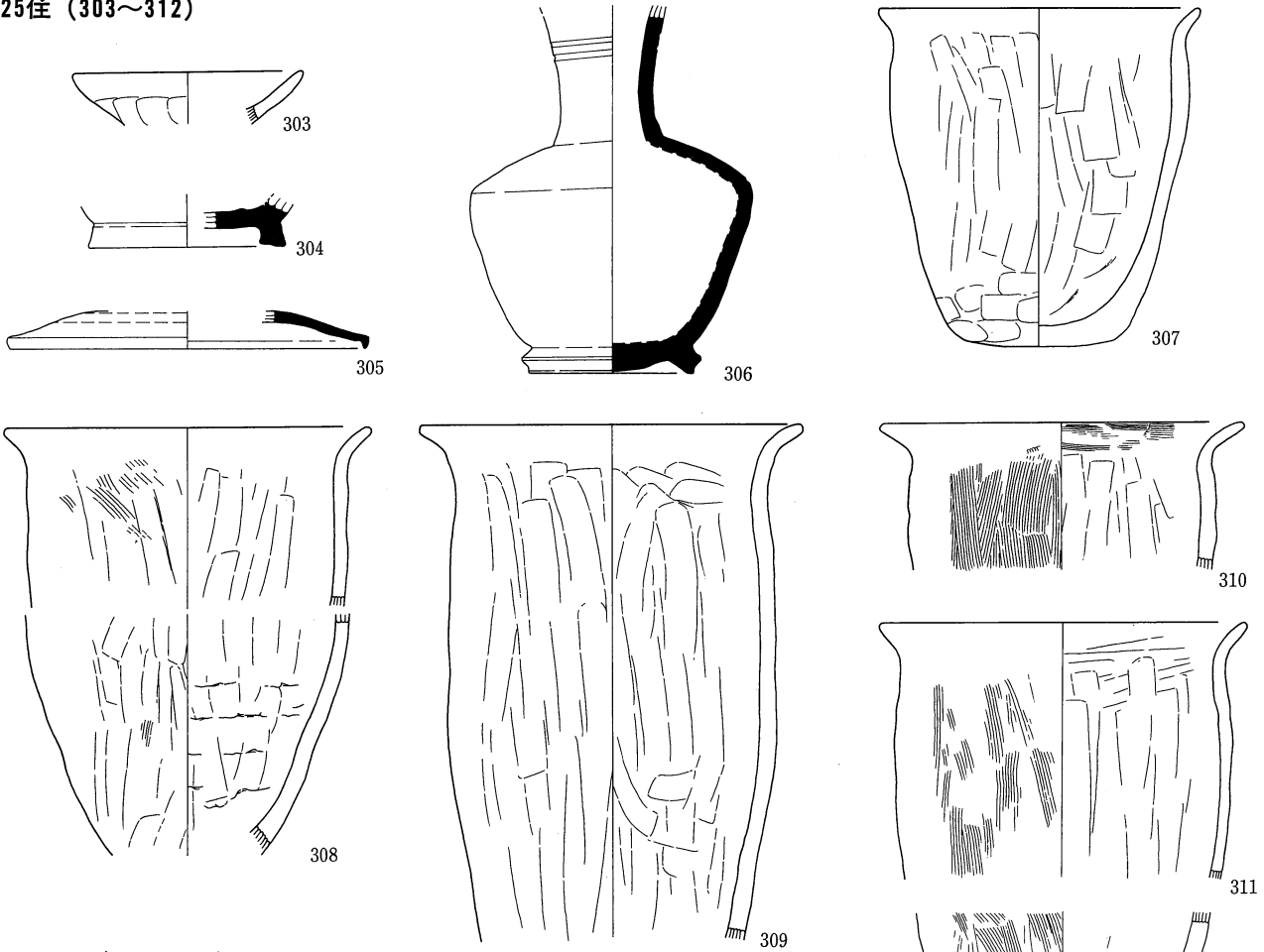


土 30

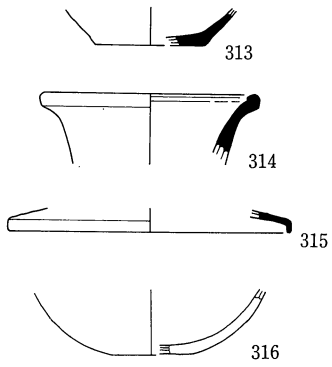


第31图 出土土器(7)

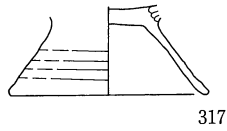
25住 (303~312)



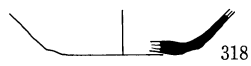
土29 (313~316)



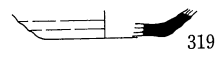
土137



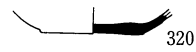
土140



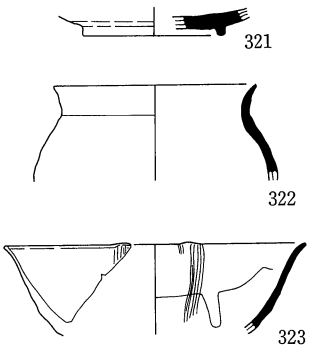
土105



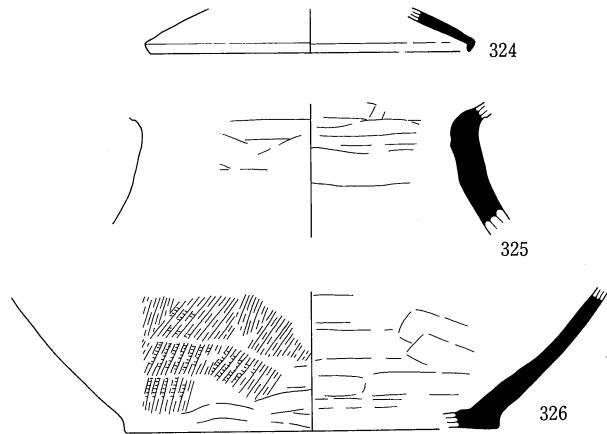
土59



A区検出面 (321~323)



B区検出面 (324~326)



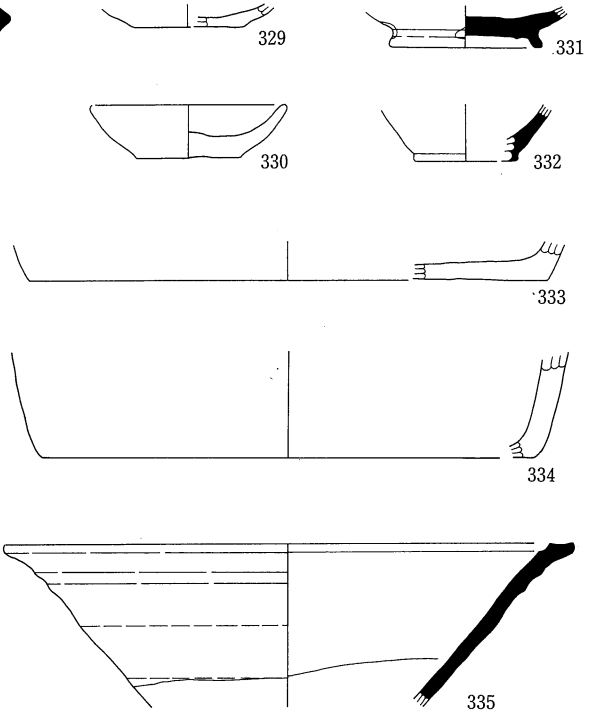
0 10cm

第32図 出土土器(8)

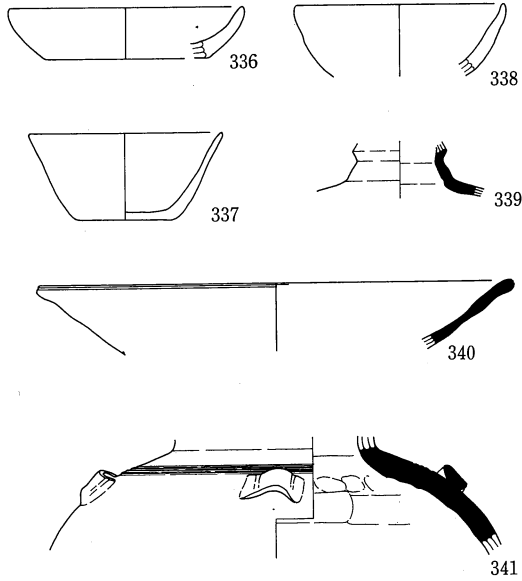
21住 (327・328)



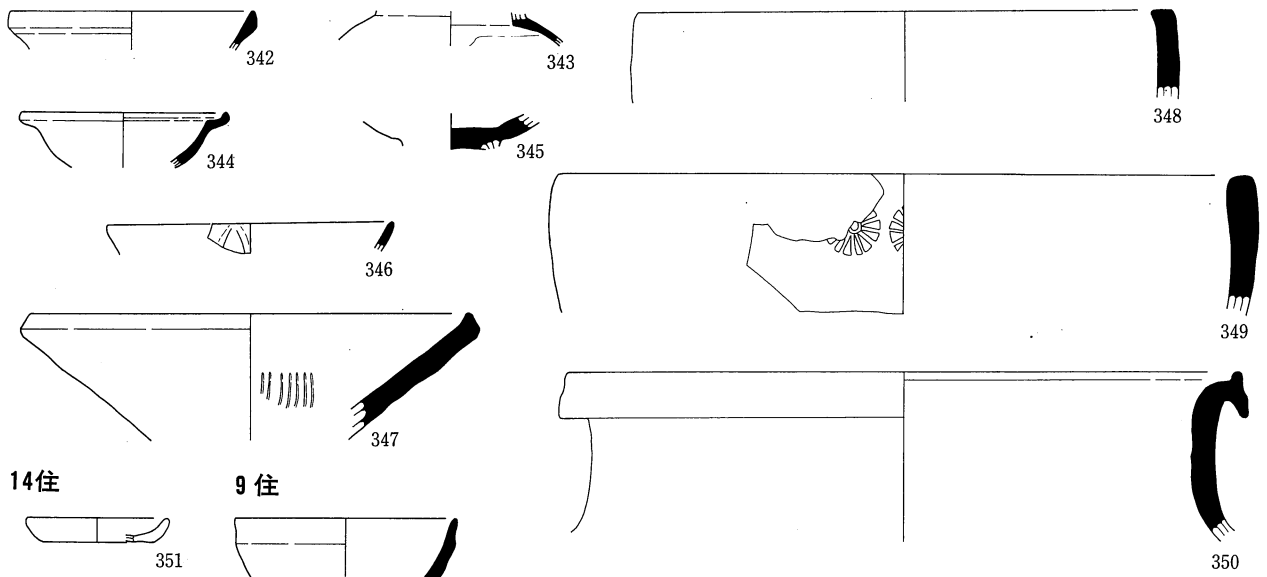
豎 1 (329~335)



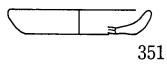
豎10 (336~341)



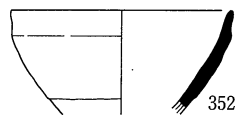
井戸 1 (342~350)



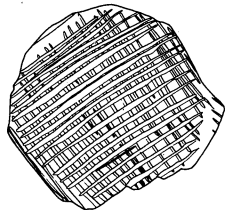
14住



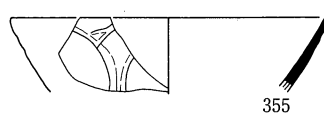
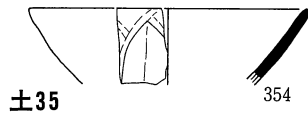
9住



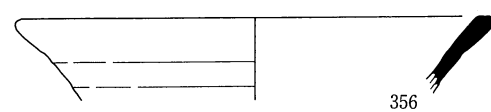
13住



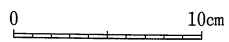
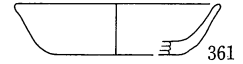
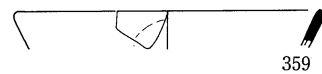
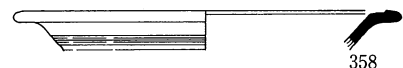
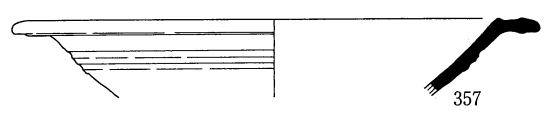
豎 7



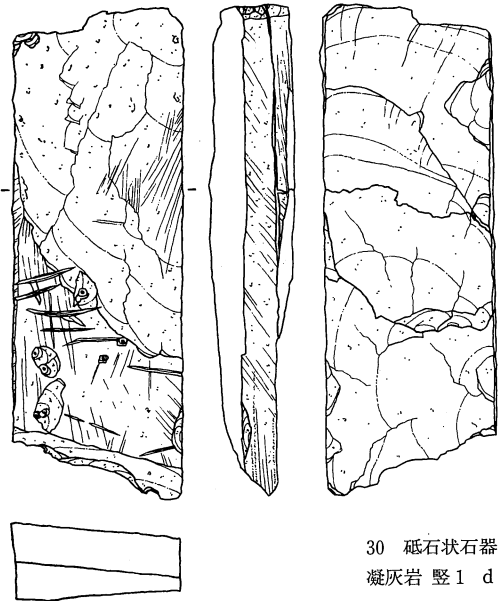
24住



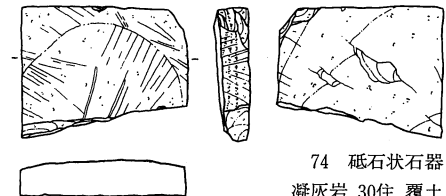
A区検出面 (357~361)



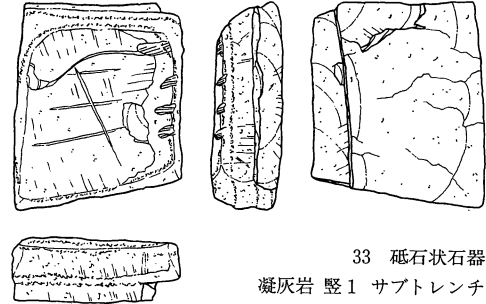
第33図 出土土器(9)



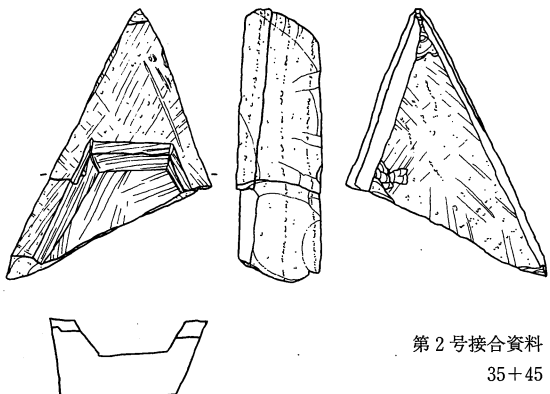
30 砥石状石器
凝灰岩 竪1 d



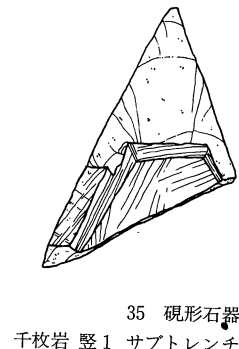
74 砥石状石器
凝灰岩 30住 覆土



33 砥石状石器
凝灰岩 竪1 サブトレンチ

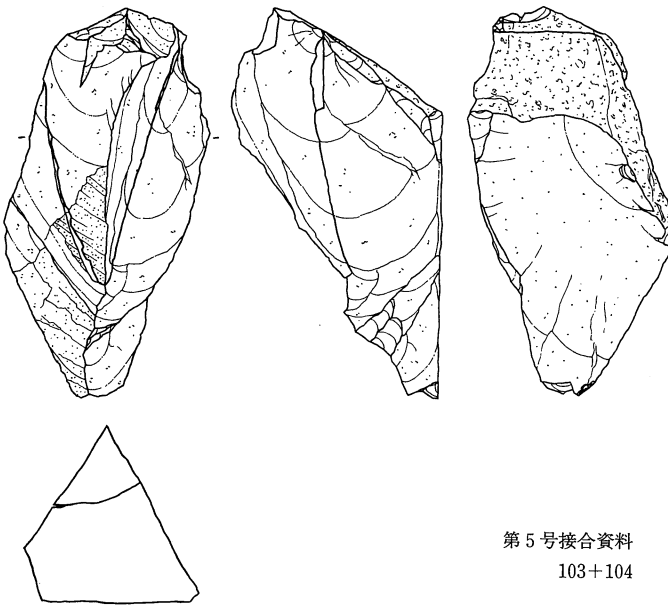


45 硯形石器
千枚岩 検出面

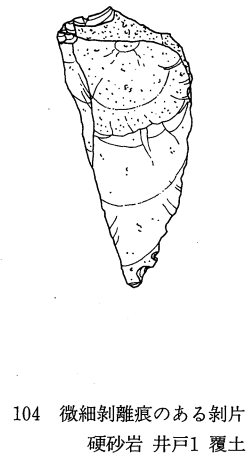


35 硯形石器
千枚岩 竪1 サブトレンチ

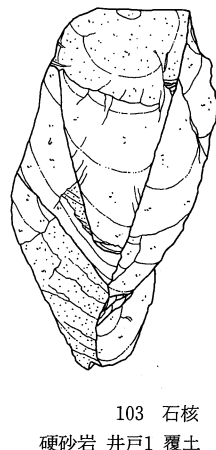
第2号接合資料
35+45



第5号接合資料
103+104



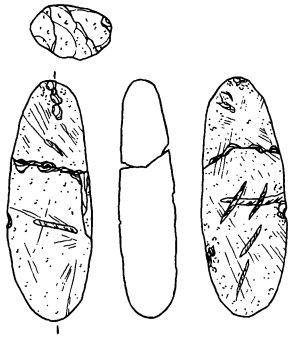
104 微細剝離痕のある剥片
硬砂岩 井戸1 覆土



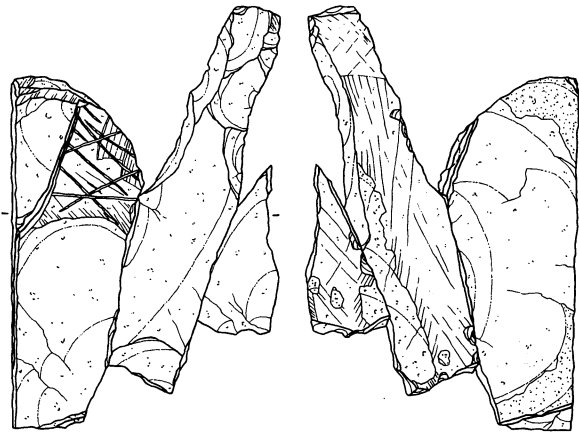
103 石核
硬砂岩 井戸1 覆土



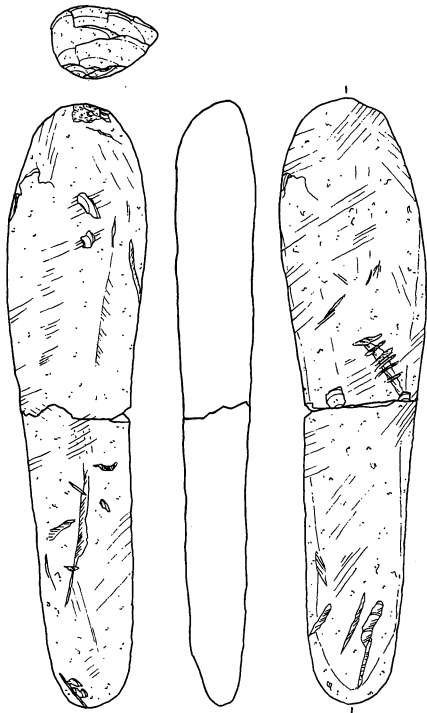
第34図 出土石器(1)



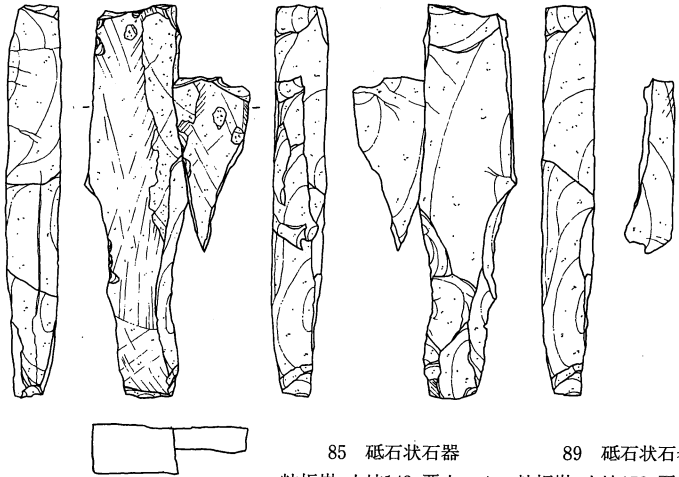
第1号接合資料
 12 礫石器複合 13 礫石器複合
 粘板岩 09住 南西 + 粘板岩 09住 南西



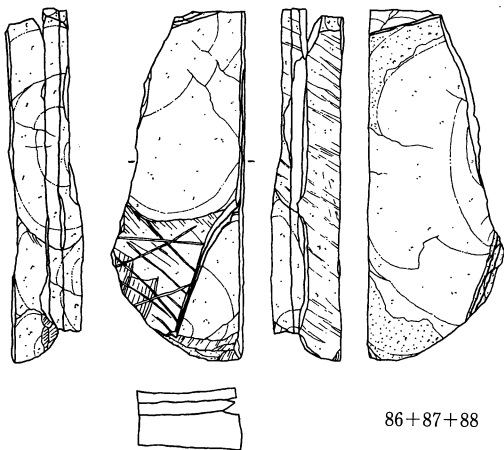
第3号接合資料
 85+86+87+88+89



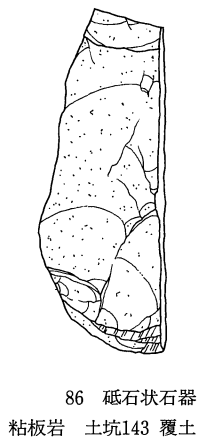
第4号接合資料
 91 礫石器複合 114 礫石器複合
 粘板岩 井戸 東 + 粘板岩 検出面



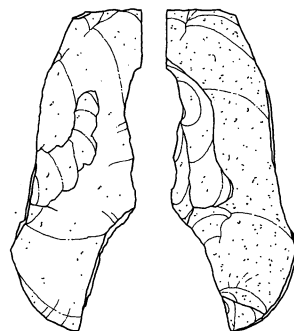
85 砥石状石器 89 砥石状石器
 粘板岩 土坑143 覆土 + 粘板岩 土坑152 覆土



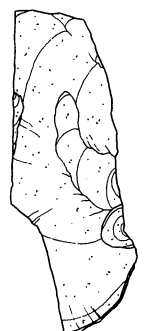
86+87+88



86 砥石状石器
 粘板岩 土坑143 覆土



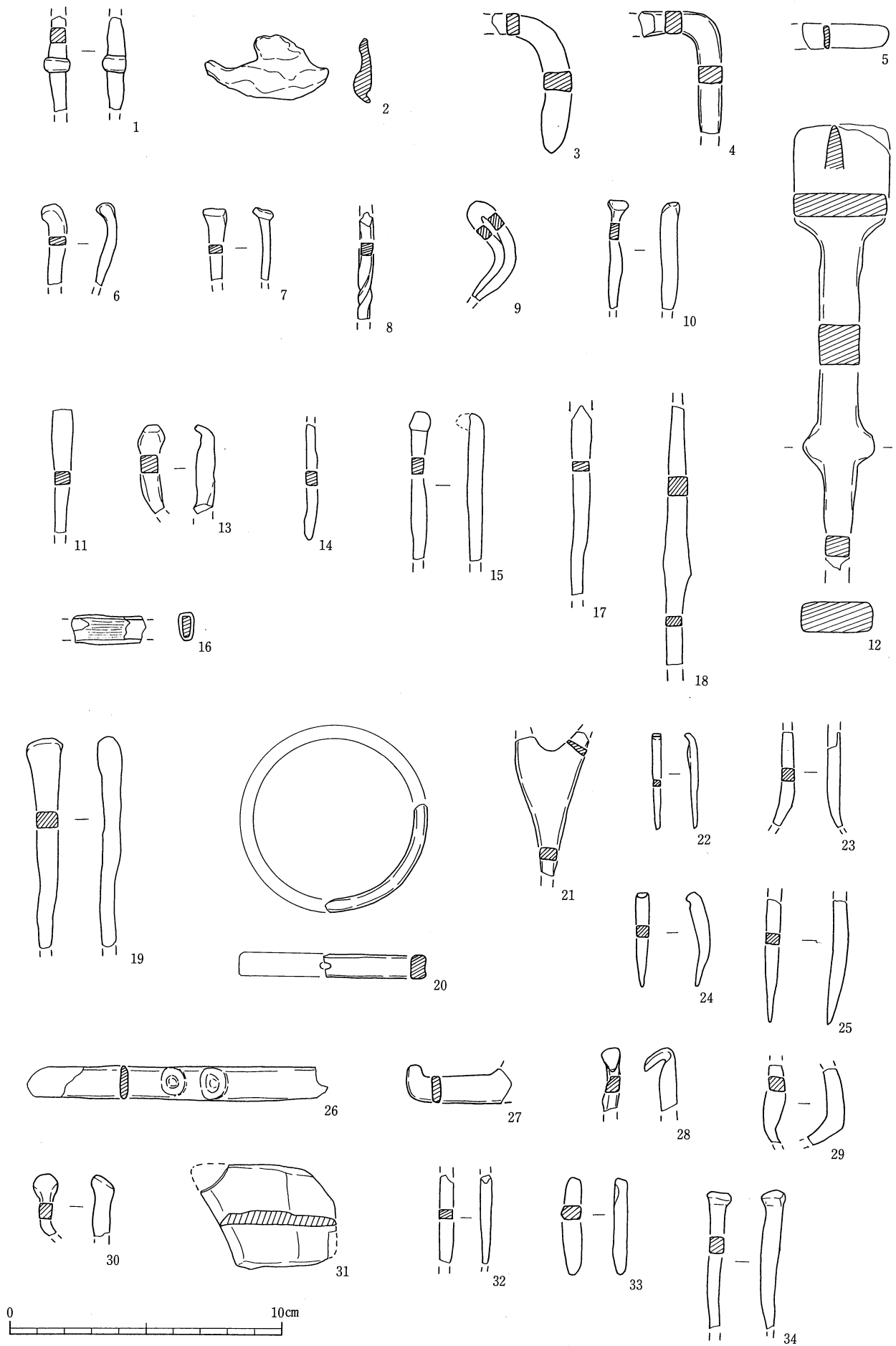
87 砥石状石器
 粘板岩 土坑143 覆土



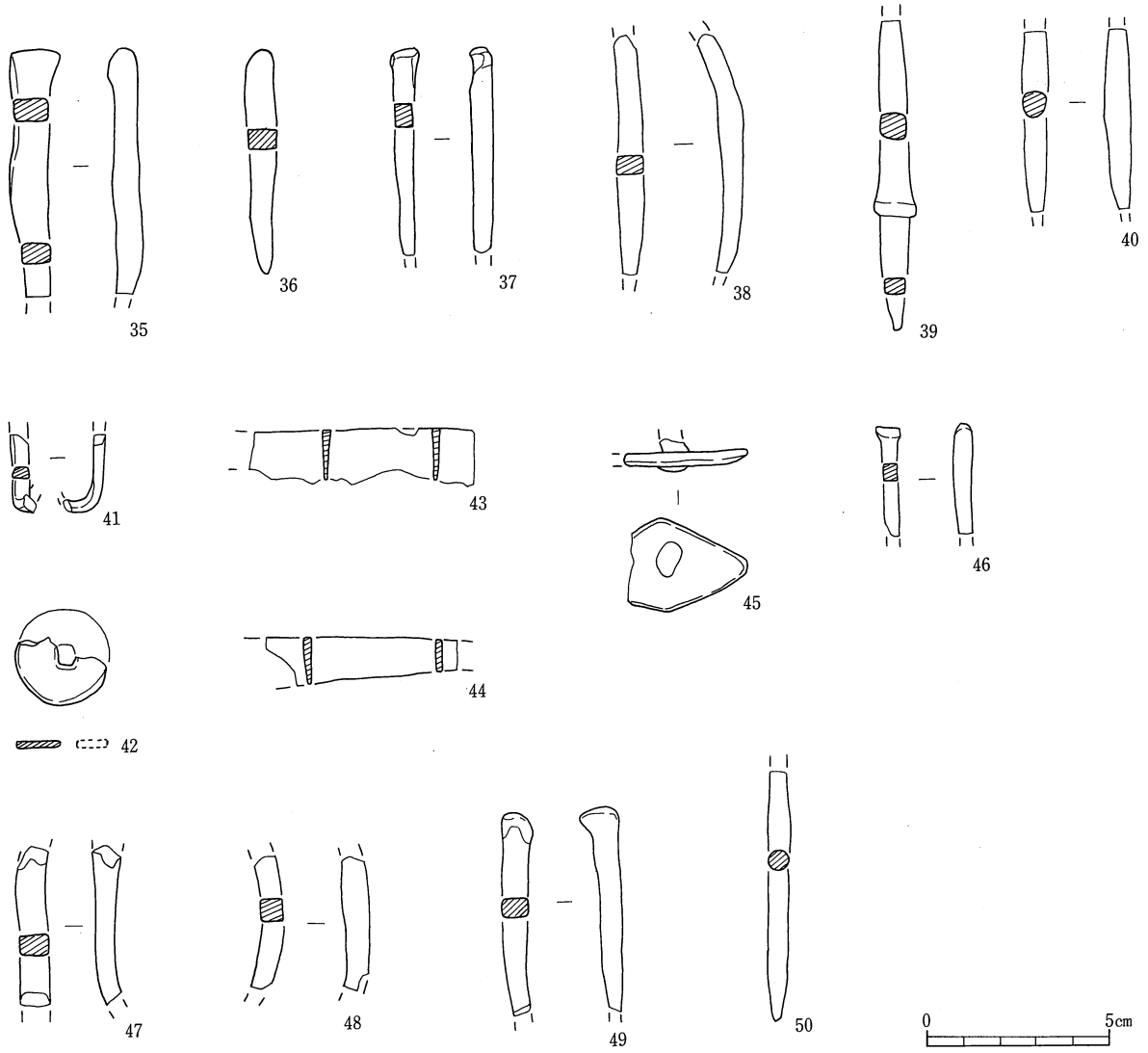
88 砥石状石器
 粘板岩 土坑143 覆土



第35图 出土石器(2)



第36图 出土金属器(1)



第37图 金属器(2)

写真図版



調査地区全景（東側上空から）



B区全景（上空から）



A区全景（東から）



A区西部



C区全景